

第9章 最高の州知事

——再びの杭州

■書米元章藏帖

げんゆう
元祐4 (1089) 年、そ しょく蘇軾54 歳。

4 月の終わり、蘇軾は杭州に向けて都を発った。同行したのは、次男の蘇迨、三男の蘇過、妻の王閏之、それに王朝雲、秦觀、胡宗愈といった人々であった（長男の蘇邁は地方の小さな官職に就いていた）。秦觀は秦觀（第7章19ページなど）の弟で、蘇軾のもとで勉強しようと杭州にまでついて行きしばらくそこに留まる。胡宗愈は同時期に陳州知事として赴任することになったので一緒に都を出た。

都から杭州までは2カ月余りの旅。その間にさぞや多くの詩を詠んだであろうと想像するのだが、伝えられる作品は1首もない。書簡類からは、5月上旬に南京応天府で張方平（蘇軾の大恩人）に会い、そこから陳師道（蘇門六学士の1人）と宿州まで一緒に行き、6月初めに楚州を通過して誰と誰に会い、秦觀の郷里の高郵に寄って誰に会い、6月12日に揚州で誰に会い、長江を渡ってから順に潤州、常州、蘇州、秀州を通過しつつそれぞれの地で誰に会ったといったことが、丹念に復元されている。その際に詩は詠んだけれど全て散逸してしまったのか、それとも、(友人を政争に巻き込

むまいと)本来は詩句を吐かずにはいられない口を敢えてぎしてしていたのか、そのあたりのことはわからない。

この文章は揚州で米黻^{べいふつ}の所蔵する書帖に書き添えたもの。米黻は第8章157ページで見たように、書家、画家、収集家の三冠の王者である。このとき章援^{しょうえん あぎな ちへい}(字は致平)が同行していて、章援は、親友から政敵に変わった章惇^{しょうじゆん}(第8章55ページなど)の息子で、第8章187ページで触れたように蘇軾が委員長を務めた科挙の二次試験の合格者である。

現代において絶妙な筆使い^{べいふつ}といえは米黻であるけれども、米黻が所蔵している書^{しょ}は真偽が半々ではなからうと、かねてから疑っていた。

元祐四年六月十二日、私は章援^{しょうえん}と一緒に揚州^{よう}で米黻を訪ねた。

章援が米黻にこのように言った。

「私は父からこのように聞きました。かつて、あなたは御自身で戸棚の鎖を解いて、中から書を取り出すと、それを両手で掲げて、他の人には一丈余りも遠いところから見させ、近づこうとすると叱りつけたと。父はそのようなありさまを目撃したということですが」。

米黻は笑い、ならばと、我々には、王羲之父子^{おうぎし}、張旭^{ちやうきよく}、懷素^{かいそ}といった人たちの書帖を十冊ほども見せてくれた。そして、米黻が普段人に見せるのは、衆人の目に適いそうなものだけだということがわかった。

(米黻は、面と向かってあからさまに物を言う若者がむしろ気に入る、また他ならぬ蘇

軾であるから、秘蔵のお宝を特別に見せたのだろう。米黻には、人から借りた書を何食わぬ顔で偽物とすり替えて返したり、船の上で貴重な品を見せられたときにいきなり胸に抱いて「これをくれなければこのまま川に飛び込む」と脅して強奪したりと、奇矯な振る舞いがあったという。それで、他人に見せるときには警戒して十分な距離を保ち、本当に大切な物は見せないようにしていたのだろう)

■杭州謝上表

7月3日、蘇軾^{こう}は杭州に着任し、そのことを報告する表^{さきげぶみ}を提出した。表は2通あり、其の一は皇帝に、其の二は高太皇太后^{こう}に差し出したもので、前者を読んでおこう。

其の一

臣^{わたし}蘇軾は申し上げます。伏して制書を奉じて、臣^{わたし}は竜図閣^{りゅうとくかく}学士^しから杭州知事^{こう}となりまして、今月三日に着任し終わりました。

臣^{わたし}は衰えかつ病み、満ちれば溢れて災いとなる言われる通りにもなろうかと、越州^{えつ}に出ることを願いましたところ、杭州を得ることとなりました。これは日ごろの望みに過ぎるものであります。臣^{わたし}蘇軾は誠に惶れ誠に恐れるものであります。頓首頓首。伏して念^{おも}いますに、臣^{わたし}は職を廃され外に出された身から、にわかに朝廷の要職に登り、命の限り働かねばなりませんのに、いまだに万分の一さえ償い終わっておりません。それでいながら、安きを思っ退くのはあつてしかるべきことであらうでしょうか。

つまるところ、有用性のない木はまともな木材にはならず、病んだ馬は空しく餌を食らうだけということなのであります。よって、外に出ることを願って、残りの歳月を送ろうとしたのであります。これまで要職に就くことを望んだわけでもないのにますます高い地位に登り、閑を求めつつも激務を与えられましたのは、皇帝陛下の剛健中正にして緝熙光明であられますことに伏して遭うことを得たからであります。古の聖天子のような仁と、孔子のような智を具えられた皇帝陛下のもとで、臣は猥りに末技をもって日々講義をさせていただき、凜然たる御威光に間近に接したのであります。古の人が批判をしただけでは何も成就しないと意味を臣は理解しておらなかったために、陛下がますます学問を深められるときにあたって、にわかに去らねばならなくなりました。こうしたことの意味するところを考えますに、臣は最も窮まったというべきであります。

陛下の恩遇は、それに耐えることができないほどにますます重いものがあります。雨露のようなわずかな施し物でありましても、臣が初めから選んだものではありません。犬や馬でも主人の恩には報いと申します。臣は身を殺してもそうせねばならないのであります。臣無任。

(これによると、蘇軾は越州を希望し、結果として杭州を得たとある。越州(紹興)は杭州の南にある古く由緒のある町ではあるが、宋の時代においては杭州に比べていささか見劣りがする。杭州は二度目の赴任になるので、それは難しかろうと越州を挙げたのだろうか。それに対して、高太皇太后が特に蘇軾の心の内を察して杭州を指定したのであろう)

■次韻秦少章和錢蒙仲

上の表^{ささげぶみ}で蘇軾が最初に希望したとする越州^{えつ}（紹興^{しょうこう}）には、都で親しくした錢勰^{せんきょう}（字は穆父^{あざな ぼくふ}）が知事として赴任していた（第8章208ページ）。その錢勰の子の錢蒙仲^{せんもうちゆう}が蘇軾の杭州着任に合わせて越州から訪ねてきた。これは錢蒙仲と秦觀^{しんでき あざな しょうしょう}（字は少章）が詠み合った詩に蘇軾が次韻したもの。秦觀が都からずっと蘇軾に従ってきたことは本章の最初で触れた。

こ^{こうなん}江南の地では、

みどり^{みどり}あぜ^{あぜ}、黄色^{うね}の隴、

稲は丘のように高く伸びあがる。

毎年の稔りは豊かであるから、

人々は和やかで情^{こころ}が通じやすい。

えつ^{えつ}越州では、

かん^{かん}湖^こに舟を浮かべれば、

天の外を行くような思いがし、

地上から古来ゆかしい^{つのはえ}角の聲が湧き上がる。

こう^{こう}杭州では、

山々は昔のままに故い^{ふる}国を囲んでいるものの、

城は昔^{あるじ}の主を失って空しく存在し、

西の陵を打つ潮の意はいまもって穏やかではない。

秦観と錢蒙仲は二羽の白鷺のようで、

江を隔ててその純白さを照らし合っている。

(1) これは越州と杭州、それに秦観と錢蒙仲を讃えた詩である。(2) 冒頭で江南のは豊穰の地であると歌っているが、必ずしもそうではない現実に蘇軾は着任早々に対処しなければならなかったことをすぐ後に見る。(3) 鑑湖は越州にある有名な湖。(4) 杭州を歌った中ほどの句の原文は「山圍故国城空在」(山は故国を囲んで城は空しく在り)で、「故国」の語は、五代十国時代に杭州に都を置いた呉越国の王族の末裔である錢蒙仲のために用いたもので、「昔の主」のいない城を「空しい」と歌っているのである)

■次韻錢越州

錢勰(字の穆父)の詩に次韻した。錢蒙仲が父の詩を携えてきたのだらう。

髯が自慢の都のお役人(錢勰)は、超然と群から抜きん出ている。

南に遊びに出たのは、ほかならぬ越州の名所雲門寺を訪ねるためだ。

思えば、

謫仙(李白)は玉皇(天上の最高存在)のそばにいようと仙界に帰り、

老鶴(白居易)は知事の車に乗って飛び去った。

貴君は、簿書の間で老いるのを悲しみ、
細かい業務はそれぞれの専門職に任せておけばよいことを知っている。
私の口にはどうやら棘が生えているのだろうか。
本来持っている性質はどうしようもなく、
貴君のせいで余計なひとことをまた言ってしまう……。

(1) 李白も白居易も中枢の人々に嫌われて都から追放されたことがあり、錢鏐せんきょうになぞらえている。(2) 終わりの部分の原文は「習気しゅうき因君よ又一言」(習気 君に因ってまた一言あり)で、「習気」は天性の悪い性質。都を出てからずっと口を閉ざしていたけれど、送られてきた詩に誘われてつい余計なひとことが出てしまったというのである)

■去杭十五年復遊西湖用歐陽察判韻

詩題は、「杭州こうを去って十五年、また西湖せいこに遊んだ。歐陽察判おうようさつばんの韻を用いて詠む」。蘇軾が副知事の任を終えて杭州を離れたのは、熙寧きねい4 (1071) 年秋であったから (第4章 193 ページ)、実際には 18 年が経っていた。歐陽察判 (察判は役職名) はいかなる人が不明。

私は南屏山なんびんざんの興教寺こうきょうじの金色の鯽魚ふなとはもとより知り合ひであるから、
またここに来て、欄干によりかかって、食事の余りを与える。
懐かしいこの場に帰って伝説を教わると、
前世においてここで手ずから経典を写したのを思い出す。

^{まこも}葑が広がって、平らな湖は久しく埋もれてしまっているようで、

豊年の歳を経ていながら人の暮らしは寂しげである。

^{とう こうてき}唐の高適は辺境の地で官職にあったときに、

自分は本来水辺で悠々と一生を送る者であったとしんみり歌ったのだが、
その心を哀れむのは誰なのだろうか。

(1) 歌い出しは、金色のフナに餌をやりつつ、18年ぶりに^{せいこ}西湖を悠然と眺めるとい
う閑適の詩であるかのように見えるが、後半はそうではない。マコモが広がって湖面が
埋もれてしまっているありさま、豊作であったはずなのに暮らしが寂しげなありさま、
この2点は現在直面している重大な問題を提起していて、蘇軾はこれからの任期中に
全力で取り組むことになる。(2) ^{とうだい こうてき}唐代の高適もまた静かな老いの日々を理想としながら
も^{りはく}辺境の地で奮闘したことを結びこ置いて、自身の決意を歌ったのだろう。高適は李白
や^{とほ}杜甫と同じ時代の人で、若い頃は博徒と交わる任侠の世界に身を置き、50歳を過ぎ
てから詩を学び、^{とうだい}辺境の地に自ら赴いて、格調高い詩を作った)

■送子由使契丹

弟の^{りょう きつたん}蘇轍はなおも都で朝廷の重職にあり、8月16日に遼国(契丹)皇帝
の誕生日を祝う使者に任命された。蘇軾は弟を送るこの詩を作った。

^{そう りょう}(宋と遼が皇帝の誕生日を祝う使者を交互に派遣していることは第8章 191 ページ
で見ている)

君と僕は、互いに雲を望み海を望むところに、身を寄せている。

君が遠くに行くからといって、僕は涙で^{ハンケチ}巾を濡らしたりはしない。

君は、駅ごとに馬を乗り継ぎ、風雪を凌いで行くことに尻込みをしない。

大切な^{りょう}のは遼国の連中に我等の文化がいかに優れているかを知らせることだ。

沙漠のなかで、宮中を照らす月を振り返って看くこともあるだろうし、

^{こう}杭州の春を思っ^て夢に湖や山を見ることもあるだろう。

もし向^{こう}の皇帝に君が何者であるかと問われても、

我が朝廷で第一の人であると正直に言ってはならない。

(1) 冬に向かう時期に北の国に行くので、「風雪を凌いで」と歌っているのである。

(2) 訳詩の4行目は原文よりかなり穏やかな言葉を使っている。原文は「要天驕識鳳麟」(天驕に鳳麟を識らせることを要す)で、「天驕」とは「天の下の驕った子供」、すなわち手なずけにくい異民族をいう。「鳳麟」とは、中国の文化を鳳や麒麟のような立派な動物に譬えたもの。要するに、ここにはいわゆる中華意識が露骨に現れ出ているのである。(3) 詩の終わりは、蘇轍が朝廷第一の人であることが向^{こう}の皇帝にわかってしまったなら、引き留められて帰ってこれられなくなってしまうのを恐れるという意味である)

■同秦仲二子雨中遊宝山

秦^{しんてき}覲と錢^{せんちゆうちゆう}蒙仲とともに雨の中、西湖^{せいこ}のほとりの宝山^{ほうざん}で遊んだ詩。

朝のうちに役人は全て散り散りになり、
 私も半日の閑を得たので、二人と同行する。
かきさぎ
 鶺鴒が、煙る雨の中で低く、あるいは高く飛び、
 山を廻る人が、樹林の間を出たり入ったりする。

■与莫同年雨中飲湖上

蘇軾と同じ年の科挙に合格した莫君陳ばくくんちんと、雨の中、西湖せいこのほとりで酒を飲んで、この詩を詠んだ。

(莫君陳はこのとき両浙路りょうせつろの要職ようしやくにあった。宋代の地方行政は路 - 州 - 県の三層構造になっていて、両浙路には杭州こうの他に、越州えつ、蘇州そ、潤州じゆん、秀州しゅうなど7州が属していた。杭州の町には両浙路、杭州、銭塘せんとう県の庁舎が置かれ、蘇軾ほどの役場の人とも交流があった)

ここに到って貴君に逢うのは偶然のなせるところなのだろうか。

夢の中で貴君と向かい合っているかのようだ。

いまやお互いに白髪頭。

私はまた西湖せいこにきて雨の中で一醉することとなった。

湖面たまに雨が珠のように跳ねるのを見ずにいたこと十五年である。

(終わりの句には、かつて杭州で詠んでかなり人口に膾炙した「白雨跳珠乱入船」(白雨う 跳珠ちやうしゆ 乱れて船せんに入る) という句 (第4章25ページ) を踏まえたもの。莫君陳ばくくんちんを喜ば

すために自己引用をしたのである)

■為法外刺配罪人待罪状

州知事は行政の長であるとともに警察・司法の長でもあった。権限が集中しているために判断を誤れば直ちに冤罪を生んでしまう恐れがあり、良心的な知事はいかにして公正な裁きを下すかに心を砕いた。蘇軾は杭州こうに赴任してまだ日の浅いころに、法に基づかない量刑を行って2人を断罪した。現代社会においてももしも類似のことをしたならば完全にアウトであるし、当時としても非常に問題のあることだった。法外の裁きをしたことを隠さずに朝廷に報告したのがこの文章である。

げんゆう元祐四年八月某日、りゅうと かくがくし ちゅうほうろうち こう竜図閣學士朝奉郎知杭州蘇軾は書状をもって申し上げます。

右の臣は杭州こうに入ってから、りゅうせつ両浙諸郡において、近年、民間の例として、ためし絹の粗悪品を上等品と偽って、朝廷に納付するものとして用意し、課税係の役人がその品質を吟味しようとすると、狡猾な連中が集まって騒ぎ立てて妨害し、結局よい絹が納められずに終わってしまうということがあったと聞きました。……そのために不足額が去年は九千余貫にもなったのであります。……

わたし臣は杭州に着きますと、この弊害を改めようと、絹を受納する役人を指揮して、品質の吟味を厳しく行うこととしました。七月二十七日、百姓ひやくせい(民間人)二百余人が受

納場所の前にきて(吟味を妨害しようとして)大きな声で叫び、その勢いに役人たちはたじたじとなり、さらに役所にまで入り込んで騒がしく訴えました。臣が理をもって諭しましたところ、皆は引き下がって去って行きました。それで臣はこの者たちは自分の意思で心を合わせて集まったのではなく、きつと悪たくみをする者がいてそそのかしたのだと知ったのであります。

密かに探究させますと、仁和県の陳皓から次のような報告がありました。「顔巽の息子の顔章と顔益が納めた五匹の絹は粗悪品でしかも丈が規定よりも短いものでありましたので、これを受け取らずに返したところ、この者たちは数百人を集めて、役人の前で声高に叫び散らし、どしどしと押し寄せて威嚇して後に去りました」。

臣はただちに人を遣わして顔章、顔益の二人を捕らえ、枷を付けて拘禁しました。すると、その後は人々はよい絹を納め、騒ぎ立てる者も一人もいなくなりました。

顔章、顔益を取り調べたところ、本来二人は絹三十七匹を納めるべきところを、粗悪な品を納め、そのために本州から国に納めるべきものが不足し、そこで別途好い絹を集めなければならなくなり、顔章等はそれを一匹当たり一貫で請け負い、やはり粗悪品を官に納めておりました。……(顔章と顔益、及び父の顔巽がしたことが詳述される)……、(私の判断で)顔巽は刺青をして本州内で牢に入れ、顔章、顔益は刺青をして滁州で牢に入れることとしました。父子は奸悪であることは衆人の恐れ憎むところで、下獄の日には土地の人々は喜んだのであります。

謹んで按じますに、顔益、顔章は卑賤の身でありながら、衆人を集め、手を挙げて一呼するだけで数百人がこれに従い、多数の勢いで官吏を脅かして制し、必ず

今後とも悪い絹を納めさせようとして、臣が前からの弊害を大いに改めようとするのを受け入れまいとしたのであります。情理ともに社会を蝕む大きな悪で、実に我慢ならぬ者であります。本州は法によって処罰を決めましたが、臣は独り次のように判断したのであります。

「顔章、顔益は代々の兇狡で、土地の人々を暗に支配しています。臂を振るって一声呼ぶだけで数百の者が従います。官吏を揺り動かして、官の仕事を脅かして制し、常の法に従っているとはいえ、その蠹む害は深刻なものがあります。そこですでに刺青をして牢に収監し終わりました」

そして、町や村に示して、今後はさらに絹の品質をごまかすことなく、官に納めるように知らせました。来年にはこれまでの弊害が完全に改まることを願うものであります。

臣は伏してこの書状をもって朝廷の御判断を仰ぐものであります。……臣が法に基づかずに顔章、顔益の二人を罪人としましたことをもって、今後の国法を重くされますことを願います。……

(1) 土地の有力者が、地方の行政官を抱き込んだり脅したりして、違法行為ぎりぎりの振る舞いをするのはいつの時代にもあり、中央から派遣された官僚はその扱いに手を焼いた。顔父子は代々官と民間の間に入って狡猾に暴利を貪り（蘇軾の報告書にはその手口が詳しく記されているのだが、当時の制度に無知な訳者は残念ながら正確に訳出することができない）、今後も社会に大きな害を為すとして、蘇軾は法の定めるところよりも重い処罰を下した。それは本来してはならないことであって、上の訳文の終わり方で、法を改めることを求めているのは、順序が逆転している。(2) 朝廷は蘇軾の判決を追認したもの

の、党派争いからんでこの問題はくすぶり続けることになる。蘇軾を嫌う人々は、当然ながら、この脱法行為をもって蘇軾を非難し、しばらく後になって、蘇軾の裁きは誤りだったとして顔父子は釈放されることになる。法によって救われた顔父子は意を強くし、以前にも増して横暴に振る舞って州政府を困らせたのだった)

■浣溪沙

9月9日の重陽ちやうようの節句せつこに、越州えつしやうの錢勰せんきやう（字あざなの穆父ぼくふ）にこの詞を贈った。

珠檜たま糸杉ひのき冷欲霜、（珠たまのような檜ひのきの葉にも糸いとのような杉ひのきの葉にも冷たい霜しもがつころ）

山城歌舞助淒涼。（山辺の町に聞こえる歌が寂しさをつのらせませす）

且餐山色飲湖光。（しばらくこの山の色を食べ、この湖の光を飲むとしよう）

共挽朱轡留半日、（ともに朱い車あかに乗って半日を過ごし）

強揉青蕊作重陽。（まだ蕾ちやうようの菊を無理にとって重陽の遊びをするのです）

不知明日為誰黃。（明日になって黄色く咲いてももう誰もいないのです）

■次韻答劉景文左藏

西湖せいこのほとりに有美堂ゆうびどうという有名な建物があつたことは第4章82ページ

などで見ているが、そこで宴会が催されたときに、隣の部屋りゆうきそんに劉季孫

（字あざなは景文けいぶん）が詠んだ詩が掲げてあつたのを見て、蘇軾はそれに次韻し

た。劉季孫はこのとき都から出向して杭州こうに来ていて、この後、蘇軾と深く交際するようになる。

我はもう老いたので、

これまで詩壇において立てていた旗を倒してしまった。

それでも、貴君の佳句を借りて、この良き時に詩を発してみる気になった。

とはいえ、いまの私が知っているのは、

杯の中の物(酒)を空からにすることだけで、

そのようなことは若い人々に教えてはいけないのだ。

夜の灯火は早く詩を作るようにと促し、

金色の光はもはや尽きようとしている。

まさに秋のたけなわ、

頭のかぶりものはすでに露でたっぶり湿っている。

好き語とはできものをかを爬くような心地よさがなければならぬ。

味わいのある語は形容しがたいもの、

心の内で自ずと知れるだけである。

(結局、「好語こうご」を発し得なかった言い訳をしたというのがこの詩のオチなのだろう)

■座上復借韻送崑嵐軍通判葉朝奉

有美堂ゆうびどうに人々が集まったのは、葉朝奉ようちようほう (朝奉は官職の名称) という人が崑嵐くらん

軍ぐん（軍は県と同レベルの行政単位の名称）の通判つうはん（副知事）として遠く離れた北西の地に行くのを見送るためだったようだ。上の詩の韻を借りて、葉朝奉のためにこの詩を作った。

雲の間に、貴君を乗せた白い馬と旗印むすが見える。
 ここ西湖せいこで酒を酌み交わしたことを忘れないでくれたまえ。
 貴君は向こうで、
 酔っての夢に、ここ呉山ごさんの道を越えて行くのを見るだろう。
 目が覚めると、酒樽の前にいるのは異国の婦人と少年である。
 あちらで酔えるのは、
 無事を知らせる夕べのろしの烽火が上がってからのことだ。
 春になって雁が帰ってくるときにも、
 あちらではまだまだ雪がさかんに降っている。
 軍務に就くのは楽しいのかそうでないのか、
 概略でもよいかから貴君の心を手紙で知らせてくれたまえ。

■跋劉景文歐公帖

先の詩で見た劉季孫りゅうきそん（字は景文）は歐陽脩おうようしゅうの書を集めた冊子しょを持っている。蘇軾はそれにこの跋文を書き添えた。歐陽脩はいうまでもなく大恩人である。

此の数十枚の紙は、どれも文忠公(欧陽脩)の口をついて出てきたことばを、手の動くままに記したものであって、初めから内容を考えて作ったのではない。その文章の采、字画のありさまは、どれも自然で、他人の及ばない姿がある。まことに天下の奇れた迹である。

■書文忠贈李師琴詩

これも欧陽脩に関わる短文。惟賢という僧が演奏する琴を楊傑(字は次公)とともに聴いたときのことを記した。

(楊傑は両浙路の地方行政官として杭州にいて、この後、蘇軾とたびたび詩を詠み合うようになる)

楊傑とともに惟賢師の琴を聴いた。惟賢師が詩を求めたところ、急なことだったので誰も応じる者がいなかった。

楊傑は、

「昔の人が詩を賦したのは、歌って学ぶためでした。何も新しいものを作らずともよいのではないのでしょうか」

と言って、欧陽脩が李師に贈った琴の詩を誦え、私にこれを書いて惟賢師に贈るようと言った。

元祐四年九月二十一日。

おうようしゅう
 (欧陽脩のもと^の詩はいまに伝わらないという)

■題損之故居

第4章 144 ページで9月9日に孤山^{こざん}の恵勤^{えごん}を訪ねた折の詩を見ているが、その詩は実は「六月六日、病をもって家にいて、独り湖のほとりで遊び、諸寺を訪ね、晩^{ばん}に損之^{そんし}に会った。戯れに七言絶句を作つて残した」という題であつたともいう。この短文は、損之が昔住んでいた住まいを訪ねて書いたもの。損之の詳しいことはわからないが、西湖^{せいこ}の畔に住む隠者で、一説には蜀^{しよく}の人であつたという。

げんゆう
 元祐四年十月七日、損之^{そんし}の故居に初めて来て、かつての跡を見てまわつた。

とうえんめい
 陶淵明はこのように言つた。

嗟歲月之遂往、(ああ、歲月も遂に往^ゆくのである)

悼吾年之不留。(吾が年の留^{いた}まらないのを悼む)

損之のような人でさえも留まらないのであるから、我らのような者はなおさらである。

蘇軾書す。

とうえんめい
 (陶淵明のこの句は、「斜川^{しゃせん}に遊ぶ」と題した詩の序文にある。斜川の遊びについては

第5章 331 ページで見ている)

■次韻錢越州見寄

えつ せんきょう あぢな ぼく ふ
越州の錢勰（字は穆父）（本章5ページ）から詩が送られてきたので、それに次韻した。

羊の群を射るのに巨大な弩を使う必要はない、
貴君にとっては、小さな州を治めるなど寝ながらでも十分である。

昼間も門が閉ざされているのを見て、
知事殿は病気なのかと心配するのは無用だ。

時に、堂々の賓客が車に乗って出入りしているのである。

貴君の方を臨んで頭を搔くと、秋風に無数の白髪が落ちる。

夜、眼を閉じれば、我が身の内に丹田はしかと存在している。

波瀾を静めようとするなら、すぐに退けばよいのだ。

言葉が多すぎて事に坐すのは私一人だけではない。

（(1) この詩は、蘇軾も錢勰も本意な情況に置かれていることを歌っているのだらう。(2) 後半にある「閉眼丹田夜自存」（眼を閉じれば、丹田は夜に自ずから在る）の句は興味深い。養生の秘訣として、夜中に丹田に気を送り込む呼吸法を実践していることを第6章409ページで見ている。それをずっと続けているのだらう。正しい気に満ちた丹田が自分の内に存在しているということは、自身が正しい生き方をしていることの証になるというのだらう。(3) 終わりの部分は本章6ページで見た詩と同じく、錢勰に本音を漏らしたのだらう)

■杭州題名

「題名」は寺などを訪問したことを記録した文章。簡単なメモ書きみたいなものであっても蘇軾が書いたとあれば珍重されたのだろう。

其の一

げんゆう元祐四年十月十七日、そうかい し曹晦之、ちようし そう晁子荘、じょとくし徐得之、おうげんちよく王元直、しんしょうしやう秦少章と一緒に来た。時に主僧は皆出ていて、庭戸は寂然としていて、しばらくここでぶらぶら徒倚した。
とうば東坡書す。

(同行の人々の名はいずれも字で記されている。あざな曹晦之とちようし ししやう晁子荘は詳しいことはわからない。じょとくし徐得之はじょたいせい徐大正(第7章94ページなど)で、かつてこう黄州知事の任にあったじよ徐大受だいじゆの弟で、蘇軾に会うためにこう杭州にきていたのだろう。おうげんちよく王元直はおうしん王箴で、すぐ後でまた登場する。しんしょうしやう秦少章はしんてき秦覲で、しんかん秦觀の弟である。以上の4人とともに蘇軾がどの寺を訪ねたのかは不明)

其の二

私は十五年前にあかさ藜の杖を手に、わらじ芒屨を履いて、なんざん南山、ほくざん北山を歩き来した。その間に棲む魚や鳥とも皆知り合いになり、ましてどうじん道人で知らない者はいなかった。再び来てみると、もうぜん惘然として誰もが老いていて、この歳月の流れを恨めしく思うのである。
し せん子瞻書す。

(第6章で見たように、当時三十代後半の蘇軾せいこは、西湖を囲む山々を縦横せいこに、寺という寺を訪ね尽くすくらいに歩いたのだった)

■書贈王元直

王箴おうしん あざな げんちよく（字は元直）に贈った三つの短文が残っている。王箴は蘇軾の妻の王閏之おうじゆんしの弟で、このころに郷里の眉州青神県び せいしんから訪ね来て、しばらく杭州こうに滞在した。

其の一

王箴おうしん あざな げんちよく、字は元直。小名は三老翁しょうみゆう さんろうおうで、そのときの字は惇叔じゆんしゆくといった。

元祐四年十月十八日夜、王箴と酒を飲み、齋菜なすなをつまんで食べ、非常にうまかった。それで蜀の巢菜しゆく そうさいをしきりに思い出し、しげしげちゆうぜんと懐然とした。

(巢菜そうさいは蘇軾の好物である郷里の野菜で、特に「元修菜げんしゆうさい」と名付けたことを第6章360ページで見ている)

其の二

王箴おうしん はくぼんは拍板(拍子木のような打楽器)を二組贈ってくれた。私のところに音楽を専門とする侍女がいると思ったので、そのような者は初めからいないのを知らなかったのだ。そこでこれを使うとなると、昔々かの傅大士ふ だいしが皇帝の前でこれを叩きながら『金剛經の頌こうきやう しょう』を唱えたのに付き従ひかないだろう。

げんゆう

元祐四年十一月四日夜。

(1) 大きな州の知事クラスになると家に歌妓を置くような例をいくつか見てきたが、この文章によるとこのとき蘇軾のところにはそのような女性はいなかったようだ。かつての杭州副知事時代には、王朝雲おうちょううんを身受けして家に引き取るようなこともしたのだが、黄州こうに流されて以降はそのような派手なことはしなくなったようだ。ただし、この数年後に、数年前には数人の妾しょうがいたと記しているので、詳しいことはわからない。

(2) 傅大士ふだいしは南朝の齊せいの時代の僧で、皇帝に『金剛経』を講義するよう求められたときに、拍板はくばんを叩きながら『金剛経』を讃える 49 の頌歌を唱え、そのまま去ってしまった。この故事はさほど有名ではないようなので、蘇軾の博覧強記は恐ろしいものがある)

其の三

げんゆう

元祐四年十一月二十八日、降っていた雨がわずかに雪に変わった。私は寒疾理由に家にいて、ごろごろして夜に至った。王箴おうしんと蜜酒みつしゅを一杯飲むと、醺然とろとろとしてたちまち酔いがまわった。自分で包丁を持って齋青さいせうを刻んで羹かみを作って食べるスープと非常にうまかった。帰郷した後にもこの味を忘れないでくれたまえ。

(1) 蘇軾は新しい土地に赴任すると、秋から冬にかけて体調を崩す傾向があるようで、11 月末ころからしばらく不調が続いた。(2) 蜜酒は蜂蜜みつしゅを水に溶かして発酵させた酒で、詳しくは第 6 章 292 ページで見ている。(3) 黄州こうに流されていた間に、蘇軾はいろいろと料理を工夫していたが、ここでも自分自身でスープを作っている。質素な

暮らしぶりが偲ばれる短文である)

■王子立墓誌銘

蘇轍の娘の婿である王適おうてき あざな しりゅう(字は子立)が10月25日に亡くなった。昨年の秋に王適が感傷的な詩を詠んだことを第8章214ページで見たが、自身の運命について何か予感するものがあったのだろうか。これは、王適の死から3年後、故郷の墓地に埋葬された際に蘇軾が記した墓誌銘。

子立しりつ いみな てき ちよう りんじようの諱は適、趙郡臨城の人である。

私が徐州知事であったとき、王適は徐州にきて私の学生となった。私は、王適が賢く、立派な文を書き、喜怒を表に出さず、いつも落ち着いていることを知り、「弟の蘇轍に似ている」と言った。それで、蘇轍の娘を王適の妻とした。

王適とともにその弟の王適おうきつ あざな しびん、字は子敏も私に従って呉興ごこう こ(湖州)に行き、二人の学道は日に日に進み、東南の人々は二人を賞賛した。私は呉興で罪人になり、親戚や友人は皆驚いて散り散りになってしまった。ただ王適は去ることなく、私を町の外にまで見送ってくれ、「死生、禍福はいずれも天の定めるところですせんせい。公がどうこうできるものではないでしょう」と言った。それから王適は町に引き返し、私の家族を南京応天府なんけいおうてん ふに連れて行ってくれた。

その後は、蘇轍が流されたのに従って高安こうあん いん(筠州)に行き、さらに績溪せきけいに移り、弟と労苦をともにした。粗末な家屋で、詩を賦し、琴を奏し、道を究め、書物を書くこと五

年に及び、怨んだり怒ったりするようなことは一度もなかった。

私と弟には六人の男子がいて、皆が王適に従って遊んだ。

学問にははかるべき学び方があり、人はそれぞれに自重し、遊情に流れてはならないのだが、王適はまことにきちんとしていた。

元祐四年冬、王適は都から済南に行こうとし、まだ到着する前に、奉高の駅舎で亡くなった。それは十月二十五日のこと、享年は三十五であった。

曾祖父は王璘、妻は田氏、祖父は王醜、妻は宋氏、父は王正路、妻は李氏。一人の娘がいて、生まれてまだ一年、そして生まれる前の子が一人あった。

文集十五巻があり、礼や服飾に詳しかった。蘇轍はその文章について、「朱弦疏越（質朴で余韻がある）、一唱して三嘆する」と評した。

元祐七年十一月五日、兄の王蘧、字は子開、が臨城の竜門郷両口村にある先祖の墓所の隣に葬った。

その墓誌銘に曰く、

知性以為存、(本性の在り方が大切であって)

不寿非其怨也。(寿命が短いからといって怨んだりしない)

知義以為榮、(義を知ることを榮えとし)

不貴非其羨也。(高い地位を羨んだりしない)

而未能忘於文、(学問を忘れることなく)

則猶有意於伝也。(世に伝わるべき意が残された)

嗚呼、百世之後、(ああ、百世の後には)

其姓名与我皆隱顯也。(その姓名も私も消えてしまっても、^{あらわ} 顕れるべきものがあるのだ)

■哭王子立次兒子迨韻三首

上の墓誌銘に記されているように、^{おうてき} 王適は蘇軾の息子たちと親しくしていた。蘇軾の次男の^{そたい} 蘇迨 (21 歳) が王適を哭する詩を詠み、蘇軾が次韻した。

其の一

^{ほうじょう じょ} 彭城(徐州)で初めて^{おうてき} 王適君と識り合った。

眼白く輝き、長くきりっとしていた。

それよりも前、私が^{みつ} 密州知事であったときには、

私は王適君とはまだ会ったことがなく、

その優れた言葉を聞くこともなかったのだが、

王適君は、

「夢で密州知事の婿になったと見た。どういことなのだろうか」

と、友人に告げていた。

君子が見る不思議な夢は必ず後に正しい兆してあったと知れるので、

果たせるかな、王適君は弟の娘の夫となったのだった。

王適君は礼の本質を知るだけでなく、

失われた詩の伝統を補おうと志していた。

おどろく
咄ばかりにその真髓せまに逼り、

世の諸生が並び行くものではなかった。

其の二

漢の時代りょうこうの梁鴻には、その高節めどらを慕って娘を娶せようとした人が大勢いた。

孟光もうこうという見目悪しき女性が、徳ある人でなければ結婚しないと聞いていると聞き、

梁鴻は孟光を妻に迎えた、

後に夫婦は山に入り、妻は機を織り、夫は詩を詠んで暮らした——。

王適君には梁鴻のような志があったのだが、

漢の大学者ようゆうの揚雄のように、息子を得ぬ悲しみを同じくしたのだった。

天の恵みが王適君に十分に及ばなかった恨みから、

私は長く王適君のことを思い続けている。

息子たちよ、ひどい悲しみ方をしないでほしい、

老いたこの眼は泣いてもう枯れ果ててしまったのだから。

王適君の死を悼む人々は、皆豪傑揃い、

誰も弱々しい感旧の詩を詠んだりもしない。

(「豪傑揃い」の具体的な名前として、蘇軾こうていけんは黄庭堅ちやうらい、張耒ちやうほし、晁補之しんかん、秦觀ちんしどう、陳師道を挙げている)

其の三

竜が気まぐれで魚に化けてみたら、
漁師に目を射抜かれてしまった。
羊がごさかしくも虎の皮をかぶってみたら、
豹と出会ってがたがた震えてしまった。
竜も羊もたちまち死んでしまい、
満足できない一生だったと天帝に訴えた。

天帝が言うには、

「花は風に吹かれて散る、

貴人の宴席に落ちて愛でられるのもあれば、

むさい厠に落ちて糞尿にまじるのもある、

わしが散り行く先を決めるのではない、

戯れに四方八方に矢を飛ばして遊んでいるだけなのだ」

王適君との歳月を顧みるに、

秋の風に黄色い葉が巻かれている……。

(この第三首は、「英雄欺人えいゆうぎじんの語、凡人の知る所でない」との評があって、全体としてわかりにくい。凡人にも及ばない訳者のよく解するものではないので、ひどい「ずっぱ訳」である)

■与錢穆父五十七首

えつ せんきよう あざな ぼく ふ
越州知事の錢勰 (字は穆父) (本章6ページなど) との間には頻繁な手紙の

行き来があり、錢こう廻宛てが57通残っている。その大半は蘇軾が杭州知事であったときのもので、これもその一つ。王適おうてきの亡くなったことについて記している。

近ごろ家からの報せがありました。王適君おうてきがにわかほうふに奉符で亡くなったとありました。そのためにここ数日はひどい悲しみでいっぱいです。貴公とも縁がありましたのでお知らせします。貴公は王適君のことをよく理解してくださっていましたから、さぞや寂しい思いを抱かれることであらう。弟の蘇轍りょうはいま遠く遼国に使者として出ている。帰ってきてこのことを聞いたなら、どれほど痛ましく感じますことか、想像に難くありません。王適君には一人の娘がいますが、男児はありません。痛ましい限りです。

多用な中で、そちらからのお使いの者が帰ると言っているので、十分に意を尽くせません。

(蘇轍りょうが遼国(契丹) きつたん への使者に任命されたのは8月16日で(本章8ページ)、実際に出発したのは9月半ばであったようで、王適おうてきが死去した10月25日にはすでに国境近くまで達していたであろう。王適死去の知らせがいつ蘇軾や蘇轍のもとに届き、この手紙をいつ書いたのかといった詳しいことはわからない)

■始於文登海上得白石数升如芡实可作枕聞梅丈嗜石故以遺其子子明学士
子明有詩次其韻

詩題は次の通り。「私は登州の海岸で白い石を拾った。ちょうど芡の実のようで、枕を作るのによいだろうと、数升ほど拾い集めた。梅丈が石を好むと聞き、その子の梅灝副知事に贈った。梅副知事が詩を作ったので、それに次韻した」。蘇軾が4年前の元豊8 (1085) 年の終わりにごく短い期間だけ登州に赴任したことは第7章 222 ページ以下で見ている。その折に海岸で白い小石を拾って持ち帰ったのだらう。梅丈の「丈」は年長者への敬称で、梅灝 (字は子明) の父の梅宣義である。梅灝は熙寧6 (1073) 年に科挙に合格したとあるので、蘇軾よりは後輩にあたり、このとき杭州副知事の任にあった。

海の片隅にある風変わりなものを珍重するのは誰なのか。

珊瑚だって贅沢を競うために碎かれてしまったのではとんだ災難である。

私もかつて怪石を仏寺に供え、

そこらにころがるがらくたを価値あるものであるかのようにしたことがある。

親に珍しい物を差し上げることが必ずしもよいわけではなく、

親孝行で難しいのはいかなる顔でそれをするかだと、孔子が言ったように、純心であることが何より大切なのだ。

世の人は珍しいものという遥か南方からもたらされると思いがちだが、

この白い石は東の海辺で拾ったものだ。

学士殿はこれでもって枕を作るのがよいだらう。

昔、^{こうこう}黄香という人は、夏の間は母の枕もとで扇ぎ続けたといけれど、この枕があれば扇を使う労は不要となるだろう。

(1) いろいろな故事を使った機知に富んだ作品として当時に人には面白い詩であったのかもしれないが、現代のわれわれにはわかりにくいので、その大意を汲んで訳した。2点だけ補足しておく。(2) 珊瑚を砕いたとあるのは南朝時代の石崇^{せきすう}の話。大金持ちの石崇は愚物の最高峰として蘇軾はよくその名を引いている(第7章76ページ)。石崇はもう一人の愚か者と贅を競い、相手が自慢する巨大珊瑚を目の前で叩き砕いて仰天させ、何食わぬ顔でそれよりずっと大きな珊瑚を出して、代わりにプレゼントした。(3) 蘇軾が怪石を仏寺に供えたことは、第6章288ページで見ている。そのときに物の価値はどこから生じるのかということ論じていて、この詩の内容と通じるところがある)

■文登蓬萊閣下石壁千丈為海浪所戰時^と有碎裂淘灑歳久皆圜熟可愛土人謂此彈子渦也取数百枚以養石菖蒲且作詩遺垂慈堂老人

上の詩と同じく、^{とう}登州の海岸で拾った石にまつわる詩。詩題は、「登州の蓬萊閣のもとに千丈に連なる石の壁があり、海浪の激突するところとなっている。壁はときに砕かれ、長い年月にわたってもまれ洗われて、円く愛すべき形になる。土地の人はこれを『^{だんしか}弾子渦』と呼んでいる。取ってきたのが数百枚あり、これで石菖蒲^{せきしょうぶ}を育てることにした。詩を作り、垂慈^{すいじ}堂老人に贈る」。蘇軾が登州の蓬萊閣を訪れたことは第7章227ページで

見ている。垂慈堂老人とは、^{こう}杭州にある^{せんけいこう か いん}千頃広化院の僧の^{りょうせい}了性で医学に通じ、草書を善くした。

^{ほうらい}蓬萊の海辺に、

^{ぎよく}玉が並び立つような峰々が、千古の昔より変わることなく連なっている。

峰の根は天を揺るがす波をも^{ふせ}捍ぐのだが、

ときに^{うんこつ}雲骨(峰の岩)が破碎されることもある。

^{ようこう}陽侯(波の神)によってと^{かど}がった角がそぎ落とされると、

石の内に籠っていた陰火が光彩を発するようになる。

累々と重なる弾丸(石)の間にも、

^{たま}珠と珠との微妙な繋がりをほのかに見てとることができる。

^{えんぶ}閻浮(宇宙)とは一つの^{あわ}漚でしかないのか。

真か妄か、果たしていずれがあるのか。

この石を持ち帰るなら、

私の袖の中に大海があることになろうか。

^{すいじ}垂慈老人の眼は、

^{あお うつむ}仰ぎ俯くあいだに天地のありようを見てとってしまう。

この石を皿の内に置くなら、

日々、山と海とに対することができるであろう。

来年には^{しょうぶ}菖蒲の根が張り、

石と石とが結びついてはどくことができなくなるだろう。

そこからぼんとう蟠桃(海に生じる仙果)が生じるかもしれないから、
朝夕に待ち望むがよいだろう。

(これらの作品を見ると、蘇軾かなりの石好きであったことがわかる。蘇軾は自然界の成り立ちや物質の変化に対して理系的考察を巡らせることが時々あり、蓬莱格の石の変遷から天地のありようについてある種の科学的インスピレーションを得たのかもしれない)

■六観堂賛

上の詩で見たすいじどう垂慈堂老人ことりょうせい了性はかつてろくかんどう六観堂を作り、六観堂老人とも称した。これは六観堂に寄せた賛。全て四言の句を並べた韻文で、飛躍のある言葉で、仏教的なものの見方、「六観」について詠んでいる。意味を汲み取るのが難しく、とりあえずそれらしく訳してみた。

われ我、ろくかんどう六観堂老人がみ衆生を観るに、

思っても思っても人は人、

人は昼は心を見ないし、夜はその身を見ない。

仏はそれを夢のようだという。

思慮もなく因果のことわりもない。

夢の中で覚めているようなもの、

どちらが形でどちらが^{こころ}神なのか。

我、六観堂老人が衆生を観るに、

いつも疑い^{おそ}怖れている、

泥人形はそうではなく、

こころの障りになるようなものはない。

仏はそれを幻のよう、愛や憎しみから永く離れよという。

画いた餅を見て腹を鳴らしても、

実際には何も無い。

我、六観堂老人が衆生を観るに、

あれを得たりこれを失ったりと止まるところがない、

それは何によるのか。

生と死があるからだ。

仏はそれを泡のようだという。

泡はもとより何にもならない。

壊れてしまうものから何かを生み出すのは、

仏といえどもできないのだ。

我、六観堂老人が衆生を観るに、

いつだって逆立ちしている、

光を無とし、影を^{ゆう}有としている。

仏は光は影、影は光といい、

我が仏に合掌する。

己から影を断ち切ろうとして、

日中走りまわったところでどうにもならない。

我、六観堂老人が衆生を観るに、

露と遊んでいるのと同じ、

衣を濡らし、眼を覆ったところで、

見る間に消えてしまう。

仏はそれを露のようだという。

ひとたび照らされると乾いてしまう。

覆われたものはすでに消え、

照らすものもまた空^{くう}である。

我、六観堂老人が衆生を観るに、

^{こころ}神は自在に通じ、

世界のどこへでも行く。

仏はそれを電光のようだという。

言葉を発すれば意^{こころ}に得て、

仏と衆生はすっかり一つになるのだ。

^{すいじ}垂慈老人はかのように六観について述べ、

一から六に至り、六は千万を生じ、

かくて無窮となって、乱れることはない。

とうぼ
私東坡居士には口がない、
だから此の賛は作れない。

■次韻毛滂法曹感雨詩

もうぼう あざな たくたみ
毛滂（字は沢民）が雨に感じる詩を作り、蘇軾が次韻した。毛滂とはかつてこう黄州で会っていて（第6章262ページ）、その後、蘇軾が都にいる間に毛滂が上京して再会し、このときは、毛滂はこう杭州で官職に就いていた。

もうぼう もういせん あざな こくちん
（毛滂は毛維翰（字は国鎮）の子で、毛維翰は蘇轍が筠州に流されたときにその地の知事を務め、蘇轍とさかんに詩を唱和し合った。毛維翰は退官するに際し、息子の毛滂を黄州に遣わして蘇軾に書しよを求めた。そのことがこの詩の始めと中程に詠み込まれている）

こうなん か こうし もうぼう
かつて江南の佳公子（毛滂）は、
私に錦繡の織物をもたらしてくれた、
それを手にすると温かくて春のようで、
公子の訪れによって寒さのあることを忘れたのだった。
いまも貴君は雨を禱る詩を詠むのだが、
雨は時に遭えば必ずと降り、
降ればたちまちあたりは濛々と潤うのであって、
敢えて星の動きから雨の気配を求めるまでもないだろう。

貴君は月の光に照らされ、
貴君の影が庭に落ちているであろうから、
ならば、李白りはくに倣って、月と影と我との三友の歡びを結ぶがよいだろう。
清らかな月の光さえあれば十分であるとはいえ、
やはり一酔してこそその歡びがあるので、
私はいつも酒樽が空っぽになっていらないかと恐れている。
酒がなくても楽しめるものがあるとすれば、
美しい珠たま、すなわち人の心を撃つ弾丸のような詩だ。
ただ私が恐れるのは、
貴君がはるか上空の雀を撃とうと不用意に弾を発してしまうことだ。
閑暇の折に、心の奥底に種子を蒔いてじっくりと育てるのがよいだろう。
世渡りに馴れて、嘘偽りであっても、空腹を満たすためならと、
食らったりはしないように。
私はあのときは東の坡おかにあって、
秋の菊を採って夕餉の膳とし、
近隣の人々のお蔭でどうにか衣服を揃えていた。
それを私は永らく恥ずかしく思い、
雪堂せつどうはようやく瓦で覆われたばかりで、
竹の蓆むしろはあっても葦の蓆はなかった。
それでも客人があるときには、なけなしの酒を飲み尽くしてしまい、

笑ってひっくり返るという次第で、
かくて五年の歳月を安らかに過ごしたのだった。
貴君は私の弟子というわけではないけれど、
我が衣鉢をほんのわずかなからも伝えようと思っている。
貴君の詩は孟郊もうこうや賈島かとうの類ではなく、
その師の韓愈かんゆのように悠然と流れる大河の勢いがある。
古い寺で悲しく詩を吟じるなら、
それに応じて雪が漫漫まんまんと降り注ぐであろう。
こうして私と詩のやりとりをしたことを、
どうか忘れることなく、遠い将来も思い起こしてほしい。

((1) この詩は、こう黄州での日々を回顧したり、若い毛滂もうぼうに向かって訓戒めいたことを言
ってみたりと、かなりごたごたしている上に、蘇軾の次韻の詩の一つの癖として、故事
のてんこ盛りになっていて、かなり理解しにくい。恐らく、この詩の背景に蘇軾と毛滂
の間では了解し合える何らかの事柄があつて、毛滂の心に響くところがあつたのだろ
う。毛滂との交流はこの後も長く続く。(2) 岩垂憲徳・積清潭・久保天随訳『蘇東坡
詩集』(1927年)はこの詩に対して、「感雨の意義は消滅して余事続出、詩としての感
興を求むるに苦しむ、蘇詩を扱ふもの取らざる所以である」と評している。本来は雨を
主題にすべきであるのに、それからはずれたことをごちゃごちゃ詠んでいて、蘇軾の選
集に入っていないのも当然だということである。そのように酷評されると敢えて訳した
くなるもので、かなり無理に文脈を整理してこの訳文を作ってみた)

■送鄧宗古還郷

鄧宗古とうそう こという当時評判になった孝子せいとがいた。成都かんの近くの簡州かんの人で、父が亡くなると、墓いおりの近くに廬いおりを結んで朝夕こくに哭した。そのことが次第に人々に知られ、都ほんちんにまで伝わり、范鎮はんちん（官界の大長老、成都出身で蘇軾の大先輩（第6章376ページなど））に招かれて上京した。ところが、折悪しく范鎮が亡くなってしまい、鄧宗古はその恩遇を得ることなく郷里に帰ることになった（范鎮が亡くなったのは昨年しんねんの閏12月で、蘇軾はそのとき祭文を作り、後に墓誌銘を記した）。蘇軾は同郷よしみの好ならびに范鎮との縁で、遠く杭州こうから鄧宗古に送別の詩を送った。蜀しよくの人で名高い2人の親孝行者を引いて鄧宗古を讃えている。

広漢こうかん せいと（成都せいとの一地方）に姜詩きやうし（後漢ごかんの人）がいて、

親孝行であることが村々に聞こえ、

豺やまねや虎とらのような赤眉せきびの反乱軍も、

姜詩がいる村を通るときには乱暴をしなかった。

その村にはいまも泉があるけれど、

孝心に感じて鯉が躍り出るようなことはもはやない。

南鄭なんてい（蜀しよくの東側りこうの地）に李劼りこう（後漢ごかんの人）という孝子がいて、

星の運行に通じ、

都からお忍びで二人の使者がきたときに、
流れ星を指さして、あらかじめこうなることを知っていたと告げて驚かせた。

李邵はしがらない門番として官に仕えることもなく、

襤褸をまといながら、立派な宝玉(名声)を得た。

蜀の地にはすぐれた士が多く、

貴君はまさに姜詩と李邵の二人の後を継ぐ者である。

りんりん ちほうぶんこう はんちん おひな
凜凜たる忠文公(范鎮の諡)は世に埋もれた士を探し求め、

樵人や漁夫にも及び、

清らかな川辺で真に美味な水草とうそうこ(鄧宗古)を見つけた。

ところが、歳晩に至ってついにそれを食べることがなかった(范鎮の死をいう)。

はたして水草の心はいかなるものであるのだろうか。

(泉から鯉が踊り出るとは、きょうし姜詩の有名な故事である。姜詩は妻とともに病気の母に
仕え、母の好物である魚を得ようと苦勞していたところ、家の近くに泉が湧き出して鯉
が飛び出し、それからは毎朝鯉が得られるようになった。こんな話を信じる人がいたと
いうのはいまとなっては不思議であるが、二十四孝の一つとして、日本でもよく教訓と
して引かれた)

■参寥上人初得智果院会者十六人分韻賦詩賦得心字

さんりょう どうせん
参寥師(道潜)の久しぶりの登場。参寥とはろざん廬山を出て後に別れ(第7章
31ページ)、こう杭州に来て再会した。参寥は10月にこざん孤山にあるちかいん智果院に入る

ことになり、16人の者が集まって参寥に詩を贈った。それぞれ韻を分けて詩を詠み、蘇軾には「心」の字が割り当てられ、それを「帰心」の語に用いた。

冬になると、
 みなぎる水はもとの谷に帰り、飛ぶ雲はもとの山を思うという。
 貴僧は家を忘れるべき僧であるに、
 なお帰ることを懐^{おも}う心があるのだらう、
 孤^こ山^{さん}の山谷に三間の幽寂の場を得て、
 数歩の地のうちに清深(仏教の真理)を蔵することになった。
 金^{きん}を集めたような盧橋^{らんきょう}の塙^{つみ}、
 火を散らしたような楊梅^{やまもも}の林、
 茶も筍もみな禅味があり、
 松も杉もまことの法音^{ほうおん}を鳴らす。
 雲のかかる崖に湧く水を参寥泉^{さんりょうせん}と名付けよう、
 流れ下る甘い酒のような水は、
 山を尋ねる人の心を洗ってくれるだらう。
 貴僧とともに嶺の上へと登るなら、
 老年に達しつつあることを忘れてしまう。
 ひと目の内に江湖^{こうこ}を呑み、

万象は遠い昔からこの湖の内に涵ひたされているのだ。

願うのは、

もう一つ小さな部屋を築いてくれまいか、

そこでざんばら髪となって自在に過ごすのだ。

■異鵲

すぐ かさきぎ
異れた鵲の詩。序文がある。

熙寧年間しんそう(神宗皇帝の治世)に、柯述かじゆつ(字は仲常)は漳州ちゆうじやうの副知事として飢饉を救い、民衆の信頼を得た。柯述が執務する庁舎に二羽の鵲かさきぎが棲みつき、柯述が州を去るときに鵲もまた見送った。漳州の人々は鵲かさきぎが異れていると感心した。そのことを詩に詠んだ。

昔、我が父は仁と孝を家においても実践した。

家には五畝ごの園があり、

桐の花が咲くころに玄鳳えんほうが集まり、

鳥と鵲が巢を作り、覗き見て手に取れるほどであった。

思い出すのは、

群がる雛を親鳥が養うありさまを、私や児童たちが観たこと。

近所の人たちは、これは珍しいと驚き、

老人たちは笑って感心しながらこう言った。

「いま乳哺こそだてのときで、

鳥は、鳶や蛇を非常に恐れます。

人の手足の及ぶところでは、

鳶も蛇も害を加えることはありません。

家の主人が信頼できる人であるのなら、

鳥も近くにたくさん集まってくるのです」

このことから私は、

まことのこころ
中孚化は鳥にも魚にも豚にも及ぶと知ったのだった。

かじゅう いにしえ じゅんり
柯述は古の循吏(誠実な役人)で、

その至誠にふわついたところは一切なく、

しょう
漳州に臨んでから、生命を全うさせた人民は、

河原の沙のように数え切れないほどであった。

柯述の仁心は人以外にも及び、

かきぎ
二羽の鵲がその庁舎に棲みついた。

残念なのは、鵲はものをいうことができなくて、

柯述に向かってただき き植植と鳴くだけだった。

善も悪も類をもって応じるとの古いことわざはうそではない、

こくり
見るがよい、酷吏(悪辣な役人)には行く先々で、

ほかの雛鳥を食らう鬼車ふくろうが声を合わせて鳴くのである。

(1) 蘇軾の生家の庭に鳥が集まって巣を作っていたことについて、別の文章では、蘇軾の母の心が鳥にも通じたと記していた(第1章77ページ)。ここではなぜか母ではなくて父になっている。事実としては、蘇軾が幼少のころは父は放浪の旅に出ることが多く、家のことは母に任せていた。ただ、父の至誠が母を感化し、それが鳥にも及んだと解することもできなくはないのかもしれない。(2) 善には善が応じ、悪には悪が応じるということで、循吏にはカササギ、酷吏にはフクロウが寄り添うと言っているのだが、フクロウは最初から悪だと決めつけられている。フクロウを知恵の象徴とする文化もあるのだが。(3) どうしてこの時期に柯述かじゅつを詩に詠んだのだろうか。確かなきっかけは不明だが、すぐ後で見ると、蘇軾はこのとき柯述の事績を継ぐような取り組みをしていた)

■次韻詹適宣徳小飲巽亭

都の御史台ぎょしだいで任に就いていた詹適せんてきが、何らかの理由で杭州こうに飛ばされたのだろう。西湖せいこを臨む巽亭そんていで蘇軾と酒を酌み交わして詩を詠んだので、それに次韻した。

貴君は、都を追われて南方に流された李白りはくを夢に見たと詩に詠み、

私は、都を追われて帰郷した司馬相如しばそうじょを想う。

貴君も私も三度左遷され、

都から遠く離れたこの地で一樽いっそんをとにもする。

ここでは、

川を遡る潮の音が雷のように白昼も轟き、

梅の枝に積もった雪のように黄昏どきにも花が輝く。

帰り行く貴君に降りかかる多情の雨、

それは御史台ぎょしだいの軒からしたたり落ちたものだろうか。

(川を遡る潮の音とは、せんとうこう 钱塘江の名物のかいしやう 海嘯 (第4章41ページなど) である。秋の大潮のときが最も激しく潮が遡り、この年は着任早々で海嘯をゆっくり見物する余裕はなかったようだが、翌年には見て詞を詠んでいる)

■東川清糸寄魯冀州戲贈

蘇軾こうが杭州副知事だったときから長い付き合いのある魯有開ろゆうかい あざな げんがん(字は元翰)

(第8章45ページなど)はこのとき冀州知事を務めていた。蘇軾しよく とうは蜀の東川せんの特産である絹糸を贈り、この戯れの詩を添えた。

東川とうせんの鵝溪がけいで産する白い絹糸は氷のように清らかである。

溪たにの上には千年の藤が枝を交える。

藤は谷底に芽生え、風雪に耐えて歳を経て後に、

たちまち竜のように天へと昇るのである。

私はただの老いぼれ役人、

骨身にしみる寒さに、

布団にもぐっても背中に棘が刺さるような痛さを覚え、

布を被ることを望むだけだ。

髯自慢の貴君ときたら、

ますます貴く、福祿は川の水のように増すばかりだ。

酔って毛皮をさかさまに著けると、

下からは粋な模様の小袖が現れ出るという伊達男ぶり。

この絹糸はやたらに織ったり切ったりせず、

そちらの佳^よい人の手にお任せしよう。

遙かに想像するのは、

清らかな暁に千騎を従えて貴君が出発するありさま、

老いも若きも町をからっぽにし、

積もった雪の上を静かに歩み行き、

白い髯の男やら紅い帯の女やらが柳の下に集まると、

貴君は東川の絹で作った小袖をちらりと見せるのだ。

貴君の髯は確かに老いはしたけれど、

町の人々は皆それを愛するのである。

ろゆうかい

(魯有開の髯自慢は第8章46ページで見ている)

■怡然以垂雲新茶見餉報以大竜団仍戲作小詩

かつて杭^{こう}州副知事時代に親しくした僧^{ほうごんいん}に宝巖院^{せいじゆん}の清順^{あざな} (字は怡然^{いねん}) がい

た(第4章63ページなど)。清順から宝巖院の垂雲亭すいうんていで栽培した新茶が贈られてきたので、宮中から賜った大竜団だいいりゆうだんの茶をお返しに贈り、この戯れの詩を添えた。なお清順が垂雲亭を建てたことは第4章121ページで見ている。

なんとまあ、お供え物がお寺から逆にやってきた。

この珍しいものは、どこぞのお偉いさんにでもさしあげるとしよう。

これは雀の舌のような細い芽を摘みとった茶。

そのお返しにするのは、竜がわたかまるような大きな塊の茶。

貴僧の庵は冬の暁にも暖かいけれど、

都の建物では春風も冷たく吹いていた。

いささか貴僧のお教えを請いたいと思うだけで、

二種のお茶の味比べを望んでいるわけではない。

■和錢四寄其弟龠

詩題にある錢四せんしは錢勰せんきやう（字の穆父あざな ぼくふ）(本章5ページ)のこと。錢勰が弟の錢龠せんに寄せた詩に和した。恐らく、このとき錢龠が杭州こうにきていて兄の詩を蘇軾に見せたのだらう。

私は(遡る潮の)波頭に月が湧くのを再び見ることになり、

貴君(錢勰)は長く留まって浙江(越州)の春を再び過ごすことになった。

ともに維摩の病を作る(仮病)のを得意としているだから、

この東西の二老人(蘇軾と錢勰)は実に笑うべきである。

(1) 維摩は釈迦の弟子で、維摩が病気になったときに文殊菩薩が見舞いに行き、深い内容の問答を交わした。その故事に基づいて、最も話をしたい友を呼び寄せるために仮病を装うことを「維摩の病を作る」とこの詩では言い表しているようだ。実際にこのころ蘇軾は体調を崩している(本章 22 ページ)。(2) 錢勰のいる越州は蘇軾のいる杭州から見て東南にあるので、「東西の二老人」といったのである)

■故周茂叔先生濂溪

現代のわれわれは朱子学の祖といば、周敦頤(字は茂叔、号は濂溪)で、その弟子の程顥、程頤兄弟によって発展・展開し、朱熹が大成したと図式的に理解しているのだが、朱熹より 100 年早い蘇軾の時代にはむろんそのような認識があるはずもなく、周敦頤はさほど目立たない儒学者であった。周敦頤は蘇軾が 38 歳のときに亡くなっていて、このころに周敦頤の次男の周燾と杭州で会ったことから、周敦頤の事績を詳しく知ることになったようだ。これは、周敦頤が廬山の蓮花峰の下に結んだ廬の前の谷川(濂溪)について詠んだ詩。

(周燾は第 8 章 187 ページで見たように、蘇軾が委員長を務めた科挙の二次試験の合格者である。周燾が杭州の天竺靈山教寺に遊んで詠んだ詩に蘇軾が次韻した作品が残

っているが、訳者にはその面白味が汲み取れないので訳せない。なお、しゅうとん い周敦頤の弟子のてい い程頤と蘇轍が鋭く対立したことは第8章76ページなどで見ている)

世俗の人は名めい(官職の名称)と実じつ(官僚の実務的才能)に眩惑され、

至人しじん(道を得た人、しゅうとん い周敦頤もその一人)は、名も実もそもそもその有無からして疑う。

世俗の人は怒ると水中の蟹までも憎み、

至人の愛は屋上の鳥にも及ぶ。

しゅう周先生のお蔭で、れんけい濂溪の水はいまや先生と同じように尊ばれている。

先生はもとより完全な徳を具えられた人で、

清廉にして早々に官職を退かれたのは、その徳のほんの一端でしかない。

わずかな禄米を擲って退隠したとうえんめい陶淵明や、

間違った世に生きるくらいなら餓死するのがよいと山に入ったはくい伯夷、しゅくせい叔斉に、

いさか似るのはたまたまのことである。

先生のことはいつしか世に知られるところとなり、

この溪を、先生が名付けたままに濂溪と皆が呼ぶようになった。

先生は我等のような俗人の仲間ではなく、

造物者をも弟子とするような人である。

先生が溪に名を付けた心は、

とう唐代のりゅうそうげん柳宗元が南方に流されたときに、

ぐけい溪を愚溪と名付けたのと同じであったのだろう。

（柳宗元は、蘇軾が黄州に流されたのと似て、時の権威者に嫌われて南方に追いやられた。そこで深い自省の日々を送って数々の作品を残し、韓愈と並ぶ唐代を代表する名文家と称されるようになった。そのなかに「愚溪詩の序」があり、自分の愚かさが溪にまで及んでしまうと記している。「濂」は、かすかな流れ、絶えだえな流れの意味であるから、「愚」と相通じるものがあるともいえようか。周敦頤がかすかな流れと卑下した学問の系譜は、後に朱子学の大河となった。なお、このころ蘇軾は柳宗元への関心を深めたようで、そのことを記した文章を後に見ることになる）

■次韻子由使契丹至涿州見寄四首

蘇轍が皇帝の使者として契丹（遼国）に派遣されたことは本章 8 ページで見たが、11月26日に涿州に至り、兄に詩を寄せた。涿州はすでに遼国の領域内で、遠く離れた南の杭州にいる蘇軾が弟のその詩をいつ詠んだのかわからない（蘇轍が帰国したと推測される翌年2月以降のことであるのかも知れない）が、それに次韻したこの作品は、あたかもスマホで瞬時に返したかのような内容になっている。

（弟のもとの詩は、涿州での所感を素直に詠んでいるのに対して、兄の詩は、次韻の詩によくある通り、韻に合わせて故事を引用していて、かなり苦しいこじつけもまざっている。4首のうち2首だけを訳す）

其の一

愚かな老人の僕は、

寒さを避けたいばかりにかつて契丹きつたんへの派遣を辞退したのだが、

弟までも同じようにするわけにはいかなかった。

君はもうすぐ盧竜ろりゅうに至って古い塞とりでを見るだろうから、

燕国えんの太子を弔う文章を記して易水えきすいに投げ入れたらよい。

(1) 蘇軾りょうが遼国に派遣されるのを辞退したことは第8章197ページで見ている。まさか寒さを理由に断ったわけではないだろう。蘇轍の詩の第一首の冒頭に「少年病肺不禁寒、命出中朝敢避難」(少わか年に肺を病んで寒よさに不わ禁いのだが、命ちゆうごくじられて中朝を出たからには敢えて難を避けるものではない)と、涿州の冬の厳しさを歌っている。それに対して、南の温暖な杭州こうにいる己をやや自嘲的に詠んだのである。なお蘇軾が少年時代に肺を病んだことについては第6章112ページで触れている。(2) 昔々の戦国時代に、涿州のあたりにあった燕国えんは西方しんの秦国の膨張拡大主義に苦しみ、秦国王(後しこうていの始皇帝)を暗殺すべく刺客を送り込んだ。そのとき太子えきすいは易水のほとりで悲愴な覚悟の刺客を見送った。蘇軾のこの詩は、よもや弟に遼国王の暗殺を勧めるものでないだろうけれど、穏やかならざる雰囲気がないわけではない)

其の三

君が毛皮をまとう姿はきっと美しいであろう。

遼国りょうの出迎えの人は、

しばしば我等父子三人の文章について問うとのこと。

あちらの人は知らないのだ、

僕がもう老いて病み、全くの役立たずであることを。

僕はお上に願って鏡湖きやうこのほどりに隠棲することしか考えていないのだ。

(1) 宋・遼間そう りやうには頻繁に使者が行き来し、使者が国境を越えると接待役（館伴使）が出迎えて、都にまで案内することになっていた。蘇轍を迎えた館伴使は、しきりに蘇洵じゆん、蘇軾、蘇轍の三蘇の詩文について尋ねたという。(2) 鏡湖きやうこ（鑑湖）が越州えつにある美しい湖であることは本章6ページですで見ている）

■贈南屏謙師

南屏山なんびやうざんの謙師けんしに贈った詩。南屏山なんびやうざんは西湖を臨む山。短い序文がある。

南屏山なんびやうざんの謙師けんしは茶事の妙所を得た僧で、このように言っている。

「これを心に得て、それに手が応じる。言葉で伝え、学んで到るものではない」

十二月二十七日、私が落星寺らくせいじに遊ぶと聞いて、謙師は遠くから来て茶を設けてくださった。それでこの詩を贈った。

道人けんし（謙師）は暁に南屏山なんびやうざんを出て、

茶三昧の手を見せてくださった。

驚くことに、

たちまち「うさぎ兔の毛のまだら斑」の茶葉が現れ出て、

甕からが鵝じしゆ児酒のような茶が汲まれたのだった。

てんたいさん 天台山の「にゅうか乳花の茶」は世にはもう見られないし、

ろどう盧全が七杯飲むと両腋に翼が生えるといった茶はもうないとされていたのだが、
実はここにあったのだ。

とうぼ東坡先生にはかの『ちやくきやう茶経』の続編を作ろうとの気があるので、

きっと老いた謙師の名は不朽のものとなるであろう。

(1) 「ともうはん兔毛斑」は優れた茶葉の形状の形容。「がじ鵝児」は優れた酒の色合いの形容でそれを茶に転用した。「てんたい にゅうか天台の乳花」よくわからないが、白い泡の浮かぶ茶が天台山でたてられたことがあったのだろう。とう ろどう唐代の盧全は茶の効用として、7杯飲むと翼が生えたような気分になるということを詩に詠んでいる。(2) 唐代のりくう陸羽の著作『ちやくきやう茶経』は茶について記した偉大な古典としていまも読まれている)

■太息一章送秦少章秀才

げんゆう元祐5 (1090) 年、そしよく蘇軾55歳。

前年の4月に都を発ってからずっと一緒だったしんてき あざな秦觀 (字は少章) (本章1ページ) が郷里に帰ることになり、この文章を記した。途中で「大きく嘆息する (太息)」という表現があることから、この文章の題を『太息』とした。

後漢の終わりに、孔融が盛憲(字は孝章)を魏の曹操に推薦した文章に、

「盛憲はまことに男児の中の雄者であります。議論を得意とする者は誰もが盛憲によって名声を得ております。ところが、現在の若者は先に世に出た者を誹謗することを喜び、盛憲を批判してばかりいます。盛憲は天下に名を重くされるべき人物であって、中国の人々は誰もが賞賛する人なのであります」

とある。(盛憲は呉郡の太守として名声があり、このころ勢力を拡大しつつあった孫権に嫌われていた。孔融は盛憲を救おうと曹操に推薦した。しかし、曹操が迎える前に盛憲は孫権によって殺されてしまう)

私は孔融の文章を読んでここに至ると、いつも書物を置いて大きく嘆息し、「ああ、英偉奇逸の人物はいつも世俗から受け入れられないものなのか。いまの世にも孔融や盛憲のような人はいるのだろうが、人を謗ることをもっぱらとする者もやはり腐った草木のように世の中に存在するのだ」

と、つぶやくのである。

昔、私が科挙に挑み、礼部の試験(二次試験)を受けたときに、欧陽脩は私の答案を見て、

「これは私の弟子が書いたものだ。私はこれを避けねばなるまい」

と、言った。(欧陽脩が自分の弟子を首席にするわけにはいかないと、敢えてこの答案を二位にした。そのために、かえって弟子が首席になってしまった(第1章64ページ))

まさにそのころは、士は美辞麗句を剽裂して文章を作り、欧陽脩が文学を改革しようとするのを挙げて非難していた。しかし、数年も経たないうちに、野に満ちていた水

が谷に帰るかのように、そうした連中は一人もいなくなった。

同じようなことがまたおこるのだろうか。

私はもはや老い衰え、学問をしなくなり、己を見てまことに不満足である。それでも、天下の人々が私を棄てることなく、ともに文学を盛んにしていこうと思ってくれているのは、いまもってやはり欧陽脩のお蔭なのである。

張耒ちやうらい あざな ぶんせん しんかん（字は文潜）、秦觀しやうかん（字は少遊）の二人は、士大夫の中でも超逸絶塵とくにすぐれたの者である。私一人がそのようにいうのではなく、何人もの者がこの二人にはとても及ばないと思っている。しかし、人はかつて聞いたことのないものに接すると驚いてしまい、まともな判断ができなくて、いい加減なことを言いつのる。この二人や私はいつもそうした目に遭っている。

欧陽脩はかつてこのように言った。

「士ひとが良質の金や美しい玉ぎよくのように、市場できちんと値が定められるものなら、愛憎をもって良し悪しをごちゃごちゃ言ったりはしないだろうに」

秦觀の弟の秦觀しんてきは私に従って遊ぶこと一年になろうとしている。秦觀の議論は日々進歩し、その見識は用いられるべきものがある。秦觀は両親のもとに帰ろうとして、しかしここから去りがたくしている。

ああ、君よ、行くがよい。帰って兄に学ぶがよい。私にはそれに付け加えるものは何もない。

私はこの『太息』の一篇を作り、旅立ちの餞はなむけとする。これは家にしまっておき、三年経ったら出して読むがよい。

げん ほう

元祐五年正月二十五日。

（1）この文章には、都で蘇軾が激しい批判にさらされていたことが反映しているのだろう。3年後に読むようにと最後に言ったのはなぜなのか。少なくともその間は学問に専念せよということなのか、3年もすれば批判の嵐も止むということなのだろうか。（2）

「私（わたし）はもはや老い衰え、学問をしなくなり」と記したことに関連して、この時期に秦觀しんてきが見たとされる興味深いエピソードがある。蘇軾の一代下かえんの何遜しゆんが記した隨筆しんてき『春渚紀聞しよきぶん』から引用する。

しんてき

秦觀がこのように言った：

そこう

蘇公（蘇軾）はかつて書物を観るみことの楽しみを語っていた。

「夜はいつも真夜中まで書物を読み、ひどく酔って帰ってきたときでも必ず書物を開き、疲れるまで読んでから眠ったものだ。しかし、お上の詔こうによって黄州を出て仕事に戻ってからは、一字も観る間がなくなってしまった」

実際に私が公に従って杭州こうに行っていた間も、公が書物を開くのを一度も見たことがなかった。詩を賦したり文章を書いたりするときに故実を用いるは、まるで目の前で見ているかのように事を熟知していた。それでも、私やその他の者に確かめさせてから人に見せるのだった。

蘇軾が書物を参照することなく故事を引用することは第8章80ページでも見ている）

■仲天貺王元直自眉山来見余錢塘留半歳既行作絶句五首送之

詩題は「仲天貺^{ちゆうてんきやう}と王箴^{おうしん}（字は元直^{あぎな}）は眉山^{びんちやく}から来て錢塘^{びざん}（杭州^{せんとう}）で私と
会った。留まること半歳で帰ることになったので、絶句五首を作って二人
を見送る」。蘇軾の妻の弟の王箴が杭州に来ていたことは本章 20 ページ
で見ている。仲天貺はこの詩に詠まれていること以外に詳しいことはわ
からないが、眉州眉山^び県の人で蘇軾の旧くからの知人なのだろう。

其の一

仲君^{ちゆうくん}は豈^が弟^{いで}多^た学^{がく}（柔和で様々なことを学び）、

王君^{おうくん}は清^{せい}脩^{しゅう}寡^か言^{げん}（すっきりとして言葉数が少ない）。

病後の私はちょっとしたことに驚く瘦せた鶴のように、
時が来たなら大空を飛ぶ^{おおぞり}鵬^{おおとり}のようにになれるのだろうか。

（「病後」とあるのは、このころ体調不良が続いていたことと、都から去らねばならな
かったことをいうのだろう）

其の二

海^{うみ}の縁^{のち}のここへ貴君^{きくん}らが遠く訪ねくるのを煩わせてしまった。

私も貴君^{きくん}らと同じ長江^{ちやうかう}の源から旅に出てそのままになっている。

この数篇の詩を作って見送るのは、

万里の道を手ぶらで帰らせないためである。

其の三

か^{しんてき}のとき貴君らと秦觀の三人がともに同じ舟に乗り、

月明かりのもので高楼のもとで泊まった。

三人が舟に乗って京口^{けいこう}に至るころに、

遙かに想ってくれるだろうか、

一人ここに残った私の枕もとに潮の音が響くのを。

(^{ちゆうてんぎょう}仲天貺と^{おうしん}王箴は^{しんてき}秦觀とともに^{こう}杭州を去るのだろう。^{けいこう}京口は^{ちゆうこう}大運河と長江の交差するところに位置し、そこから仲天貺と王箴は西に長江を遡り、秦觀は大運河を北上する)

其の四

貴君らをもっともっと引き留めたい……、

しかし、貴君らが故郷を出て年をまたいでいることを思わなければならない。

^{あいくるしいかお}犀顛玉頬の子供らが、

^{かげのおとこ}髯を懐^{おも}って長く悲しくしているのだもの。

其の五

私のために遠くから丁寧な心を寄せてくれるのは、

^{ぜいそうきょう}瑞草橋のほとりの老人である。

その白髪に紅い帯が映え、

白い濁り酒に新春の光が浮かぶであろう。

(この詩に詠まれている「老人」とは王慶源おうけいげんであると、蘇軾自身の注記がある。眉州びしゅう青神県の瑞草橋ずいそうきょうに隠棲することになった王慶源に蘇軾が瑠璃帯を贈ったことは第8章195ページで見ている。王慶源と王箴おうしんは同族であるので、王慶源へのメッセージを託したのである)

■寄蔡子華

上の詩に見た王箴おうしんに託して蔡褒さいほう（字は子華あざな）に寄せた詩。

これより22年前の熙寧元きねい（1068）年10月、父の喪に服するために帰郷していた蘇軾が都に向けて旅立ったときに、眉州青神県の蔡褒さいほうは荔枝れいじゆを自ら植えて、「この樹とともに貴公の帰りを待つ」と言って、蘇軾を見送った。

なつかしい方々が、

私が東へ行くのを見送ってくださったときに、

貴公は手づから荔枝れいじゆを栽え、

私が帰るのを待つと言われた。

荔枝れいじゆはすでに丹い実をつけるまでになっているだろうけれど、

私の髪は白くなり、なお帰れぬ旅人として江南こうなんの地にいる。

江南の春は尽きようとしていて、

西湖せいこに船を浮かべるなら、水は天に溢れるばかり、

しかし、我が腸はらわたは断たれる——

想いみるのは、

青衣江せい い こう せい しん(青神県を流れる川)のほとりの路、

白い魚に紫の筍、

安かろうが高かろうが、とにかく旨いのだからと、

真白い髯の三老人が味わっておられる。

三老人は霜を経た檜のようになお壮健である。

かつて交遊のあった人たちでいまの存命であるのは誰と誰であろうか。

昔々、蔡沢さいたくという人は占い師に己の運勢を尋ねたけれど、

蔡沢以上に長生きをしている貴公はもう訊くまでもない。

昔々、蔡経さいけいという人が心に想ったように、

仙女の麻姑まこの長い爪で背中を搔いてもらうような快感を、

日向の居眠りで味わって過ごすのがよいであろう。

((1)「真白い髯の三老人」とは、蔡褒さいほう、王慶源おうけいげん、楊宗文ようそうぶんであるという。王慶源は前の詩で見えており、楊宗文あざな くん そ(字は君素)もまた土地の名士であった。(2)後半は、いつものように同姓の人の故事を用いて相手のことを歌ったもの)

■鳥夜啼

「遠く寄せる」との副題のある詞。「遠く」とは故郷のことで、上の詩に

見た王箴おうしんと仲天貺ちゅうてんきやうに託して郷里の人に贈ったのだらう。

莫怪歸心甚速、(故郷に帰ろうとする心が、非常に速く行こうとするのを怪しまないでください)

西湖自有蛾眉。^{せいこ}(西湖を見ても私はそこに蛾眉山を見てしまいます)^{がびさん}

若見故人須細説、(もしも懐かしい方々があれこれ尋ねたなら)

白髮倍當時。(白髪が当時の倍になりましたと言ってください)

小鄭非常強記、^{しょうてい}(小鄭もいつまでも覚えているわけではありません)

二南依旧能詩。^{になん}(二南はそれでも昔のように詩を作ることができます)

更有鱸魚堪切膾、(故郷には刺身にして旨い魚がありますが)

兒輩莫教知。(そのことは言わない約束にしてください)

(後段の訳は自信がない。「小鄭」も「二南」も蘇軾自身を指すと解釈した。昔、鄭述祖^{じゅつそ}という人は9歳のときに、その父が光州^{こう}で石に刻んだ文章を記憶し、ずっと後になって自身が光州に赴任してその碑文を見て慟哭した。人々は父を大鄭、息子を小鄭と呼んだ。蘇軾はその小鄭のように記憶をいつまでも保っておけないとこの詞では言っている。杭州には周韶^{しゅうしやう}という詩が巧みな歌妓^{かき}がいて、二南と号していた。蘇軾は老いても、二南のように歌うことができるとこの詞は言っている)

■跋焦千之帖後

銭籛^{せんわ}(本章47ページ)が所蔵する冊子に記した跋文。それは歐陽脩^{おうようしゅう}の弟子であった焦千之^{しやうせんし}の手紙を集めたものであった。

おうようしゅう
歐陽脩が、

焦子皎潔寒泉水、しやう しろ きよ ふゆ
(焦君は皎く潔らかなこと寒の泉の水のようだ)

と、詩に詠んだのは吾が友、しやうせん し あざな はくきやう
焦千子(字は伯強)のこことである。

じょぶ どう しんみん さいなん せん お せつちゆう
徐無党(字は秦民)は済南の老先生で、錢龠(字は岳仲)は徐無党に師事し、徐無党は焦千子との間でやりとりした手紙を錢龠に示した。

焦千子が亡くなって十年になろうか。これをみ ちゆうぜん覧て悵然とする。

げんゆう
元祐五年二月十五日書。

(蘇軾がしやうせんし焦千之のことを「吾が友」と言っているのは、こう杭州副知事であったときに交流があったからで、焦千之にけいざん恵山寺の泉の水を所望した詩があった(訳出しなかった))

■臥病弥月聞垂雲花開順闍黎以詩見招次韻答之

詩題は、「月をまたがって病に臥せっている間に、すいうんてい垂雲亭の花が開いたと聞いた。じゆんじやり順闍黎が詩で招いてくれたので、それに次韻して答えた」。順闍黎(闍黎は僧侶の尊称)とはほうごんいん せいじゆん宝巖院の清順である(本章46ページ)。

せいじゆん
道人(清順)の心は水に似て、

あでやか花の妍さに照らされても、きまた道心が凝げられることはない。

この春の半ばに座禅すると、

かげ清らかな陰は月とともに遷ってゆく。

平生から不生不滅、あるいは一念の内に新旧が入れ替わることを知り抜いている。

じょうじょう ふうし
裊裊として風枝は挙がり、(やわらかな風に枝があがり)

りり にはがく かげ がく
離離として日萼は薦る。(じわじわと日が萼にかけげをつくる)

病中に詩を吟じるのは味わいが少なく、

老いてからの酔いはハイテンション 顛には至らない。

いまは、人々が見物するなかを、遊びに出るようなことはないだろう、

湖のなかの仙人のような僧はいつでもおられるのだから。

(1) 前半は清順せいじゆんのことを、後半は蘇軾こう自身のことを歌っている。(2) 蘇軾は杭州副知事時代に、知事と牡丹を見物して帰ってくると、街中の人々が道に出て二人の姿を見物したという詩を詠んでいた(第4章17ページ)。この詩の終わりの部分はその詩を念頭に置いている。(3) 昨年の暮れからの不調は、この詩を詠んだ後によりやく回復し、同僚と春を訪ねに出た。時すでに遅く、様々な花が終わって残るのは牡丹だけとなってしまっていた。そのことを劉季孫りゅうきそん(字は景文)が清順せいじゆんの詩の韻を使って詠み、蘇軾がまた次韻しているが、ここでは訳出しない)

■病後酔中

病の癒えた後で酔いに任せて詠んだ戯れの詩。

病がいつまでもこの身に居座っていた。

久しぶりに酒を入れると、

頭ほうほうの中で蓬蓬と声がるかのようだ。

笑ってしまうのは、

錢塘せんとう十万戸の民衆を、

官家かんけ(皇帝)はなんとまあこんな老書生に預けたのだ。

(1) 杭州こうの中心都市は錢塘せんとう県に属し、州の行政区域全域ではなく町自体を指すときには、蘇軾は多くの場合に錢塘と記している。とはいえ厳密に区別して使っているわけではない。ここで「錢塘十万戸」と言っているのは、かなり誇張した数字であろう。(2) 錢塘県のみならず杭州全域の民衆を預かった老書生は、この詩に詠んだ通りの体たらくだったわけではなく、実際には公務に奮闘中であったことを後に詳しく見る)

■次韻劉景文周次元寒食同遊西湖

劉季孫りゅうきそん (字は景文あざな けいぶん) と周燾しゅうとう (字は次元じげん) (本章 47 ページ) が寒食かんしょくの日に西湖せいこに遊んで詠んだ詩に次韻した。

柳絮りゅうじょが飛ぶ……

春の最もよい時節が過ぎ去って行く……

瀬を下る船のように、老いは速やかにやってくる。

酒を見て、もう寒食かんしょくが終わって「新火しんか」が過ぎたと驚く。

成都せいとでは杜甫とほにゆかりの浣花草堂かんかそうどうでの行事が行われているであろう。

山西さんせいの老将りゅうきそん(劉季孫)の詩は誰も敵う者がなく、

らくよう しゅうとう
洛陽の書生(周燾)の語はさらにあでやかである。

せいこ せいじゅん きんりょう
二人は一緒に西湖の北の山に二士(清順と参寥)を訪ねるといっているが、
船の舵やら太鼓の音で、

二士の清らかな眠りを妨げてしまうのではなからうか。

(1) かんしよく
寒食の3日間は火を使つての食事が禁じられ、4日目に初めてつける火を「新
か せいと とほ かんかそうどう
火」という。(2) 成都では杜甫がかつて住んでいた浣花草堂で1月2日から4月19日
までの間に様々な行事が行われた。故郷のことを想い、その流れで りゅうきそん しゅうとう
劉季孫と周燾の出
身地を挙げて、二人を褒めている)

■連日与王忠玉張全翁遊西湖訪北山清順道潜二詩僧登垂雲亭飲参寥泉最後過唐州陳使君夜飲忠玉有詩次韻答之

りゅうきそん しゅうとう せいじゅん きんりょう
蘇軾は上に見た詩を携えて劉季孫と周燾に合流し、清順と参寥を訪ね
たようだ。この詩の題は、「連日、王瑜(字は忠玉)、張璣(字は全翁)
せいこ ほうざん せいじゅん きんりょう
と西湖に遊んで北山の清順と参寥(道潜)の二人の詩僧を訪ね、垂雲亭に
さんりょうせん とう ちんししやく ほうしゅう
登って参寥泉の水を飲み、最後に唐州知事の陳師錫(字は伯修)の家に
立ち寄って夜に飲んだ。王瑜が詩を詠み、それに次韻して答えた」。王瑜
と張璣は官僚仲間で、垂雲亭は本章46ページで、参寥泉は本章40ペー
ジで見ている。陳師錫は唐州知事に任命されたので間もなく杭州を離れる
のだろう。

ほくざん

北山は高いといってもそれまでのこと、

せんじん

千仞もあったところで我が足の下におさまってしまう。

せいこ

西湖は広いといってもそれまでのこと、

万象もすべてが我が目の内におさまってしまう。

いまは雲が深いけれど、

堤の上にいる人も見えるはずだし、

いまは風が静かであるけれど、

谷に間にこだまする響きが聞こえるはずである。

君も私も誰もが無心に歩くに任せて行くと、

目に竹が見え、

竹の間で詩が鳴るのが聞こえるようになる。

それは二人の僧の声、

その眼の光は湖よりも清らかである。

二人は首を振る間に百篇の詩を作り、

二老おう じゆ（王瑜と張璠）もすぐにその後が続く。

なるほどここは仙界の池であったのか、

二羽せいじゆん きんりやうの白鳥（清順と参寥）が養われているのである。

山高いここで路が断たれ、

小さな垂雲亭すいうんていに皆が膝を突き合わせる。

夜になって三尺さんりやうせんの井戸（参寥泉）を尋ね、

玉のような水かめを瓶かめに半分ほど飲み干す。

明日の朝になると町からは糸管（楽器）の音が聞こえてくるだろう。

寒食のときにも、楽しく歌う者もあれば悲しく哭する者もある。

知事殿（陳師錫）はこの日することもなく座っていると、

招きもしないのに狂客（蘇軾等一行）が、

酒を満たした革袋を携えてやってきて、

啄木鳥（きつつき）のように門をけたたましく叩いたのだった。

この遊びも一瞬の後には過去になり、

覚めていようが夢を見ていようが、

どちらにしても永続することはない。

知事殿よ、

長江（ちやうこう）を渡って任地（ちんち）に行ってしまう前に、

さらに火を灯しての遊びをしようではないか。

どのような地位よりも楽しく笑うことの方がいいのだ、

百年の栄華を極めたところで、どうせ鬼籍（おに）に入ってしまうのだから。

■書參寥詩

參寥師（さんりやう）（道潜（どうせん））の詩に短文を添えて記した。

私が黄州（こう）にいたとき、參寥は吳中（さんりやう）から来て訪ねてくれ、東の坡（おか）に滞在した。

ある日、夢の中で参寥が詩を作るのを見た。目覚めてから覚えていた二句を記した。

寒食清明都過了、(寒食も清明も都べて過ぎたり)

石泉槐火一時新。(石泉も槐火も一時に新たになる)

それから七年後に私は钱塘(杭州)の知事となり、参寥は初めて西湖の智果院に居を定めた。智果院には泉があり、水は石の間を縫って流れ、甘く冷たく、茶によいものだ。

寒食の翌日、私は客人と舟を湖に泛べ、孤山から参寥に会いに行った。参寥は泉を汲んで火を付け、黄蘗茶を煮てくれた。そのときにはっと夢の詩を思い出し、七年前にいまのこのことを詠んだのだと知った。衆客は皆驚いた。いろいろな書物に伝わる不思議なことも実は虚語ではないのだろう。

元祐五年二月二十七日。

(1) 不思議な夢の話を書いた。疑えば、同行の人たちを喜ばせようと、蘇軾が話を作ったのかもしれないが、未来のことを夢に見ることがあると蘇軾は信じていたようだ。

(2) 参寥が智果院に入ることになったのは昨年の10月で、建物が完成して実際に住まうようになったのはここにある日付の2日前の2月25日であったという。ここにあらる泉を参寥泉と名付けたことは本章40ページで見ている)

■題劉景文所歐陽公書

病も全快し、久しぶりの杭州の春を満喫しようとしたのか、蘇軾はしばし

せいこ
西湖畔に遊んだ。この短文は、ようけつ あざな じこう
楊傑（字は次公）とともに、りゅう き ぞん
劉季孫（字
けいぶん
は景文）の家を訪ねて記したもの。楊傑の名は本章 17 ページですで見
ている。

おうようしゅう
歐陽脩の書をこれまでいろいろなところで見てきた。十のうち八ないし九までが、
官職を厭い、帰隱を願うといったことが記されている。しだいふ
士大夫は進みやすく、退き
難いことがよくわかる。こうせい
後生の者が立身出世に汲汲とするのを戒めるものとなろう。

げんゆう
元祐五年三月八日、たまたまようけつ
楊傑とともにりゅう き ぞん
劉季孫を訪問したところ、劉季孫はこの
書を出してきた。私も楊傑も歐陽脩にかつて会ったことがある。楊傑はおうようしゅう
歐陽脩の抵
しょうだんしょう
掌談笑(ユーモアに溢れた話しぶり)を見習ったのだろう、いつも人を感心させるものが
ある。

りゅう き ぞん おうようしゅう
(劉季孫が歐陽脩の書を所蔵していることは、すでに本章 16 ページでも見ている)

■題万松嶺恵明院壁

ばんしょうれい けいめいいん こう
万松嶺にある恵明院の壁に記した短文。万松嶺は杭州の町の南端にある
わ おいもん せいれい
和寧門の外側の西嶺の上にあつて、道を挟んで松が植えられていたので
この名があるという。

ほうじょう ちやうせい と たんよう ちん ほ し
私が一度ここから去って十七年、彭城の張聖途、丹陽の陳輔之と一緒にまたこ
に来た。

けいめいいん 恵明院の僧のぼんえい 梵英が屋根を葺いて堂宇を修繕したので、以前よりも堂々として清らかになった。

梵英は非常に香りの高い茶を出してくれた。

「これは新茶でありましょうか」

と、尋ねると、梵英は、

「茶の性として新旧を交えると、香りも味もまたよくなるものでございます」

と言った。

私はかつて琴についてよく知る者に会ったことがあり、その人は、

「琴は百年くらい経たないと、桐にもとのどがったせいやく 生 意が尽きることなく残っています。琴の音の緩急清濁は、桐が雨に撃たれ日光にさらされ寒暑に耐えてきたことと必ず呼応します」

と言っていた。

琴のこの理は茶とも近いものがあるのではなからうか。それで二つのことを並べてここに記しておく。

(1) ここに記されているほうじょう 彭城のちようせいと 張聖途とは誰なのか。蘇軾がじよ 徐州知事であったときに親しくしたちようてん き 張天驥 (字はあざな 聖塗) 、すなわちほうかくてい 放鶴亭の主人である (第5章310ページなど) 。蘇軾と11年ぶりに会うためにこう 杭州に来たのだ。彭城 (徐州) からなら都の方が近いのだが、朝廷の高官であったときには会うのが憚れたのだろうか。(2) もう1人の同行者はたんよう 丹陽のちんほ 陳輔 (字はほし 輔之) で、その人となりは次の文章に記されている。丹陽は長ちよう 江より南の大運河沿いの町で、蘇軾は何度も訪れているから、以前から交流があったの

だろう。この2人に限らず、杭州知事となった蘇軾のもとにはいろいろな人が頻繁に訪れ、蘇軾の詩文も都こいたときよりも精彩に富んだものになる)

■陳輔之不娶

上で見た陳輔(字は輔之)について記した短文。必ずしも同時期に書かれたものではないが、ついでに掲げておく。

九江出身の陳輔には、昔々の廉潔の士である於陵の陳仲之の節操が具わっている。ただし、陳仲之と違って妻を娶らず、子もない。

陳輔は言う、

「それはむしろ私の罪です」

「貴方には養子があるのではなかったのでしょうか」

「います」

「だったら、唐代の元徳秀や元結と同じではありませんか」

陳輔は笑って、

「昔を見たら、賢人はたくさんいます。似たところがあっても自分が賢人であるとは限りません。それにつけても、陶淵明はわけのわからなことを言っています。飢えに耐えながら、昔の賢人を思うと、人を飽かしてくれると……」

陳輔はいまは丹陽の南郭に住んでいる。

(1) これは、蘇軾流の知的ユーモアを味わうべき短文であるのだろうが、訳者は知的

レベルが違い過ぎるので、かなりの意識をした。(2) 於陵の陳仲之は『孟子』に出てくる廉潔の士。ただし、人間社会の改良を目指す孟子は、陳仲之のことを蚯蚓のようなものだと批判している。それを引き合いに出して、同姓の陳輔を讃えるというのが蕪絳流のユーモアなのだろう。(3) 陶淵明は、昔の人の優れた言葉を聞くと、心を満たしてしばし飢えをも忘れられるということを言っている。(4) 陳輔は丹陽の南郭に住んだことから、南郭子と号したという)

■次韻送張山人歸彭城

張山人、すなわち張天驥(字は聖塗)が彭城(徐州)に帰るのを見送った詩。

羨ましいのは、

繋がれることのない小舟のような貴君の身、

飄蕩と錢塘(杭州)にやって来て十日ばかりを遊んだ。

水は禅心を洗うためのもの、

貴君の眼はすっかり浄められた。

山は詩筆に供えるためのもの、

貴君の眉はすっかり愁いを帯びたのだった。

雪の中で興に乗じてこちらに来ようとしたのは、

ほんの思い付きであったのだろう。

春が終わって帰ろうとするのは、
もうはっきりとそう思い定めたのである。

私はいつしかはんれい范蠡のように、

官職などは投げ棄てて鮮やかに実業家に転身し、
一万匹の魚を養う池、一千本の橘を植えた林を持つ身にでもなりたいと、
思ったりもしているのだが、
はて、どんなものだろうか。

(最後にはんれい范蠡を持ち出したのは唐突な感じがするが、ちょうさんじん張山人との間でそのような会話が
交わされたのだろう。范蠡は、えつおうこうせん越王勾践に仕えて仇敵の呉を滅ぼしたが、勝者となつた
越王がすぐに驕った態度を見せるようになったために、越王のもとを去って実業家
に転身して大成功した。蘇軾にとって范蠡は気になる人物であったようで、范蠡の生き
方に批判的な文章と好意的な文章を記している。官界でつまらない争いに巻き込まれ
ている蘇軾は、時折、先祖と同じく商人としての人生もあったのではないかと夢想する
こともあったのだろう。官員であろうが商人であろうが、どちらにしても繋がれない小
舟きょしゅう(虚舟)の張山人とは無縁であろう)

■南柯子

「晩春」という題が付いている詞。

日薄花房綻、(軟らかな日に花がほころびます)

風和麦浪輕。(風はなごやかで、麦の浪が軽やかに動きます)

夜来微雨洗郊坰、(夜に降った小雨が郊外の景色を洗ってくれて)

正是一年春好、(まさに一年のうちの春の好いとき)

近清明。(清明も近いのです)

已改煎茶火、(茶を入れた火を改めて)

猶調入粥餠。(さらに粥を煮ましょう)

使君高会有余清、(知事殿の集まりは清らかで)

此楽無声無味、(この楽しみは声もなく味もなく)

最難名。(最も名付けにくいものなのです)

■聖散子後叙

上の詞などを見ると、蘇軾は杭州に赴任してから、士大夫仲間と詩を詠み合って呑気に遊び暮らしていたとの印象が強められるのだが、実際には州知事としての仕事に精力的に取り組んでいた。公人として何をしていたのか、その概要を知るために、弟の蘇轍が後になって記した「亡兄子瞻端明墓誌銘」から関係する箇所を読んでおこう。

元祐四年、兄は杭州に着任した。土地の役人や民衆は兄の政治にはかねてから馴染みがあったので、何の苦勞もなく治めることができた。

たまたまひどい日照りとしの歳に当たり、飢饉と疫病の流行が同時に起こると予測された。兄は朝廷に願って国庫に納めるべき米のうちの三分の一を免じてくれるよう願った。そうすれば米価の高騰を防ぐことができる考えたからだ。また度僧牒どそうぢょう(正式の僧侶であることを国が認める認可状。寺院側はそれを得るためには金銭を納める必要があり、このころは1枚が錢170貫に相当した)を国から百枚得て、米に換えて飢えた者を救おうとした。

明るる年の春になると、常平米じょうへいまい(倉庫に蓄えていた米)を放出して米価を下げ、民衆は日照りの苦しみを免れることができた。また、兄は、粥と薬をたくさん用意し、役人とともに医者を派遣し、病人を収容する小屋を作って治療に当たらせた。それで生き延びた者が大勢いた。兄は「杭州は水と陸が接するところで、他の土地よりも疫病で死ぬ者がいつも多い」と考えていて、寄付金二千貫を集め、それに私財から五十両を加えて病院を作り、若干の資金と食糧を蓄えて、いつでも疫病の発生に備えるようにした。その病院はいまでも続いている。

秋には大雨となり、太湖たいこが氾濫して農地に被害が及んだ。兄は翌年には必ず飢饉がくると予測し、朝廷に、国庫に納める米の半分を免除し、多数の度牒を出してもらえるよう要請した。それによって常平米や備蓄米を買い入れて、翌年には安く売り出せるよう準備しようとしたのである。朝廷は兄の要望の多くに従い、呉越ごえつの民は流散することを免れた。

杭州はもともと川と海であったところで、水に塩分が混じり、人が住める場所が少なかった。

唐とうの時代に知事の李泌りみつが始めて湖の水を町に引いて六つの井戸を作り、人々は十分に水を使えるようになり、それで井戸の周囲に人が集まり住むようになった。次いで、白居易はくきょいが西湖を浚い、西湖の水を運河に入れ、運河から田に入れ、一千頃の農地に灌漑水がゆきわたるようになった。湖には水草が多く生えるので、唐代から錢せん氏の呉越国の時代に

かけては、毎年水草を刈って、湖の水域を確保していた。ところが、近年はそれをしなくなつたために、湖はどこも水草で覆われ、水域がほとんどなくなってしまうくらいになった。それで運河に湖からの水が行かなくなり、川から水を入れるようになった。その水には潮で上がってくる砂が混濁しているために、運河で船が航行できるようにするには三年に一度は浚渫しなければならず、町にとって大きな負担となっていた。また六つの井戸もほとんど涸れかけでしまっていた。

兄は杭州にくると、茅山ぼうざん えんざうと塩橋の二つの運河を浚渫し、茅山運河にはもっぱら川の水を入れ、塩橋運河にはもっぱら湖の水を入れるようにした。されに水門を設けて湖水の流出を少なくし、潮水が町に入らないようにした(これによって砂の堆積が防げるようになった)。また六つの井戸を修復し、民衆は利便を得られるようになった。

兄はあるとき西湖のほりに行ってじっと観察し、「よし、水草を取り除こう。水草は大量にある。除いたものをどこに置けばよいのか。この湖の大きさは南北三十里、一日で湖を一周するのは難しい。もし取り除いた水草と泥で、湖を南北に貫く堤を作ったならば、水草はなくなり、通行の便もよくなるだろう。呉の人は菱ひしを植え、春には菱を刈り取って一寸の草も残さないという。水草を除いた後に、人を募って菱を植えさせたなら、菱の利も出るし、湖の手入れも行き届き、湖がまた埋もれてしまうようなことはなくなるだろう」と言った。

それで、飢饉の救済の後に残った錢と穀物を使い、また朝廷から僧度牒百枚を得て、労働者を集めた。こうして堤ができあがると、その上に芙蓉や楊柳を植え、画のような景色ができあがった。杭州の人々はそれを「蘇公堤そこうてい」と名付けた。

(1) 蘇軾は赴任してすぐに、翌年の飢饉と疫病に備えなければならぬと考え、対応

策をまとめて朝廷に提議している。昨年11月7日のことである。蘇軾の基本的な考え方は、実際に被害が生じてから対応したのでは、民衆の害も大きく、国の出費も多くなるので、早めくに手を打つことが肝要であるとするものであった。(2) 前回の副知時代に水利事業に取り組んだ経験(第4章109ページ)を踏まえて、より大規模な土木事業を計画し速やかに実施した。運河の浚渫は早くも昨年10月に着手している。最後に記されている「蘇公堤」は現存し、西湖の美しい景観のシンボルとなっている。(3) 「墓誌銘」にはさらに以下の二つの事績が記されている。①高麗国との関係は慎重であるべきことを朝廷に具申した。先年高麗国の王子の義天が杭州を訪問し(第7章207ページ)、その縁を通じて高麗国側に若干の動きがあった。蘇軾は高麗国の使者を手厚くもてなすことを批判していた(第7章216ページ)ように、改革政治が進めていた積極的な外交は危険であると考えていた。なお、義天は遼(契丹)や日本にも使者を送って仏典を集め、国際的に名の知れた人物であった。②钱塘江の河口を南北に横切る航路が物資の輸送に重要な役割を果たしていたが、複雑な潮流によって海底に貯まる土砂が予測できない動きをするために船が座礁する事故が頻繁に起きていた。そこで蘇軾は土地の人々の知恵を結集して、新たな運河を開いてその危険な航路を使わなくて済むような計画を立案した。それはなかなかの壮大な土木事業であったために、蘇軾の在任中に実現するには至らなかった。(4) 上に記されていて飢饉対策、疫病救済、土木事業の3点について本章ではこの後より具体的に見てゆくことになる。短期間に数々の施策を打ち出して、その多くを成功させたのには、次のような要因があったと考えられる。①先に副知事として赴任していたことから、杭州について熟知し、社会の各層との人的なつ

ながりもすぐに強く確保することができた。一般的に、知事などの高位の官僚は中央から派遣されてせいぜい3年程度しかいないために、土地に長くいる下位の官吏に依拠しなければ何もできず、独自色を出すことが難しかった。②すでにいくつかの地で知事を歴任し、またこう黄州流謫の日々も過ごして、地方の実情をよく知り、何が有効な施策でどのように実施すればよいのかを知っていた。③高こうたいこうたいごう太皇太后の強いバックアップがあった。蘇軾が朝廷に要望したことは、その多くが例外的に迅速に聞き入れられた。ただし、朝廷としては認めても、間に入る政敵が不誠実な対応をして、事がうまく進まないこともあった。

ここに見る「せいさん し こうじょ聖散子後叙」は、この春に実施した疫病対策に関係することをほぼ1年後に記したもの。蘇軾は「聖散子」という薬の宣伝文である「せいさん し聖散子叙」(第6章363ページ)を先に書いているので、「後叙」というのである。

せいさん し聖散子が効果を及ぼす病気は一つではなく、効き目はいろいろである。

去年の春、こう杭州の民の間で病気がはやり、この薬で全快した者が大勢いた。用いた薬は上品質のものではなかったのだが、千銭でほぼ千服分が得られ、千人を救うことができた。こうして数を積み上げていったので、その利は非常に広く及んだ。

人が自分の力でできる範囲で恵みを施そうとすると、そこには限界がある。もしもたく

さんの人が力を合わせるなら、よく利を成す人が大勢になって、その行為も長く続く。

そこで、誠実な人間りょうげんいんを楞嚴院に集めて研修を行い、立春の後から薬を施し始め、翌年の春と夏の境目にまで及んだ。それに参加した人の名は本院に送った。

昔、印度いんどの薄拘羅尊者はくこうらそんじゃは、訶梨勒かりるく(薬になる果実)を一人の病気の比丘びくに施し、その報いを身に受けて、一切の病気にならなかったという。だから、己の力に従って人を助け、大勢の人に薬を施したならば、どれほどの功德があるのかわからないのである。仁のもととは惻隱の情であり、それが善をなす因ともなるのだ。

呉郡ごの陸広秀才りくこうはこの薬の作り方と施し方を智蔵院ちそうの禅月大師ぜんげつ宝沢ほうたくに倣った。宝沢は土地の僧である。そして、陸広はいまでは都ぼくきやくこうの麦曲巷に住んで、この薬を施している。

(疫病対策は、安価な薬をたくさん作り、大勢の人を動員して、広くかつ長期的に実施して行くことが大切であると強調しているのは、注目すべきであろう)

■新茶送簽判程朝奉以饋其母有詩相謝次韻答之

杭州こうの役場に勤める程之邵ていししょう (字は遵彦あざな じゅんげん) に、その母に飲ませるようにと新茶を贈ったところ、謝礼の詩が届き、それに次韻した。程之邵は評判の親孝行者で、それで特に新茶を贈ったのである。

昔、母が手ずから縫ってくれた官服に感謝する詩を詠んだ人がいた。

昔、他所で馳走になった肉を母のためにと、食べずに持って帰った人がいた。

昔、母の喜ぶ顔を見たいがために公平な裁判に努めた人がいた。

昔、母がいれば貧しくともよく、母が亡くなった後ではどれほどの高禄も要らないと言った人がいた。

この茶は、まさにそのような貴君のためのものだ。

いわゆる「^{し ばい}試焙」という今年最初に火の前にきた茶葉で、

お上が近臣に配るために置きよな絶品である。

貴君を通じて私も母君に奉じるならば、

私と貴君はもはや兄弟のようなもの、

退隠した後に林中で茶を飲み合うときのよき思い出話となるであらう。

■次韻林子中王彦祖唱酬

^{じゅん}潤州で、^{りん き}林希（字は子中）が^{あざな しちゆう}王汾（字は彦祖）に寄せた詩に次韻した。

王汾は前年末まで南方の^{めい}明州の知事を務めていたが中央に召され、旅の途中で潤州知事の林希に会ったのである。

ずっとずっと前からわかっていたはずだった、

人の身などはひとつの^{あわ}漚に寄せるようなものだということは。

ところが晩年に及んでみると、

木の葉を落とす風にいまさらながら驚かすにはいられない、

過去、現在、未来の三世の事を論じ合ったのは昨日の夢のよう……。

それでも、なお喜べるのは、

かのときの五人が老年の寒風のなかでもまだこしでいられること。

いまも、貴君らの座を雨あがりの北固山ほくこざんが囲んでいることだろう。

こちらでは、春も終わろうとして西湖せいこの水の色が空を映し出している。

我等にはかの賀知章がちしょうよりも少しは勝るところがあるのだろうか、

老いた眼でもって官界あかの紅い塵をまだ見続けていて。

(1) 潤州じゆんで詠まれた詩が蘇軾のもとに届いて、次韻した詩が先方に届くまでにどれほどの時間がかかったのかわからないが、この詩は瞬時に行き来したかのように詠まれている。(2) この詩の背後にはいくつかの事情がある。「木の葉を落とす風」の句には、「近頃そんかく、孫覿りじょう、李常りじょうが亡くなったと聞いた。それでこの句がある」との蘇軾自身の注がある。孫覿は最後は政敵となったが長い付き合いのあった人(第8章219ページなど)で2月3日に、李常こうは黃州流謫の時代に深い付き合いのあった人(第6章72ページなど)で2月2日に亡くなった。(3) 「かのときの五人」については、やはり蘇軾自身の注で、「林希りんき、王汾おうふん、龐參こうりん、胡宗愈こそうゆ、蘇軾けいとくじは一緒に試験を景德寺で受け、いまも皆が健在である」と記している。景德寺での試験とは都で行われた科擧の一次試験で、これより34年前のことであった(このときに最終試験まで合格したのは5人のうちの林希と蘇軾だけであったようだ)。なお、胡宗愈の名は本章1ページで見ている。(3) 北固山ほくこざんは潤州じゆんにある有名な山。(4) 最後に唐代の賀知章がちしょうを引き合いに出したのは、賀知章は第8章209ページなどでも触れたように都を去って故郷に隠棲したのに対して、3人がまだまだ官職にあるのは何たることかと自嘲するのである)

■寿星院寒碧軒

ほううんざん かつれい じゆせいいん かんべきけん
宝雲山の西の葛嶺にある寿星院の寒碧軒で詠んだ詩。寒碧とは竹の緑を
形容したものであろう。

すがすが そよそよ
清^{すがすが}しい風が肅^{そよそよ}肅と吹いてきて窓の扉を揺らす。

窓の前に長く伸びた竹があり、太さは一尺ばかり。

ちらちら むしろ
紛紛と、蒼い雪のような粉が竹から落ちて夏の簞^{むしろ}に降りかかり、

さやさや
冉冉と、霧のように竹からの緑の光が人の衣を潤す。

高くに日がのぼると、山の蟬が葉を抱いて鳴き、

人が静かにしていると、翠^{みどり}の翼の鳥が林を穿って飛び行く。

ここの道人は穀物を絶^{かんべき}って寒碧(竹)に向かっている。

ならばお尋ねする、

「鶴のように痩せているはずのお方が、

どうして丸々と太っておられるのでしょう」

(最後の句を除くと静寂そのものの詩であるのだが、それだけでは面白味が不足する

とでも思ったのか、寒碧軒^{かんべきけん}の主のふくよかな体型をからかうような句を末尾に置いた。

それを笑って受け入れてくれる僧であったのだろう(ただし、当時の理想の体型がいまなら

メタボとして健康指導の対象になるようなものであった))

■書劉景文所藏王子敬帖絶句

りゅう き せん あざな けいぶん おうようしゅう
 劉季孫(字は景文)は先に歐陽脩の書を所蔵しているのを見たように(本章16ページ)、書画の収集家で、コレクションのなかに王献之(字は子敬)の書もあった。それに書き添えた絶句。王献之は王羲之の息子で、やはり書の名手として名高く、ある人が父の書を野の鶩に、息子の書を家の雞に譬えたことがよく知られていて、この詩の初句はそのことを用いている。

にわとり あひる
 家の雞にしても野の鶩にしても、
 まないた
 つまるところは俎の上のにのぼってしまう。
 みみず
 春の蚓にしても秋も蛇にしても、
 つまるところは箱に隠れ潜むのである。
 君が家にあるこの二行十二文字は、
 どう りひつ
 唐の李泌が所蔵していた三万巻をも圧倒するだろう。

(1) いささか戯れの詩である。春のみみずも秋の蛇も草書の墨痕の譬えとしてよく用いられる。書についていろいろな譬えをするのを笑うのであろう (2) 李泌の名は、西湖の水を町に供給して井戸を作った人として先に見ている(本章74ページ)。その父は二万巻の書を集め、子孫に門の外に出してはならないと戒めたという。(3) 劉季孫は、南朝の宋の時代の宗炳(字は少文)が描いた一筆書きの画も所蔵していて、蘇軾はそれを絶句に詠んでいる。「宛転」とか「滯盈」とか、くねくねと続く筆跡を表す語句を

巧みに使って興味深いのだが、訳者には詩の意味をきちんと汲み取ることができない)

■江城子

蘇軾は公務に忙しくても、サービス精神が旺盛で、時にはこのような詞を作ってしまう。短い序文がある。

陳直方ちんちよくほうの妾けいの嵇氏せんとうは錢塘こう(杭州)の人である。嵇氏に新しい詞を頼まれ、これを作った。錢塘せんとうの人は『陌上花はくじょうか』を歌うのを好む。ゆるゆるとした曲である。私はかつてこれについて数首の絶句を詠んだ。

(1) 陳直方ちんちよくほうがどのような人であるのかはわからないという。(2) 『陌上花はくじょうか』の曲についてかつて詠んだという作品は参考として後で掲げる。(3) 『陌上花』の由来は以下のようなものである。かつて杭州こうを中心に栄えた呉越国ごえつがあった。ある王妃は毎年春になると帰郷し、王は王妃に「陌上花開、可緩緩帰矣」(路傍の花が開いたらゆるゆると帰っておいで)と言って送り出した。その語を用いて曲にしたのが『陌上花』で、杭州の人々のはかつての呉越国の繁栄を偲んで歌っていたのである)

玉人家在鳳凰山ぎよく ほうおうざん。(玉のような人は、鳳凰山に家があります)

水雲間、(水と雲の間で)

掩門関。(門が閉ざされています)

門外行人、(門の外を行く人)

馬上看弓彎。(馬の上に弓彎きゅうわん(美女の脚の比喩)が見えます)

十里春風誰指似。(十里にわたって吹く春風は誰に向かっているのでしょうか)

斜日映、(斜めになった日が)

繡簾斑。(美しい簾すだれにまだらに注ぎます)

多情好事与君還。(あなたといっしょに、多くの思いと好い事よが帰ってくることでしょ)

憫新鰥。(この独り身を哀れんで)

拭余潜。(涙を拭ってくれるのです)

明月空江、(川を明るい月が照らし)

香霧著雲鬢。(香る霧が髪につきます)

陌上花開春盡也。(路傍に花が開くとき春は終わります)

聞旧曲、(かの古い曲を聞いて)

破朱顔。(顔をほころばせるのです)

(この詞は、心地よく感情を揺さぶるように言葉が詠記されているのがミソで、多様な解釈が可能であるところがおもしろく、散文的に訳すのには適さない。ここでは一つの解釈として、前半は遠くに行った女性が帰ってくるとの期待を歌い、後半はその女性の帰りを待つ男の姿を歌っていると捉えて訳した)

(次に、杭州副知事こうのときに『陌上花』はくじょうかについて詠んだ作品を見ておく。上の序文で蘇軾は絶句せつごといっているが、これは「清平調」という形式の詞である。3首のうちの1首を訳す。)

陌上花開蝴蝶飛、(陌みちの上あたりで花ちようちようが開き蝴蝶ちようちようが飛びます)

江山猶是昔人非。(江かわや山なみは猶なほその是ままでも、昔いひなの人はもはや非いいのです)

遺民幾度垂垂老、(遺のこされた民たみは幾度どんどんとなく垂垂どんどん老いてゆきます)

遊女長歌緩緩歸。(遊あそび女めたちは長とこしに歌うたうのです、『緩緩かんかんとして歸かへる』と)

■真覚院有洛花花時不暇往四月十八日与劉景文同往賞枇杷

詩題は、「真覚院しんかくいんには洛花らくかがある。花はなの時期じきには行く暇あひだがなかった。四月十八日しがつじゅうはちにちに劉季孫りゅうきそん (字あざなは景文けいぶん) とともに行き、枇杷びわを賞あはした」。洛花らくかとは牡丹ぼたんのこと。従来じゆんらい杭州こうには牡丹ぼたんがなく、唐代たうたいに洛陽らくようから移植いんじしたのでこの名ながあるという。ここでいう枇杷びわは盧橘ろきつのことで、要するに金柑きんかんであるという。

緑きよが暗くろくなって、もう夏なつを迎むかえた。

春はるの時ときにはくることができず、紅あかはさびれてしまった。

牡丹ぼたんは老人らうじんの友ともとする花はなではあるまい。

盧橘ろきつは我われが郷里きやうりの人ひとのような花はなだ。

山やまのここに至いたって街並まちなみは尽つき、

巖いわの崖がきを前まへにして新あたらしい思おもいが生うじてくる。

貴君ききみも覚おぼえていてほしい、

年の暮れの寒さのなかにまたきて、

雪が盧橘の枝に降りかかるのを見ようではないか。

(昔から蜀しよくの人は柑橘類を好むとされ、蘇軾こうも黄州において柑橘類を好んで植えていた(第6章119ページ)。ここでは冬でも葉を落とさない盧橘ろきつを、松と同様に志操堅固であると讃えている)

■又和劉景文韻

上と同じときに劉季孫りゅうきそん (字は景文けいぶん) の詩に和したもの。

牡丹を、松と同時に植えて、

春の風に任せて自在に花を開かせた。

(真覚院しんがくいんの)壁に詩を記した人を試しに数えてみるがよい、

そのうち花を見るためでなく来た人は何人いるのかな。

■題張子野詩集後

杭州副知事時代に親しくした大先輩に張先ちやうせん (字は子野しや) がいた(第4章74ページなど)。張先は詞を得意としたが、詩も立派であったというのがこの短文である。張先の詩集の後ろに書き添えた。

張先ちやうせんの詩筆は老妙で、歌詞はその余技でしかないのだ。

こしゅうせいけい
「湖州西溪」という題の詩に、

浮萍破処見山影、(浮き萍の破れる処に山の影を見て)

小艇帰時間草声。(小さな艇の帰る時に草の声を聞く)

とある。

これに和した私の句は、

愁似鰥魚知夜永、(愁いは鰥きな魚に似て夜の永さを知り)

懶同蝴蝶為春忙。(懶さは蝴蝶と同じ春の忙しさを為す)

張先の詩はこのようなものであるから、昔の有名な詩人と並ぶべき人なのである。

しかし、世間の人はその歌詞ばかりを賞賛している。

とう しゅうほう
唐の時代に、周昉は人物を画き、どれも神品と行ってよいものだった。しかし、世間の人は周昉は女性を画いたということだけを知っている。

これは要するに、『論語』にある「徳を好むこと色を好むがごときを見ず」ということなのだろうか。

げんゆう
元祐五年四月二十一日。

(最後は『論語』の有名な言葉をわざと少しばかり曲解したジョークなのだろう。世間の人はどうしても色っぽいことの方により強く惹かれてしまい、そちら向きの作品群が強く印象付けられるので、張先も周昉も正しい評価を得ていないといっているのである)

■杭州乞度牒開西湖状

これは高太皇太后と皇帝に差し出した公文書。西湖再生事業の概要が記されている。

元祐五年四月二十九日、竜岡閣学士左朝奉郎知杭州蘇軾、書面をもって奏上いたします。

右の臣は、天下にあるところの陂、湖、河、渠の利、あるいはその廃興成毀(立派に造られたり無残に壊れたりすること)には、みな数(天の定めた運命)があると聞いています。ただ、聖人が国の上にあるときは、利が興り害が除かれ、成りやすく廃され難いのです。

昔、前漢の終わりに翟方進が丞相となってから、汝南の鴻隙陂が始めて決壊し、父老はこれを怨んで、このように歌いました。「陂を壊したのは誰なのか。翟方進だ。我らに豆を食らわし、芋を煮て羹にしろたとよ。もともどせ。陂を元通りにしろ。誰が言うのか。黄色い鶺鴒のお告げた」。これはどのような歌かといいますと、民心の望むところを天がこれに託して、神(黄色い鶺鴒)を下して父老に告げたものなのです。(鴻隙陂が洪水で決壊したとき、翟方進は、水の溢れた跡に肥沃な土地が現出したことと経費が省けることを理由に堤防は修理しないと決めた。それ以後、土地の人々は灌漑用水を失い、日照りの害に苦しまねばならなかった)

三国時代の呉国の主が孫皓であったときに、呉郡から次のような報告がありました。「臨平湖は漢代の終わりから草が繁って塞がってしまっていました。ところが、

いまにわかに湖面が広がりました。長老が言い伝えますには、湖面が開くときに、天下は平安になるということでございます」。孫皓はこれは自身にとっての瑞祥であると思いましたが、実際には晋の武帝しん ぶていによって呉国は平定されてしまったのでした。こうしたことを観ると、陂、湖、河、渠などが長く廢れたりまた開かれたりするの、国家の興運に係ることなのであります。天道は知り難いものでありまして、民心の望むところのものには天は必ず従うのであります。

杭州こう せい こに西湖があります。これは人にとっての顔のようなもので、廢してはならないものであります。唐代とう ちやうけいの長慶年間に白居易ほくきよいが杭州知事でありましたときに、湖は広く、千余頃けいの水田を灌漑するだけの水量がありました。銭氏せん ごとつの呉越国のときには、湖を浚う兵士千人を置き、日夜湖を浚っておりました。宋国そうが始まってからは、次第に手入れをしなくなり、水が涸れて草が生え、葑まこもが繁茂するようになりました。熙寧年間きねいに私は杭州通判(副知事)となりましたが、そのころはまだ湖のうちで葑があるのは十分の二ないし三だけでありました。それがわずか十六、七年の間に湖の半分を塞いでしまいました。父老が言うには「こ十年で水が浅くなり、葑が合わさって、あたかも雲が空を翳らすようにたちまち満ちてきてしまいました。さらに二十年もしたら、西湖はなくなってしましましょう」と。もし杭州から西湖がなくなったならば、人から顔を取り去るようなもので、それはもはや人ではないのであります。

臣わたしは愚かで無知ではありますが、西湖を廢してはならない理由を五つ挙げる事ができます。

(1) 天禧年間てんきに、もとの宰相の王欽若おうきんじやくが、皇帝の福を祈るために、魚鳥を獲ること

を禁じて西湖を放生池とすることを初めて奏上しました。これより毎年四月八日に、郡人数万人が湖のほとりに集まって、百万もの鳥や魚を放ち、西北に向かって頭を下げ、皇帝の千万歳の寿命を祈るようになりました。もし湖が塞がってしまったなら、蛟竜魚鱉こうりゅうぎょべつ(水の生き物)はいずれも涸れた轍わだちの痕で水を求める鮒わたしのようになってしまいます。臣はこのようになってしまうの見過わたしごすことはできません。これが西湖を廃してはならない第一の理由です。

(2) 杭州の地はもともとは江や海かわでありました。流れる水も湧き水も塩辛く、民の住むところはわずかしかありませんでした。唐代に李泌りひつが初めて西湖の水を引いて六つの井戸を作り、それからは人々は十分な水を得て、そのまわりに村ができ、日に日に増えて、大勢の人が集まって町の暮らしが成り立つこととなりました。いま湖が狭くなり水が浅くなり、六つの井戸は次第に壊れかけています。もし二十年の後に湖が葑の繁茂するだけのところとなってしまったならば、町の人々はまた塩辛い水を飲まなければならなくなり、ひいては町が自ずと消え去ってしまいましょう。これが西湖を廃してはならない第二の理由です。

(3) 白居易は『西湖石函記』せいこせきかんきを作り、そこにこのようにあります。「湖の水を放流して田を灌漑し、湖の水位が一寸下がるごとに十五頃の田に水を入れることができる。夏には五十頃を灌漑できる。湖の水量を増やすことができるなら、運河を千頃にわたって満たすことができる上に凶作の歳もなくなるだろう」。今年は運河の水が十分ではなく、農作物の収穫も不足しました。これが西湖を廃してはならない第三の理由です。

(4) 西湖が深く広ければ、運河の水は湖水から十分に取りることができます。しかし、湖水が不足すると、せんとうこう 錢塘江の潮水を取らなければなりません。潮水には泥や沙が混濁し、それは一石の水に五斗も含まれています。そのために三年もしないうちに運河は泥砂で埋まってしまい、兵士や人夫を十万人余りも動員して運河を浚渫しなければなりません。運河は町の中に十余里にわたって続いているので、浚渫時には町中が大騒ぎとなり、泥水が乱暴に撒かれ、町に住む者にとって大きな患いとなります。これが西湖を廃してはならない第四の理由です。

(5) 天下の内で酒税が多く徴収できる場所として杭州以上の場所はありません。一年で二十余万びん 緡にも及びます。酒を造るための水は湖から供給されています。もし湖が浅く狭くなってしまったなら、水の需要に応じることができなくなり、人は山の泉にまで汲みに行かなければならなくなります。そうすると一年に二十万人分の労力が必要になるでしょう。これが西湖を廃してはならない第五の理由です。

西湖が次第に廃れて行く有様を見て、湖が廃してはならない五つの理由があることを知っていながら、しかもわたし 臣は特別の御恩を賜る身でありながら、歳月の過ぎるにただ任せていたのでは、知事としての責任を果たしたことには断じてならないのであります。そこで、すでに役人を派遣して湖にある葑を計量させたところ、合計二十五万余丈にも及び、それを除くには二十余万人の労働力を必要とします。一方で、わたし 近ごろ臣は、当該地域の饑饉を救うために、特に国庫に送るべき米五十余万石を猶予し、じょうへいまい 常平米数十万石を放出し、五穀税を緩めていただくことを皇帝陛下、太皇太后陛下に伏してお願い申し上げましたところ、数知れぬ東南の民が生きなが

らえることができました。特に度牒^{どちよう}三百枚を賜り、杭州だけでも百枚を頂戴しました。臣は謹んで聖意を奉じて饑民救済にそれを使いました結果、差し引き銭と米が一万余貫石残りました。そこで臣はこの銭と米で民を募って湖を開くことにし、十万の労働力を得て今月二十八日までに葦を取り除く作業をいたしました。

農民父老はこのことを観て、嘆息してこのように言います。「二聖陛下はすでに我等を活かしてくださっただけでなく、余った銭や米で、無窮の利を生み出すことをなされた。吾等はこちらで仕事を不得、この凶作の歳を乗り切ることができます」。そして泣くのであります。臣は民情がこのようでありますことを知りつつも、いまある銭や米には限りがあり、募った労働力は十分でないために、葦の繁茂した土地はまだかなり残ってしまいました。臣の後に続く者がいなければ、ここでしたことが無に帰してしまいます。それは深く残念であります。ここでさらに度牒百枚が得られましたならば、全てを除去し終わることができて、後に患いを残すことはないのであります。

伏して皇帝陛下、太皇太后陛下にお願い申し上げます。臣が西湖を廃してはならない理由として挙げた五箇条と、利害について御検討ください、特に度牒五十枚を下されますように。別途杭州が得られるであろう度牒五十枚と合わせて百枚となりますので、臣が力を尽くして志を遂げることができるようになるのであります。半年の内に、西湖は唐代のころの姿に戻り、周囲三十里は山の際をもって岸边とするようになりましょう。農民父老はもとより鳥も魚も聖沢に泳ぎますこと無窮に及ぶのであります。伏して伏してお願い申し上げます。

補足一：現在当該地域は梅雨のさなかにあり、葦の根が浮動して取り除きやすく

なっています。六、七月に及んで大いに雨が降るなら、蔓が伸びて増えることがなくなり、また農民が言うには八月に葑の根を断つともう出てくることがなくなります。これはまさに工事を行うによい時期なのであります。そのことを含めて御検討いただければ幸甚でありあす。

補足二：杭州では去年から運河を浚渫し、西湖の水をそこに注ぐ工事を進めております。それは西湖の葑を除くことと利害が一致します。臣はそうしたことまでも細々と申し上げて天聴をお煩わせするまでもないと考え、別に書状を作って三省（門下省、中書省、尚書省）に具申いたしております。

（ここで興味深いのは、土木工事に関する具申でありながら、冒頭に天と君主と民の関係の原理について述べていることだ。皇帝および太皇太后の判断を仰ぐので、そのような高所（われわれにとってはほとんど意味のないところ）から説き起こす必要があったのだ）

■申三省起請開湖六条状

上で見た太皇太后と皇帝に差し出した公文書の終わりに、運河に関する事業については、別途詳細を記して三省（門下省、中書省、尚書省）に提出すると述べていたが、それがこの文章である。西湖の再生と、運河の効率的な運用、町への淡水供給の三者を一体的・総合的に成し遂げる施策を作り上げたのが、地方行政官としての蘇軾の優れ手腕であったといっていよう。この文書は公共事業の提案書として、現代でも通用するくらいにしっかりとした構成と内容になっている。長文であり、詳細にわ

たる部分には理解が十分及ばないところもあるので、全体の構成を以下に概観して、ごく一部だけを訳出する。

(1) 西湖と運河をめぐる現在生じている諸問題について、各方面から聞き取った結果を、歴史的経緯を踏まえて整理する。

(2) 唐代の白居易とうだい はくきょいの考察を参考にしつつ、灌漑用水を確保することと運河に水を満たすこととを両立させる方策がまだ見つからないでいた昨年10月の時点から、すでに運河の浚渫を始めて4月に完了し、船の航行が大きく改善されたことを報告する。

(3) 運河が今後も十分に機能を発揮できるようにするには、潮の遡上によって運河に泥砂が貯まってしまうのを防ぐ必要があり、蘇堅そけんがその対策を立案した。鍵となるのは、運河の要所に水門を設けて潮の干満に応じて操作することである。

(4) 蘇堅の案を黄僎こうせんに検討させるとともに、蘇軾自身も実地に調査して、成功すると判断し、水門の設置工事を4月20日に開始し、あわせて西湖の水を市中に配る六つの井戸の改修にも着手したことを述べる。

(5) 草が繁茂して狭く浅くなってしまった西湖の湖面を元通りに広げてほしいと土地の人々が訴えている問題を取り上げ、草の駆除に必要な労働力と費用を概算する。

(6) 西湖から草を除いた後で、菱ひしを栽培するようにすれば、湖面の管理が自ずとできて、しかも利益も上がるとする許敦仁きよとんじんの提案について述べ

る。(7) 蘇軾は人々と検討した結果、許敦仁の案を妥当であると判断し、草の除去に着手し、現時点で財政的に可能な処置を4月28日までに完了したことを、画を添えて報告する。

(8) 以上の方策の結果として、西湖の湖面が広がり、西湖からの水の供給が改善され、運河の良好な航行が確保されるようになったが、この状態を今後も恒久的に保つための六つの計画を述べる。

(9) 朝廷に対して、この事業を検討し、不足する費用を支給してくれるよう図面を添えてここに願い出ることを述べる。

注目すべきは、蘇軾がさまざまな人の意見を聞いて総合的に判断し、長期的に有効な方策を選択していることだ。さらに、民間の活力を有効に利用しようとしていることも大きな特徴として挙げてよいだろう。

ここでは、(8) に述べられている六つの計画のうちで、2番目にある運河の川幅を確保する方策について、ほんの一部分だけを訳出する。

えんきょう 塩橋運河の岸辺には、じへい 治平四年にげんせきちゅう 元積中が立てた石碑があります。そこには、運河を航行する船を牽く人が使う路を確保するために邪魔な家を取り除いて、どこをどれだけの幅の路にしたといったことが刻まれています。それから二十余年が経過する間に、兩岸の家がその路へと侵入し、その数は数千軒にも及んだために、その家の外側にまた別の路を作らなければならなくなり、結果として運河は年々狭まってしまったのでした。……

こう せいこ せんとうこう
 (杭州は西湖と銭塘江に挟まれて平地が狭く、都市が発展するにつれて、人家が公共の場にも進出してしまったということが記されている。20年で運河の両岸を人家が埋めてしまうというのは、それだけ杭州の経済成長が顕著であったわけで、その活力を利用することが公共事業を成功させる鍵であると蘇軾は考え、運河の幅を新たに確保し直すにしても、西湖で菱を今後栽培してゆくにしても、民間の力を上手に使おうとした。また、国から度牒どちょうを支給してもらってそれをお金に換えて公共事業を実施するという方法は、つまりは宗教界からお金を吸い上げて公共投資に充てるということで、それだけ宗教界に財力があったということなのだろう)

■南歌子

上の文書の提出日は5月5日となっていた。それは端午の節句の当日で、この日、蘇軾はこの詞も作っていた。

(先に見た張先ちやうせんの詩集に書き添えた短文では、あたかも詩は「徳」の側に、詞は「色」の側にあるかのように書いていた。もともと詞は歌妓が歌うもので、男女の情愛がその主題であった。前にも記したように、それを変えて、詞を詩のようにしたのが蘇軾であった(それをよしとする人もいれば、よろしくないとする人もいた)。この詞は男女の愛ではなく、蘇軾こうの杭州への愛を歌ったものである)

其の一

山与歌眉斂、(山とともに歌うなら、眉が斂まり)

波同醉眼流。(波とともに酔うなら、眼は流れゆきます)

遊人都上十三楼、(ここに遊ぶ人はすべて十三楼じゅうさんろうに上るのです)

不羨竹西歌吹、(羨むことはありません、竹西寺で聞くちくせい歌声が)

古揚州。(古いにしえの揚州ようを讃えるのを)

菇黍連昌歎、(菇黍ちまきと昌歎しょうたんを並べ)

瓊彝倒玉舟。(瓊彝さかだると玉舟さかずきを倒します)

誰家水調唱歌頭、(どの家すいちゆうかどうで「水調歌頭」の曲を歌っているのでしょうか)

声繞碧山飛去、(声あおは碧い山をめぐって飛び去ります)

晚雲留。(そして晩の雲が留まるのです)

((1) 十三楼じゅうさんろうは錢塘門せんとうもんから二里ばかりのところにあつて、西湖せいこを見下ろす名所であつた。蘇軾はここを好むあまり、ここで執務をしたともいわれている。(2) 竹西寺ちくせいじは揚州よう郊外にある有名な寺で、蘇軾も何度か立ち寄っている(第7章96ページなど)。唐代とうに杜牧とが詠んだ「斜陽竹西路、歌吹是揚州」(斜陽しゃよう 竹西ちくせいの路みち、歌吹かすい 是れ揚州こようしゆう)の詩句が有名で、蘇軾のこの詞はこれを踏まえている。揚州すいは隋ようだいの煬帝が惚れ込んだくらいに温暖で風光明媚な都市として天下第一とされていた。蘇軾は、いまや杭州は揚州を羨む必要がないくらいに美しく立派な都市になっているといっているのである。(3) 「水調歌頭すいちゆうかとう」は煬帝が作ったとされる曲で、それがもたになって詞の曲となり、蘇軾もいくつか歌詞を作っている(第5章123ページなど)。まさか蘇軾の作品を歌う声が聞こえてきたわけではないだろうけれど、杭州は歌声の似合う町であるというのである)

其の二

古岸開青葍、(古い岸辺で青い葍まこを切り開き)

新渠走碧流。(新しい渠みぞに碧い流れあおが走ります)

会看光満万家楼、(一万軒の家が水の反射に照らされます)

記取他年扶病、(いつしか思い出してください、病にありながらも)

入西州。(私がこの町にきたことを)

佳節連梅雨、(端午の節句は梅雨に連なります)

余生寄葉舟。(わが余生は葉のような舟に寄せましょう)

只将菱角与雞頭、(菱みしと雞頭けいとうの花ばかりがあって)

更有月明千頃、(そして明るい月が照らす千頃の水があるので)

一時留。(ここにしばし留まるのです)

((1) 冒頭で、蘇軾が着手した土木事業が詠まれている。上に見た西湖再生事業によって、湖面に広がった水草が除かれ、新たに水路を整備されるなら、水域が広がり、水も光も杭州の町に溢れるようになるというのである。(2) 詞の前半の終わりにある「入西州」(西州せいしゅうに入る)の句には説明が必要である。「西州門」は亡くなった人を偲ぶ場所の象徴であることは第6章 371 ページで見ている。つまり、西湖の風光を愛でる人は、自分が死んだ後にも自分のことを思い出してほしいといっているのだろう。事実、今日に至っても西湖に遊ぶ人は蘇軾のことを想うのである)

■書所和回先生詩

かい
回先生の詩に和した詩について書いた短文。回先生とは誰なのか。それはここに記されている。

かい
回先生の詩はこうである。

西鄰已富憂不足、(西隣りでは富んでいるのに不足を憂いている)

東老雖貧樂有余。(東隣りの老人は貧乏だけれどたっぷり楽しみがある)

白酒釀來因好客、(なぜなら、うまい酒ができれば好い^よ客人がくるし)

黃金散盡為收書。(金をそっくり使い果たして書物を買っているからだ)

とうば こじ
東坡居士はこの詩に和した。

世俗何知貧是病、(世俗の人は貧乏は病のようなものたということを知らない)

神仙可學道之余。(神仙は学ぶべきであっても本来の学問の余りでしかない)

但知白酒留佳客、(よい酒は佳^よい客人を留めることは知っているけれど)

不問黃公覓素書。(達人に直接問わずにその書物だけを求めるとは……)

きねい 熙寧元年八月十九日、ある道人が沈東老の^{ちんとうろう}もとを訪ね、酒を飲んだ。石榴の皮で右に示した詩を壁に書き、自ら回山人と称した。沈東老は回山人を送って門を出て、石橋の上に至った。回山人は先に橋を渡って数十歩ほど行くと、そのまま行方がわからなくなった。ある人は「これは呂洞賓先生である」と言った。
りやうひん

熙寧七年、私は晋陵(湖州)を通過したときに、沈東老の子の沈偕ちんかいに会い、沈偕がこのことを話してくれた。ときに沈東老はすでに亡くなって三年が経っていた。そこで、私は右に記したような詩を和した。

それから十六年後、また沈偕せんとくに錢塘(杭州)で会ったので、このことを書いた。沈偕あざな くん よの字は君与で、家は代々詩文をよくすることで知られている。

元祐五年五月二十五日、東坡先生書す。

(1) 沈東老とあるのは、湖州帰安県の東林に住む沈思(字は持正)という人である。

その人のもとを訪ねた回山人(回先生)は謎の道人で、ある人は呂洞賓りょうどうひんではないかと言った。呂洞賓は伝説の仙人で、一説によると唐の貞元12(796)年の生まれであるから、このころまでそこらをうろうろしていたとすると、そろそろ300歳ということになる。

(2) 熙寧7年に沈偕と会ったとあるのは、杭州から密州に移る途中のこと。回先生の詩に和した詩は3首あり、3首目に「清涼雨露三年後、髣髴塵埃數字余」(清涼 雨露三年の後、髣髴 塵埃 數字 余す)と、沈東老が亡くなって3年後に回先生の墨痕が薄れてしまっているのを見たと言っている)

■西湖星院此君軒

西湖のほとりの寿星院にある此君軒で詠んだ詩。

臥聽謾謾碎竜鱗、(臥して聴く 謾謾として竜鱗の碎けるを)

俯看蒼蒼立玉身。(俯して看る 蒼蒼として玉身の立つを)

一舸鷗夷江海去、いっか し い こうかい さ
(一舸の鷗夷 江海に去り)

尚余君子六千人。な あま くん し ろくせん にん
(尚お余す 君子六千人)

(しばしば引用している岩垂憲徳・積清潭・久保天随訳『蘇東坡詩集』(1927年)には、この詩に対して、「此の詩を一読再読三読では其れ何事を詠ずるや少しも判らない、国語や漢書や史記を読み、始めて解することを得」と記している。漢学の大学者にしてこうであるのだから、訳者ごときには千読万読したところで少しもわからないのである。要するに、松と竹に囲まれた此君軒しくんけんには大層立派なお坊さんがいるということ、故事てんこ盛りの超絶難解パズルとして詠んだのであろう)

■観台

かんだい
観台とは、その上で座禅をして法をみ観る台である。それについて詠んだ詩。上に見た難解な詩は中国の古典からの引用から成り立っていたが、これは『楞嚴經』りょうごんきやうなどの仏典からの引用で成り立っている。パズルの難易度はこちらの方がやや低く、百読すれば少しは意味がわかりそうだが、上と同じく読み下し文だけを添えておく。

(蘇軾は知識がありすぎて、それを大量に動員して凝集させないと心に満足を覚えなかったのだろうか。蘇軾は、官界における軌跡とうだいが唐代の白樂天はくらくてん (白居易)はくきよい)に似ていることを意識し (第8章 141 ページなど)、次の詩にも見るように、再び杭州にきてからさらにその意識を強めるのだが、2人の詩は正反対といってよいくらいに違う。白樂天の詩の多くは一読して誰もがわかるくらいに平易であるが、蘇軾の詩は百読、千読してもわ

かないくらいに難解なものがしばしばある。日本で受容を見ても、白楽天の詩は平安時代の宮中で優雅に朗読されたのに対し、蘇軾の詩は室町時代の禅僧や江戸時代の漢学者がねじり鉢巻きで研究したのだった)

三界無所住、さんがい す ところ な(三界に住む所無く)

一台聊自寧。いちだい いさき みずか やす(一台 聊か自ら寧くする)

塵勞付白骨、じんろう はくこつ つ(塵勞 白骨に付き)

寂照起黃庭。じやくしやう こうてい おこ(寂照 黃庭に起る)

殘磬風中裊、ざんけい かぜ なか よわ(殘磬 風の中に裊く)

孤燈雪後青。ことう ゆき のち あお(孤燈 雪の後に青し)

須防童子戲、すべか ふせ どうじ たわむ(須らく防ぐべし 童子の戯れを)

投瓦犯清冷。おかわら どう せいれい おか(瓦を投じて清冷を犯す)

■贈善相程傑

そう よ み ていけつ
相を善く観る程傑という人に贈った詩。

心から心へと伝える学は、
聖道ではない異学であって、
我が身を謀るためにはならない。
貴君はこの平和な時代に、

貴顕となる人の相をそう む観ることを思っている。

かつて、相を見て、

「火が走り上る。長くは続かぬ」

「急流の中を行く。神仙と遠くない」

と、言った人がいた。

書物を苦勞して研究して得た要訣ではなく、

酔ってのつぶやきのようなものであっても、

かえって真理に近いことがある。

さて、この私ははくらくてん白樂天に似ると人はいうけれど、

果たして私の晩年は、

「白髪頭で七年間、らくよう洛陽の春を遍く賞玩した」

と、言った白樂天のようになるのか、

貴君にしっかりと観てとってほしいものだ。

((1) 冒頭にある「心から心に伝える学」(原文は「心伝の異学」とは、普通は仏教のことを指すが、ここではていけつ程傑の学もやはり立身出世のために役立つものではなく、志は別のところにあるといつているのであろう。(2) はくきよい白居易 (はくらくてん白樂天) は政界を引退してから悠々自適の日々を長くらくよう洛陽で送った。ここに引用された句は退隱生活はまだ半ばのころのもの。果たして蘇軾がそこまで白居易に似るのかどうかは第13章で見ることになる)

■減字木蘭花

この詞には次のような短文が添えられている。「せんとう銭塘のせいこ西湖には詩僧の清せい順じゆんが住む堤があり、清順はそこをぞうしゆん お蔵春塢と名付けた。門の前に二本の古い松があり、それぞれにのうぜんかずら凌霄花が絡みついて上っている。清順はいつもその下で昼寝をする。私はここの知事となり、ある日のこと、従者を退けて清順を訪ねた。風が騒がしく松を吹き、清順は落ちた花を指して句を求めた。私はこの詞を賦した」。清順の名は本章 45 ページなどで見ている。

双竜対起。(二匹の竜(二本の松)が向かい合せに立っています)

白甲蒼髯煙雨裏。(白い鱗に蒼い髯が、煙る雨の中にあるかのようです)

疏影微香。(淡い影と微かな香り)

下有幽人昼夢長。(その下で、ゆかしい人が昼の夢を長々と見続けています)

湖風清輒。(湖からの風は清くやわらかです)

双鶴飛来争噪晚。(二羽の鶴が飛んで来て騒ぎ立れます)

翠颯紅輕。みどり翠が揺れてあか紅が軽やかに飛びます)

時上凌霄百尺英。(見ればのうぜんかずら凌霄の花が百尺にわたって連なっているのです)

■賀新郎

「夏景」という副題がある詞。蘇軾は「詞を詩にってしまった」と、一部

に批判的な見方もあったなかで、いかにも詞らしい作品である。

(不遇な美女を花になぞらえて (あるいは逆に花を美女になぞらえて) 詠むというのは詞の世界ではごくなじみのある主題である。この詞の美女は一見すると艶めかしいようであり、西洋のビーナス像のように気品を具えているといえようか。様々な解釈が可能であるところが名作とされる理由でもあるのだろう。寝坊して宴席に遅れてしまった妓女ざくろが石榴の花を差し出しつつ詫びたのに対して座輿で詠み与えたという伝説 (ほんんど信じられていない) もあれば、蘇軾自身の境遇を詠んだというわかりやすい説もあり、夢と現実が混然一体となったそうじ荘子の哲学を歌ったという小賢しい解釈もある。どの説に依拠するかで訳文は変わってくるだろう)

乳燕飛華屋、(わたしは夏の燕、あのお屋敷へと飛んで行きましょう)

悄無人、(静まりかえって人の気配はありません)

桐陰軫午、(午後の日差しに、桐の葉影だけが動き)

晚涼新浴。(涼くなった夕方、湯浴みをしたばかりの女性が現れ出ます)

手弄生絹白团扇、(やるせなく動かす真っ白な絹の団扇)

扇手一時似玉。(手もまた玉ぎよくのような白さです)

漸困倚孤眠清熟。(次第にけたるく独り寝入っていきます)

簾外誰來推繡戸、(窓の外に誰かが来て戸を押そうとします)

枉教人、(やめて!)

夢斷瑤台曲。(あの人のせつかくの夢が終わってしまいます)

又卻是、(ああ、ちがいました)

風敲竹。(風が竹を叩いたのでした)

石榴半吐紅巾蹙。ざくろ(石榴がなかば口をあけて縮れた赤いハンケチを吐き出しました)

待浮花、(ほかの浮ついた花やら)

浪蕊都尽、(賑やかなの花やらがすべて終わってから)

伴君幽独。(あの人のためにそっと咲いたのでした)

穠豔一枝細看取、(色濃い枝をじっと細やかに見るなら)

芳心千重似束。(花の心(心と芯をかけている)は千回も折り重なっているではありませんか)

又恐被、(そうでした、すぐにも)

秋風驚緑。(秋風が吹き出したら緑の葉だけになってしまうのです)

若待得君来向此、(さあ、あなたもここに来て)

花前对酒不忍触。(花の前でお酒をお飲みなさい、でも花には触らないでね)

共粉淚、(はらはらとあなたの涙とともに)

両簌簌。(花びらも落ちてしまうでしょうから)

■次韻劉景文送錢蒙仲三首

せんもうちゅう 錢蒙仲が父である えつ 越州知事の せんきょう 錢勰のもとに帰るのを見送った りゅうきそん 劉季孫

(字は景文) の詩に次韻した。3首のうち2首を訳す。

せんもうちゅう (錢蒙仲は本章5ページで、りゅうきそん 劉季孫は本章ですでにたびたび登場している)

其の一

天によって閑にさせられてしまった老いた馬は、
日が暮れてまだ道が長くても、慌てて先を争うようなことはない——
そのようなことを貴君も聞いているだろう。
青雲の志を保つ「九子」(錢蒙仲)を送り終わって、
私は独り西湖に舟を浮かべるのである。

(1) この第一首は、錢勰せんきやうも錢蒙仲せんもうちゆうも(そして蘇軾そしつも)いまは不本意な境遇にあることを詠んでいるのだろう。(2) 詩中で錢蒙仲のことを「九子」と呼んでいるのは、九人兄弟の末の子だったからであるが、九子母神きゆうしぼしんとの掛け言葉になっているという。九子母神は日本の鬼子母神と同根で、ルーツは印度にある。当時に、都に九子母神を祀った祠があり、その脇に美しく作られた九子母神の夫の人形が置かれていた。錢勰が9人の息子を持ち、かつ美男子であったので、人々は戯れて錢勰のことを「九子母の夫」と呼んでいたという。ということで、錢勰が爆笑することを狙って「九子」の文字を蘇軾が用いたのである)

其の二

竹林の七賢人の一人(錢勰)に語を寄せる——
貴君も同じく科挙合格者の名簿に載った仲であった。
しかし、王適君は独りぼっちで鬼の名簿に入ってしまった。

玉のようなであったあの人に似る者は世の中にはもういないのだ。

(王適おうてきが若くして亡くなった悲しみを、蘇軾そくは錢勰せんきやう宛の手紙に記していた(本章27ページ)。蘇軾と錢勰は同じ年の科挙で合格した「同年」の友であるけれど、王適はそうして友を持つ前に死んでしまったのである)

■ 菩提寺南漪堂杜鵑花

菩提寺ぼだいじの南漪堂なんいどうに咲く杜鵑花つつじを詠んだ詩。菩提寺は錢塘門せんとうから出て城壁に沿って北に進んだところの寺。錢塘門せいこは西湖の北東端に面している。

南漪なんいの杜鵑花つつじは天下に比べられるものがない。

漢朝かんちやうの宮殿を飾った紅い翟翬あか しきものに似ていようか。

唐代とうだいに天下の奇絶といわれた鶴林寺かくりんじの杜鵑花は、

兵火に焼かれて一夜の夢となってしまって、

花は仙界に帰ったはずであったのに、

西湖せいこに帰っていたのだった。

(鶴林寺かくりんの杜鵑花つつじについては第4章67ページで見ている。季節はずれの9月に訪れた人が、花がないのを残念がると、仙人いんしちちの殷七七が菊の花とともに杜鵑花も満開に咲かせて見せたという伝説がある。そのことから、「花は仙界に帰ったはずであった」という発想が出てきたのである)

■題楊次公春蘭

ようけつ あざな じこう (本章17ページなど) が描いた^{しゅんらん}春蘭の画に添えた詩。

^{しゅんらん}春蘭は美人(徳において優れた人)に似ていようか。

手折って採るべき花ではなく、

花もまた自身を誰かに献じるのを^{はじ}羞としている。

時に春蘭は風露の香りを放つのだが、

^{よもぎ}蓬艾に深く覆われて見ることができない。

その真の姿がここに描かれていて、

^{いにしへ}古の詩文の叙述の足りないところを補ってくれる。

この画に向き合うときには、

衣服と冠を正して身を改めなければいけない。

^{ようけつ りょうせつろ やくにん}(楊傑は両浙路の役人で、この時代の文人らしく画も得意だったようで、同じころに

蘇軾は楊傑が描いた^{けい}蕙(蘭の一種)に添えた詩も詠んでいる)

■次韻楊次公惠徑山竜井水

ようけつ あざな じこう ^{けいざん りゅうせい}楊傑(字は次公)が径山の竜井の水に詩を添えて贈ってくれたので、その詩に次韻した。径山は杭州の近くにあり、かつて蘇軾はその山を登っている(第4章136ページなど)。竜井の水は眼病に効くと蘇軾自身が注記している。

水時計の水が尽きかけて、もう鶏が鳴き出した。

夜なべ仕事にほとんど疲れ果てる。

私はもとより小さな器、すぐに水が溢れてしまう。

官職を棄ててこの海のほとりに帰ってきたわけではない。

知事を辞めても水を管理する役人くらいなら務まるかもしれない。

仏教ではすべてが幻で空であると説くように、

我が眼は暗くなって、確かにものはろくに見えない。

それでも、遊び歩くことは自由にできて、

我が足はまことに軽やかに動く。

貴君は竜井の水をわざわざ遠くから送ってくださったけれど、

どうせ水に関わるのだったら、

昔の名人のように池を真っ黒にするまで書の修練に励んだらよいだろうに。

(水と縁のある故事を集めて、知的に愉快である詩を組み立てた作品のようだ。故事を詳しく参照しなくても大意がわかる程度に軽く訳した。原詩を一生懸命に研究すれば、含蓄に富んだ句を深く味わうことができるだろう)

■次京師韻送表弟程懿叔赴夔州運判

程之邵(字は懿叔)が蜀の夔州の役人となって任地に赴くことになり、

この詩を送った。程之邵は蘇軾の姉の夫であった程之才の弟で、かつて蘇

軾が都にいたときに、程之邵が^し泗州知事として赴任するのを見送る詩を作っていた（第8章210ページ）。これはその詩に次韻したもの。

（なお、^{こう}杭州の役場に^{てい し しょう}程之邵（字は^{あざな}遵彦^{じゆんげん}）がいることを本章78ページで見ているが、それとは同姓同名の別人である）

貴君も叔父も甥も誰もが、

すっかり老いて古ぼけた顔になってしまった。

我等は東の地で知事の職に就いたわけだが、

もとはといえ^よばかの佳き江山において成長したのだった。

山の松には鮮やかな花は咲かない……

だから髪に挿して飾ることはできない。

我等はいわば松のようなもの……

老いてもなお死なずにいられるのをよしとしよう。

榮枯の間で浮沈することなど笑ってしまえばよいのである。

私ははなはだ^{はくらくてん}白楽天に似てきてしまったようだが、

ただ違うのは、白楽天は若い二人の女性を近づけていたことだ。

さすがに八十とか九十とかになるより前には官職を去るはずで、

一紀^{ひま}（十二年）の閑^{ひま}くらはは持ちたいものである。

貴君もまた進退は不器用な方で、

才能はありながらも、頑なな運命の定め^{ひま}に左右されているのだ。

譬えるならば、

万斛こくの大きな船が、九つに折れ曲がる水路を行くようなものだ。

貴君の兄上は最近、仏法を聞いて、

この世界は大海に浮かぶひとつぶの泡のようなものと悟ったという。

ならば、歳の暮れへと向かうこれからの日々に、

故郷の家への道に草木に繁らせないようにしてはいかがであらうか。

（「貴君の兄上」と言っているのは程之元ていしげんのことで、程之元に送った詩を第8章37ページで見ている。程之元そは楚州知事となったので、やはり「東の国で知事の職に就いた」のだった。蘇軾と程兄弟の間にはしばしば手紙のやりとりがあり、程之元からの手紙に仏法を学んで得るところがあったと記してあった）

■次韻劉景文登介亭

劉季孫りゆうきそん（字は景文あざなけいぶん）が介亭かいていに登って詠んだ詩に次韻した。介亭は鳳凰山ほうおうざんにあつて、北に西湖せいこを、南に錢塘江せんとうかうを見下ろすという。

ここ水の国は梅雨が終わったところ、

老年の身は、この蒸し暑さに苦しめられる。

高くそびえる介亭かいていは新たに瓦を葺いたばかり、

そこへと向かうなら、足はすこぶる軽い。

介亭の脇、横の松の根もとにある井戸は深さ百尺、

二つのつるべを引き上げるなら、

きよ
浄らかな青い水が飛び走る。

うかづき
そこに觴を流す遊びを始めると、

子どもらがわっと集まってきて、

腹を抱えて皆で大笑いする。

涼しい風が吹いてきて、

あたかも風に飛び乗れるような気になる。

いわお
そうか、巖のもとに猛々しい気が宿っているのだ。

ここは世の内でありながらも、存在の外にあるのだ。

だから夏の暑さとも無縁なのだ。

長く歌うと、声は雲へと入り、

弦管の音も追いつけはしない。

せい こ
北に見る西湖はまことに西施ではないか、

煙る樹木は西施の眉と目だ。

せんとうこう
南に見る錢塘江に穏やかなときはない、

高い浪は屋上に雪を翻すばかり。

一瞬にして四つの大海を飛び越える伝説の鳥のように、

ああ、百世も速やかに過ぎ去って行く。

せん
遠く錢氏の(呉越国の)時代を追憶し、

この介亭を建てた近き世の知事を思う。

吾が生は寄せるが如きのみ。

重んじるのは寸暇、一尺の玉などは軽んじる。

劉將軍(劉季のこと)のこの詩のすばらしさは、

掛け軸を飾るために用いるようなものではない。

劉將軍がひとたび手を揮うと千の言葉が溢れ出て、

春の山に色とりどりの鳥を舞わせ、

月の照る谷で猿を悲しく泣かせる。

劉將軍は朝は鶇の高鳴きよりも先に起き、

夜は蝸の声より長く励み続ける。

私は老いてもう詩を吟じることはなくなっていたのだが、

貴君に頼ってたまには詠み合うとしようか。

よし、ここの谷を起点として、

いまから遠く見に歩こうではないか。

散策三昧こそは至上の楽しみ、

いわゆる五欲(色、声、香、味、触の欲)などとはおさらばである。

とはいえ、

昔、詩句で劉師服を圧倒した風狂の道士には、

私は及ばないのである。

(1) 蘇軾は西湖を古の美女の西施にたとえた詩をかつて詠み、すこぶる人口に膾炙した(第4章94ページ)。この詩の中ほどで蘇軾は、まさにその通りだと、わざとらしく

納得してみせたのである。(2) 介亭かいていを建てたのは30年ほど前こうに杭州知事そむであった祖無たく扱たくであった。(3) 「吾が生は寄せるが如きのみ」という得意の句が詩の中ほどに置かれている。(4) 劉季孫りゅうきそんのことを劉將軍と呼んでいるのは、劉季孫が兩浙路りょうせつろの兵馬を管理する職にあったことと、父の劉平が壯絶な戦死を遂げ、その烈士の気風を継いでいることによる。(5) 最後の部分とうは、唐の時代かんゆに韓愈かんゆが書いた文章りゅうしふくに基づく。劉師服りゅうしふくはある風変わりな道士と句の詠み合いをしたが、とてもかなわずに降参したという。同じ劉姓の人物を引いて、蘇軾は劉季孫を屈服させることなどできないと歌ったのである。(5) この詩は、次韻の詩につきまとう短所であるところのごたごたした印象は免れないものの、叙景と叙情を兼ね備えた格調高い作品であるといえるだろう)

■袁公濟和劉景文登介亭詩復次韻答之

介亭かいていで劉季孫りゅうきそんが詠んだ詩に袁穀えんこく（字は公濟）あざな こうさいが次韻したので、蘇軾がそれに和して答えた。袁穀はこのとき杭州こうの副知事であった。

私は、酔っての夢こんこんに昏昏おとして墮ちてしまっているような状態にいる、この六月の蒸し暑さをどうすることもできないのだ。

貴君の詩は、

朝の眠りが十分に足りたところに吹いてくる涼しい風のようなようだ。

貴君は山水に登臨すれば必ず佳句を得る。

介亭かいていから見るなら、

銭塘江は白く輝き、北に西湖の水を照らし出す。

貴君は、手を袖に入れて独りじっと黙っているうちに、
腹の内にすでに詩稿がでざあがっている。

このとき、風雨が過ぎ去り、

藹藹として雲が麓に帰ると、

星はまばら、月はかすか、

炎暑はもはや収まったのだった。

惜しいことに、

清らかなこの光景も、たちまち変化して消滅し、もはや逐うことができない。

しかし、帰ってから、貴君の詩を読むなら、

歌歌としてなおその清らかな光景が目の中に存在するのである。

思えば、貴君とは若いときに、

試験場においてその声価を争ったのだった。

貴君は、水を翻すかのようにして文章を書き、

手を交差させる間に賦を作った。

秋風に雁が飛び立つころに行われたその試験で、

私は貴君の後ろに従って合格した。

その貴君は、

本物の玉を王に献じたにもかかわらず、

石であるとして足切りの刑にされてしまった下和のように、

どうして泣かなければならなかったのか。

貴君なんしんと南新県の道で会ったときに、

貴君は青うわぎい衫うわぎに破れた袖を垂らしていた。

こも大きくつまずくことを早くに知っていたなら、

貴君は十年の歳月を(官界に出ようとせずに)読書に使っていたであろう。

漢かんの時代に少しも昇進ふうとうしないままに老いた馮唐を嫌うことはない、

早くに中央召されながらついには放逐されてしまった賈誼かぎよりもまさっているのだから。

今年になって貴君と同僚になり、

旧ふるい好よしみを重ねて続けることとなった。

世間の昇り沈みなどは言うに足りないことだ、

蝸牛かたつむりの左右の角が争う程度のことでしかないのだから。

さあ、ともに湖山あるじの主となって、

川や谷を窮めようではないか。

人が駆けても貴君は争わない、

人から棄てられることこそが我が望むところである。

いつか宮廷の門に官服と冠をひっかけて、

一緒に故郷に帰ろうではないか。

(1) これは蘇軾えんこくの気持ちのやさしさが溢れ出た詩である。もとの袁軾の詩は、蘇軾との古い関係については何も触れていないが、蘇軾のこの詩はもっぱらそのことを歌っ

ている。(2) 若いときに袁轍と試験場で争ったというのは、都で行われた科擧の一次試験のことであるようだ。そのとき袁轍のほうが上位の成績であったのだが、二次試験には合格できず、以来袁轍は苦しい歳月を送らなければならなかった。(3) 南新県なんしんで会ったとあるのは、蘇軾がこう杭州副知事であったときのことであろう。袁轍は官職を得たものの低い地位にあったのだらう。(4) 現在副知事の地位にまで昇った袁轍とともに仕事をするようになり、官職を辞めるときには一緒であると蘇軾はこの詩の終わりで約束した。なお、袁轍は後にしよ処州知事に昇進している)

■ 鵲橋仙

七夕そけん あざな はくこに蘇堅（字は伯固）が詠んだ詞に和した。蘇堅の名は運河の改修工事を提案した人としてその名を見ている（本章 94 ページ）が、詩詞の才もあって蘇軾と気が合い、応酬の作が数多く残っている。

乗槎いかだ歸去、（槎に乗って行きましょう）

成都何在せいと。（成都はどこにあるのでしょうか）

万里江沱漢漾ちやうこう かんすい。（万里の向こう、長江、漢水の遙かな源です）

与君各賦一篇詩、（あなたに差し上げるこの一篇の詩を）

留織女、（織り姫に渡して）

鴛鴦おしどり機上。（鴛鴦の織物に縫い込んでもらいましょう）

還將旧曲、(これは昔作った曲)

重贖新韻、(あなたの新しい曲へのお返しいたします)

須信吾儕天放。(私たちは天から放たれてしまった者なのではないですか)

人生何処不兒童、(人生はまったく子供の遊びのようです)

看乞巧、(御覧なさい、七夕の夜に)

朱樓彩舫。(流される飾り舟を)

(1) 後半の始まりにある「旧曲」「新韻」の意味するところはよくわからない。かつて2人の間で贈答し合った詩詞を踏まえているのだろうか。(2) 最後の部分は、七夕に飾り付けた舟を川に流す風習があり、その姿を官界に浮遊する自分たちになぞらえて歌ったものであろう)

■葉教授和溽字韻詩復次韻為戲記竜井之遊

詩題は、「葉教授が溽しゅうの字を韻じょくに用いた詩に和した。それにまた次韻して、(劉季が)竜井りゅうせいに遊んだことを戯かいていれに記した」。葉教授は未詳。「溽の字を韻に用いた詩」とは先に見た介亭かいていでの詩を指す。介亭の詩から延々と次韻のリレーが続いたのである。

(1) 「溽しゅう」の字は先の一連の詩では、もっぱら蒸し暑いという意味で用いられていた。ここでは淡泊の対義語として、飲食の味が濃厚であるとの意味で用いている。(2) 詩題にある竜井りゅうせいは、本章 109 ページで見た径山けいざんの竜井とは別のもので、西湖せいこの西の風篁嶺ふうこうれいの近くにあった。風篁嶺の周囲にはいくつかの泉があり、竜井はその最も大きなもので

あるという。なお「嶺」は日本語でいう「峠」に当たる場所

先生は魯(孔子を生んだ儒学発祥の地)の儒者の一人、

飲食は清らかで濁ものは食べない、

いつも空っぽの腸から匂を吐き出し、

よくよく咀嚼するなら五つの味が全て具わっている。

立派な屋敷で賑やかに音楽を奏で、

目をぎらつかせているような連中を見かけると、

腹に毒を含んだ冷淡な顔をしているわいと、

急いで走って逃げてしまう。

家に帰ると、瓠の葉を燃やして豆を煮て、

弟子とともに太古の詩を歌う。

それは人を戒め、聖人を讃え、

あるいは、

「功名などは走り行く兎、千人の者が追っても我は知らぬ」

と、うそぶくのである。

先生は我等のような者も受け入れてくださり、

ともに静かに座って、目を閉ざして時を過ごすのである。

高亭(介亭あるいは葉先生をいふか)は岩を積み上げた高みにあって、

木の枝の先に屋根をかけたかのよう、

客人を招くということはないのだが、

我等はいつでも定めずに訪れるのである。

雪のような髯おきなの叟りゅうき(劉季のこと)が、

西の嶺りゅうせいに竜井を訪ねたということを知った――

朝日が山に射し込むと、

水みづに涵ひたされたように地上の瓦が輝き、

雲は無限の広がりを見せ、

西湖せいこは夜のあいだも閉ざされることはない。

仏陀が法を説き、仙人が書を読むのにふさわしいこの竜井の地に、

庵いおりを結ぶ老人べんさいろう(弁才老)がいて、

座禅を組むときには、天魔てんまも畏れて哭き、

善き菩薩が時に集まって、ここに法燈をともし続けている。

吾らは詩や酒に汚された者、

その庵を訪れたく思っても、障りがあるのを恐れる。

願うのは第一義(仏法の最上の教え)を聞くことであって、

山中の食事しょくじにありつこうというのではない。

そうだ、官服などは脱いでしまえばよいのだ、

私は子供のころからむしろ妙な衣服を好んだのだから。

(蘇軾は次韻の名手であるが、さすがに何度も次韻を重ねたせいで並みのやり方では詩を組み立てられないと、超絶的な語彙力を駆使しての H 難度の作品としてなんとか

ものにしたということであろう。訳者如きには難しすぎて大意を汲むことさえまな
 らないのだが、^{べんきいろう}弁才老がここに登場し、後でこのことが関係してくるので、ひどく出来
 の悪い「ずっぱ訳」ながらもここに掲げておく)

■次韻林子中見寄

^{じゆん}潤州知事の^{りん き}林希（字は子中）（本章79ページなど）から寄せられた詩に次
 韻した。

都で詩友となった者たちはいまやいずれもさすらいの身、

あのころは、痛飲、痛吟する連中に苦しめられたものだ。

貴君は昔の^{せいけん}盛憲と同じ名のある人、

私はというと、昔の^{とうえんめい}陶淵明と同じ世間とはうまく合わせられない者である。

かつて私は^{さんざん}蒜山に隠れ住む旅人になろうとしたが、

^{ちやうこう}長江には^{びんこう}岷江の水が混じっているように、

私はいまもって根は^{しよく}蜀の人間である。

^{せい こ}西湖では千頃の^{けい}葑を取り除き終わったから、

魚がさらに数を増してゆくのを笑って看ることになるだろう。

(1) 林希になぞらえた^{せいけん}盛憲の名は第8章180ページで見ている。(2) ^{じゆん}蘇軾が潤州の

^{さんざん}蒜山に隠棲することを希望したことは第7章76ページで見ている。(3) 最後の結びは

西湖に根を張った水草を取り除く工事が終わったことを詠んでいる)

■安州老人食蜜歌

「異人^{いじん}」を好む蘇軾らしい詩。詩題は「安州^{あん}老人が蜜を食することを歌う」。ここにいう安州老人とは、安州^{せんとう}出身で錢塘^{ちゆうしゆ}に住む仲殊という僧で、即興で詩を作るのが巧みで、五穀を断っていつも蜂蜜を食べていた。少し詳しいことが陸游^{りくゆう}の随筆『陸放翁詩話』^{りくほうおうしわ}に記されているので、それを先に読んでおこう。

一族^{りくげんえん}の陸彦遠がこのように話していた。

「若い頃^{ちゆうしゆ}に仲殊長老^{そとうぼ}を見たことがある。蘇東坡は長老のために『安州老人食蜜歌』^{あんしゅうろうじんしょくみつか}を作った。そのとき、蘇東坡は数人連れて長老を訪ねたのだが、食べる物にはどれも蜂蜜が用いられていた。豆腐^{うどん}、麵筋、牛乳の類のいずれもが蜂蜜^{ひた}を漬して食べるので、連れの人々の多くは箸を下すことができなかった。ただ蘇東坡だけはもともとから蜂蜜が好物で、長老とともに満腹するまで食べた。崇寧^{すうねい}年間に、長老はふいに寺の人々に別れを告げると、方丈の門を閉じ、自ら縊死^{いし}した。火葬にすると、五色の舍利が数知れず残った」

……(中略)……

陸彦遠はこのようなことも言った。

「仲殊長老は若いときは士人であった。遊蕩にうつつを抜かしてあまりにひどかったので、妻が羹藪^{かんそく}の中に毒を入れ、長老はほとんど死にかけた。蜂蜜を食べて毒を消した。医者は『次にまた肉を食べると毒が力を發揮して、今度はもう治療できない』と言った。長老は家

を棄てて僧になった」

……(中略)……

『呉郡志』に、「仲殊、字は利利、承天寺の僧。人々は蜜殊と呼んでいた。詩に巧みで
『宝月集』があったが、いまは伝わらない。……(中略)……後に枇杷の木の下で自經して
死んだ……(後略)……」とある。

(仲殊が死んだ崇寧年間というのは、蘇軾が杭州を去ってから十数年後である。陸游
が生まれたのはそれから 20 年ほど後であるから、陸游より一世代上の陸彦遠 (原文で
は族伯父とある) が仲殊から直接話を聞いたということは十分にありうる。自經したのは
世をはかなんだわけではなく、死ぬべきときが来たと知って自らの意志でこの世と別
れたのであろう。なお、陸氏は会稽 (越州) の名族である)

安州老人の心は鉄に似ているのだが、

老人には小児の舌が付いているのだらう、

五穀を食わずに蜂蜜ばかり食べている。

蜜蜂を指して、

「これはわしの檀越(施主)である」

と、笑って言う。

人は蜜の中に詩があることを知らない。

千花百草の姿がそこにそっくり含まれている。

老人はそれを咀嚼して時にぱっと吐く。

世間の愚かな小児のような人々は、
蜜に引かれる蜂のようにその詩に集まってくる。

蜜(詩)には百病を治す薬効がある。

俗事に狂奔しているときに、

老人の詩を見てふっと笑うなら、

百の憂いがさっと消えてしまう。

とうぼ
東坡先生は人に対して慎み深い方であるのだが、

果たして幾人が東坡先生の言葉を歓び、

幾人が東坡先生の言葉を嫌うのか。

ちょうど茶を飲んで、甘いとも、苦いとも感じるのに似ているだろうか。

それでも、蜂蜜を食べれば中も端も全てがあま甘いには及ばない。

蜂蜜好きの老人に敢えて「双竜餅」(そうりゅうへい茶の名)を差し上げるとしようか。

鏡を見たら、なんとふた「双つの竜の影」(安州老人と東坡先生の影)が映っているではないか。

さんご
三呉の地の六月は暑さのあまり水も湯のようになってしまうが、

老人の心は「双竜井」(そうりゅうせい銘茶の産地の水)のように清冷である。

(1) 蜜と詩、蜜と茶をごちゃごちゃに対比させて楽しく詠んだ詩。(2) 蘇軾が自分自身について、「東坡先生取人廉、幾人相飲幾人嫌。恰似飲茶甘苦雜、不如食蜜中辺甜」

とうぼ (東坡先生 れん 人に廉を取る、あ 幾人が相い^あ 歓び あたか 幾人が嫌う。恰も似たり に 茶を飲んで甘苦 かんく
ま の雑じるに、しか 如^{ちゆうへん} ず蜜を食して中辺の甜きに) あま と詠んでいるところが面白い。この部分

には蘇軾自身の注で「仏陀は『吾が言は譬えれば蜜を食らうようなもの。中も辺も皆甘いのである』と言った」とある。つまり、蘇軾は、自分は甘みと苦みの混じった言葉を吐いてしまうので、飲む人もいれば嫌う人もいると、そのように自覚していたのである。

(3) 終わりのところは三つの「双竜」を並べた遊び。(4) 「三呉の地」とは呉興、呉郡、会稽、あるいは蘇州、常州、湖州を指す。要するに杭州周辺をおおまかに示す語として蘇軾はよく用いている。(5) この詩を「晩唐の詩の下流である」と低く評価する向きもあるが、仲殊長老に倣って蜜のように甘い味の詩を作ってみせたのだろう。(6) 蘇軾が蜂蜜好きであったとするのは、黄州時代に蜂蜜酒を詩に詠んでいること(第6章 292ページ)などからきているのだろう)

■送張嘉州

嘉州知事として赴任する張姓の人を見送った詩。嘉州は蘇軾の郷里に近く、第1章2ページで嘉州を發った際の詩を見ている。張氏はどのような人物であるかは不明で、この詩から推測するに江南を故郷とするようである。

李白は手紙にこう書いた――

「天下の人々は集まるとこのように語り合う。

この世に生まれたからには、

一万戸の州の領主になるより、

かんちようそう

韓朝宗(人を見る目があるとされていた)の面識を得たいと願っている、と」

私は少年のころ、

一万戸の州の領主になることも願わなかったし、

韓朝宗の面識を得たいと願いもしなかった。

本気で願っていたのは、

できれば嘉州知事かとなって、

しばしば酒を載せて凌雲寺りよううん(嘉州の寺)に遊びに行きたいと。

ところが、無用な虚名にはだされていまや白髪頭となり、

夢の中でのみ竜泓口りゅうおうこう(凌雲寺の裏手の谷)に行くのである。

高官の衣服を身に着けるなど、浮き雲のようにはかないこと、

江山こうざんの内に身を置く時間こそが、手に入れ難いものなのである。

李白は詩にこう詠んだ——

峨眉山月半輪秋、がび(峨眉山の山月 半輪の秋)

影入平羌江水流。へいきやう(影は平羌の江水に入って流る)

李白のこの語を理解するのは誰なのか。

貴君は是非とも、

明月楼めいげつろう(嘉州の高楼)に登って月を見るがよい、

そして、万事のうち何が真であるのかを笑って語るがよい、

全ては東巖とうがんの酒(嘉州の地酒)に委ねればよいのだ。

こちらにまた帰ってきたならば、

この老人の好意を避けることなく、
一銭ばかりの酒を飲みかわそうではないか。

(1) 李白りはくをさかんに持ち出しているのは、李白も蜀しよくの人だからである。(2) 最後のところは、昔、会稽かいけい (越州) に清廉な太守えつがいて、人から百銭を贈られたときに、そのうち一銭だけを受け取ったという故事を引いている。ここは意味を成さない蛇足であるとの評もあり、この訳文はかなりの「ずっぱ訳」である)

■奏浙西災傷第一状

杭州知事としての蘇軾の特筆すべき仕事の一つに災害への迅速な対応があった。赴任してまだ日の浅い昨年の11月4日に、気象災害が大飢饉に発展する予兆があるとして、それへの方策を記した書状を朝廷に提出し、国のバックアップを受けて各種施策を実行し、その結果として今年の春には目立った被害を出さずにすんだ。この年も、7月に災害が再び発生する恐れがあると見るや、すぐに動き出した。朝廷に差し出した書状の冒頭の部分を見ておこう。

元祐五年七月十五日、竜図閣りゆうと学士左朝奉郎知杭州蘇軾、書面をもって申し上げます。

臣わたしはこのように聞いております。「事ことは予めすれば則ち立ち、予めせざれば則ちすなわ廃あらかじす」(あらかじめ準備しておくなら成功、あらかじめ準備しておかないなら失敗する)。これは

昔から今も変わらない真理であります。

とりわけ、災害を救い、被災者を援助することでは早さが最も大切です。災害にあった民衆をまだ飢餓に至る前に救うなら、用いる物資は少なくてすみますし、効果は広い範囲に及びます。税の徴収を緩めたり軽減したり、備蓄されている穀物を売りに出したりするようなことであれば、官にとっては大きく失うものはなく、しかし民衆はお上より大きな恩を賜われるのです。今年はそのようにすることによって成功しました。もしもすでに民衆が飢餓に陥ってからようやく救済に乗り出したなら、物資をたくさん使っても効果は小さく、官の倉庫を空にし、税金が大幅に落ち込んで、官が苦しむことになり、飢えた人々はついには死に至ってしまうのです。熙寧年間にはまさにこのようなことになったのでした(以下、改革政治が進行していた熙寧年間の飢饉について、対応が遅れたために、^{せっせい}浙西路だけでも死者が五十万人以上も出たことを述べる)。一方、昨年は浙西路の数郡においてまず水害が起こり、次に干害が発生し、その災害の度合いは熙寧年間と比べても小さくはありませんでした。しかし、二聖(皇帝と太皇太后)の仁智聡明によって、去年の十一月にすぐに御指示が下されたのでした(以下、朝廷の執った方策、実は蘇軾が提案したもの、について述べる)。こうして一人の餓死者、流民を出さずにすんだのでした。これは事に先んじて対処したからに他なりません。これを見れば、「事は ^{こと} 予めすれば則ち立ち、^{あらかじ} 予めせざれば則ち廃す」の二者によって、禍福がこれほどまでに決定的に異なることがわかるのであります。

(以下、再び早くに対策を立てなければならなくなった緊迫した状況にあることを報告し、今回の対応の概要を述べる)

(1) 上の書状を書いた10日後の7月25日に、蘇軾は短い第二報を朝廷に出している。そこでは、7月21日から23日にかけて嵐があって、災害はいよいよ差し迫ってきたとして、朝廷に迅速な対応を求めている。しかし、被害が何も出ていないのに蘇軾が一人で騒いでいるとの意見があって、朝廷は動こうとしなかったのに、9月に宰相の呂りよ大防たいぼうに向かって急いで対応してほしいと強く訴える蘇軾は手紙を書いている。(2) 蘇軾が最も恐れるのは、地方が中央の顔色を伺って何事も順調であると偽りの報告をし、どうにも隠しようがないほどの甚大な被害が生じるに及んで、ようやく効果のあまりない手を打つようなことが常態化してしまうことであった。改革政治が行われていたときにはまさにそのようなことがあったのを蘇軾は実際に見ていたので、先手先手で対策を実行して行くことの重要性を強く朝廷に訴えたのである。しかし、そうした考えは浸透せず、民衆は折々の自然災害に苦しめられ、社会を不安定化させる重大な要因である流民の増大を招き、宋は外部からの攻撃だけではなくて、内部からも崩壊して滅亡へと向かって行ったのだった。(3) なお、細かいことだが、両浙路りょうせつろはかつては東浙路とうせつろと西浙路せいせつろに分かれていた。この文章ではもっぱら西浙路について述べている)

■南歌子

8月18日に錢塘江名物の海嘯かいしやうを觀て、蘇堅そけん（字は伯固あざな かくこ）の詞に和した。蘇堅の名は118ページなどで見ている。

其の一

海上乗槎侶、(海でいかだ槎に乗る友といいますと)

仙人萼緑華。(仙女のがくりよくか萼緑華でありましょう)

飛升元不用丹砂、(仙薬などなくても自在に飛べて)

住在潮頭来処、(潮の頭の上いにいて、こちらこにこ来たかと思つと)

渺天涯。(もう天の涯いにいるのです)

雷輶夫差国、(雷がこの国こにとどろきわたります)

雲翻海若家。(海うみの神の家が雲くもにひっくり返されたのでしょうか)

坐中安得弄琴牙、(この潮うしほを見て誰たれが歌えるでしょうか)

写取餘声歸向、(潮うしほの声を少しも写し取れたなら)

水仙誇。(仙人せんじんたちに誇うれるでしうね)

(激しく遡る潮の上に仙女がサーファーのように乗るありさまを空想した戯れの詞。

大意をとって訳した。原詞にある「海若」は海うみの神で、『莊子』に、北海若が井いの中

の蛙かえるに海うみの話はなしをしても通じないと、巨視こつしの哲学を語る寓話うたがはがある。また、唐たうの柳宗元りゅうそうげん

は、東海若とうかいじゃくが仏教ぶつぎょうについて語る寓話うたがはを書いていて、後に蘇軾そしがそれについて記した文章ぶんしょうを見る)

其の二

苒苒中秋過、(せかせかと中秋しゅうしゅうが過ぎ)

蕭蕭兩鬢華。(しおしおと髪は白くなります)

寓身化世一塵沙。(この世界に寄せる身はひと粒の砂)

笑看潮来潮去、(潮が来て潮が去るのを笑って見る間に)

了生涯。(生涯を終えてしまうのです)

方士三山路、(道士には仙界への路があり)

漁人一葉家。(漁師にはひとひらの舟があります)

早知身世両声牙。(早くから世間とはうまくいかないと知っていました)

好伴騎鯨公子、(よし、鯨にまたがる公子(李白)を好敵手として)

賦雄誇。(勇ましい詞を賦すとしましょう)

■題張白雲詩

張^{ちやう}兪^ゆ (号は白雲^{はくうん}) の詩に添えた短文。

張^{ちやう}兪^ゆは西蜀^{せいしやく}に隠れ住んだ君子^{あざな}で、字^{しょう}を少愚^{しょうご}といった。私の父(蘇洵^{そじゆん})と交流があり、岷山^{びんざん}の下^{はくうんけい}の白雲溪^{はくうん}に住み、自身^{こじ}で白雲居士と号した。もともとは世に出て政治に携わる志があったのだが、己を重んじて他人と合わないところがあったために、草野に老いて死ぬことになったのであって、わざと垢まみれになって隠者の名を盗もうとする者ではなかった。

たまたま西湖^{せいこ}の静軒^{せいけん}に遊んだところ白雲居士の遺句が記されていた。それを見て

その人を懐い、寺の僧にその句を石に刻むよう命じた。

元祐五年九月五日。

(先に亡くなった范鎮(本章38ページ)が成都知事であったときに張兪を訪ねて詩を贈答し合ったという。杭州にも伝わって蘇軾が石に刻ませたのはどのような詩であったのだろうか)

■九日袁公濟有詩次其韻

9月9日は重陽の節句。杭州副知事の袁穀(字は公濟)が詠んだ詩に次韻した。

昔から言われている――

静かに治まっているときには清らかな閑を得ると。

私は恥ずかしく思う――

静かに治めた昔の名知事のほんの端くれにも及ばぬのを。

それでも、

東に向かって酒を挙げて江海に捧げ、

落日に向かって樽を回らせて湖山に勧めよう。

平生からこもごもの悲歎と親しんでいるのだが、

いつかは公文書の山からこの身を抜き出すことができるのだろうか。

笑って指さすのは西南の方角、

これは帰り行く路だ、

飛び疲れて弱った羽はずっと還りたがっている。

(1) 冒頭の部分は漢の時代の蓋公こうこうの「治道は清浄を貴び、民は自ずから安定する」という言葉(第5章126ページ)を踏まえている。(2)「昔の名知事」と訳したのは、原詩では晋の劉惔しん りゅうたんの名を挙げていて、その政務は「鎮静」と評された。蘇軾は何事もなく静かに治まることを理想としたが、杭州こうに来て以来、災害対策やインフラ整備など忙しく動き回らなければならなかった。(3) 西南の方角がどうして帰り行く路なのか、袁穀えんこくの郷里がその方角だからである)

■和公濟飲湖上

はっきりとはわからないが、上と同じ日に西湖せいこに船を浮かべたのだろう。袁穀えんこく あざな こうさい(字は公濟)が湖上で酒を飲んだことを詩に詠み、翌朝になってそれに次韻したのだろう。

昨夜は酔って帰り、そのまま寝てしまった。

枕辺で鳴る雨の音に、暁の夢から覚める。

貴君の詩を読み、

一艘の舟に乗って再び湖に漕ぎ出そうかという気分になってくる。

青い山が朝日に染まる雲をまとうのが見えるであろう。

老人といえども興趣は浅くはない、

また一緒に飲んでくれたまえ。

そして、太鼓を叩いて貴君と歌おうではないか、

豊年の楽しさを。

千人万人を呼んで、

倉庫に蓄えてある米を全部食べさせてしまうのだ。

(災害対策に心を砕く蘇軾は、豊作のおかげでもはや不要になった備蓄米を放出することを夢想しているのである)

■点絳脣

同じ重陽の節句に蘇堅そけん あざな はくこ(字は伯固)と詩詞の贈答をした。これは、今年の重陽の節句に蘇堅が詠んだ詞の韻をそのまま用いて作ったもの。

不用悲秋、(秋を悲しむのはよしませう)

今年身健還高宴。(今年は元気に宴席にいられるのですから)

江村海甸、(川も村も海も町も)

総作空花觀。(総ては仏陀の言う通り空中の花のようなものでありませう)

尚想横汾、(想い見るのは、かのときの漢の武帝が)

蘭菊紛相半。(蘭と菊が乱れ咲くのを歌ったありさま)

樓船遠、(その武帝を乗せた船は遠くに消え)

白雲飛乱、(白い雲とともに乱れ飛ぶ雁が)

空有年年雁。(去り行くままに一年一年が空しくなるのです)

■書朱象先画後

しゅぞうせん
朱象先の画に記した短文。朱象先は蘇軾と同じ時代の人で、山水画に巧み
で、せいこいんし
西湖隠士と号した。

しゅうりょう 松陵の人である朱象先は、しゅぞうせん 立派な文章家であるけれど科挙の試験を受ける気は
さらさらなく、善い画を描くけれどそれを売る気はさらさらない。朱象先はこのように言
う。

「文章は吾が心を十分に書き表すことができたならそれでよく、画は吾におもい意に適え
ばそれでよい」

とう 唐の時代の閻立本はもとより文学で身を進めたい(経世の学で国家枢要に地位に昇)
たいと考えていたので、世間から画師として見られるのを取じた。ある人は、このこ
とをもって朱象先の考え方はおかしいと言うのだが、私はそうは思わない。

しん 晋の時代に、たいきょくでん 皇城の太極殿が完成すると、しゃあん 謝安は、正面に掲げる額の文字を王
けんし おうぎし
献之(王羲之の子で書の名手であり、国の重職にあった)に書かせようとした。王献之は
いたん 韋誕のぎ 故事(三国時代の魏の大臣であった韋誕は能書家として知られ、りょううんだい 凌雲台が完成した折
に、額に題字を書くよう皇帝に命じられた。額はすでに大工が誤って高所に釘で打ち付けてしまっ
ていたので、韋誕は長い梯子の先に登って文字を書かなければならず、恐ろしさの余り、地上に

降り立ったときには髪が真っ白になっていた。そして子供らに、「書などは決して学んではならない」と言った)を引いて、次のように言って断った。「韋誕は魏の大臣でありましたから、そもそもこのようなことはなかったはずです。もしも事実であったならば、魏の徳のなさが知れてしまいます」。閻立本にもしも王献之の気節の高さがあったなら、誰が敢えて画師として閻立本を使っただろうか。

やはり晋の時代に、阮瞻げんぜんは琴を巧みにか弾き、身分の高い人でも低い人でも、老人でも若者で、聴きたいという者があればそのために弾いてやった。その音色は、心と自然が融合し合い、誰がそこにいるかなど関係なかった。妻の兄の潘嶽はんがくのために弾くときは、夜中になるまで弾き続けても嫌がることがなかった。それで、人々は阮瞻は栄辱とは無縁であると知った。

いま朱象先は世に求めることは何も無い。王公貴人も朱象先に画を描いてもらうことはできない。もしも朱象先が衣を解いて絵筆を持つようなことがあったならば、私も人と争ってその傍らに座りたいと思うのである。

元祐五年九月十八日、東坡居士書く。

(閻立本が画師としてのみ世間から評価されるのを嫌ったことは第2章2ページで見ている。士大夫が勉学に励んで科挙を目指すのは、単に立身出世を求めてのことではなく、儒学の本筋として世に役立ててこそ学問の価値があると考えからである。その意味では、最初に朱象先を批判したある人の意見が正しいのだが、蘇軾はこの文章で阮瞻げんぜんや朱象先はより高い境地にあるとしている)

■介亭餞楊傑次公

ようけつ あぎな じこう かいてい
 楊傑（字は次公）（本章 17 ページなど）が都に行くことになり、介亭（本章
 112 ページ）で送別の宴を開いた。

かご とうざんもん
 籃輿に乗って街の西、登山門から出る。

よし、我が友とともに、仙人の住む村を尋ねようではないか、

かいてい 介亭のある山の下には、ユートピア 桃花源への路があると言われているのだから。

先の朝には、山に登ろうとあした 蠟屐を履いたところで

黒い雲から盆を傾けるようにして雨が降り落ちてきたのだった。

今朝は、千里の広さに積み上がった霧が巻き上がろうとしていて、

ふうこうれい 風篋嶺の画のような姿が見え隠れしている。

霧に当たるとその熱を受けて病のもとになるというが、

そんなことを畏れるものではない。

むいし 貴公は無為子と号する在家の僧、

せいざん 青山とは長く兄弟の間柄である。

峰々を登り尽く、その先に何かがあるのか、

せいこ 天の鏡のような西湖、

大地を呑み込むようなせんとうこう 錢塘江。

高いところから臨み見て、手を振るって感謝する、

こうじゅう こうじゅう
 「好住、好住」(この住み好きところ)

この言葉を、清らかな風が一万の谷へと伝えてくれる。

聴くがよい、

風が谷を回り、響き答えてくれるのを。

私もこの風のように、

貴君の声にいつでもどこでも応じるであろう……

■謝吳山水神五竜三廟祝文

西湖の改修工事が完了し、9月のある日、西湖の神を祀った「吳山水神五竜三廟」に酒食を供えて感謝した。そのときの祝文。

西湖堙塞、積歳之患。（西湖は埋もれて塞がり、長年の患いとなっていました）

坐閱百吏、熟視而嘆。（大勢の役人はそれを見て嘆くばかりでありました）

惟愚無知、妄謂非難。（私は愚かにも、難しくはあるまいと妄りに言ってしまいました）

禱於有神、陰假其便。（私は神様に、陰ながら助けてくださいと、祈りました）

不愆於素、鹹出幽贊。（神様はお怒りにならずに、そっと手を差し伸べてくださいました）

大堤雲橫、老葑席卷。（大きな堤が雲へと伸びて行き、茂った草はなくなりました）

歷時未幾、功已過半。（さほど時間のかからないうちに半分以上もできました）

嗣事告終、來哲所繕。（工事の終了を告げましたなら、後に来る賢人がそれを繕うでしょう）

神卒相之、罔拂民願。（神様のお助けによって、これからも民の願いを無にしないでください）

肴酒之報、我愧不腆。（食べ物や酒のお供えが十分でないのを恥ずかしく思います）

尚饗。(それでも召し上がってください)

■贈劉景文

りゅう き せん あざな けいぶん
劉季孫 (字は景文) に贈った詩。

はす
荷の花は尽き、

雨を受ける葉の広がりもすてになくなった。

くず
菊の花は残れ、

おご
なお霜に傲る茎は立っている。

君は記憶してほしい、

よ
一年で最も好い光景を、

まさしく橙の実が黄で、橘の実が緑の時のこのいまを。

(これは初冬の賛歌である。秋から冬に向かうころは、中国でも日本でも寂しさを歌うのが伝統的な価値観であった。蘇軾はここに一年の内でも特によい光景があるとしたのである。しかも、柑橘類好きの蜀の人らしく、「橙は黄、橘は緑」という微妙な一時

こう
杭州知事の時代の傑作であると思われるので、原文と読み下し文を掲げておこう)

はすつ すで あめ さき がい な
荷尽已無擎雨蓋、(荷尽きて已に雨に撃ぐるの蓋は無く)

きくず な しも おご えだ あ
菊残猶有傲霜枝。(菊残れて猶お霜に傲る枝は有る)

一年好景君須記、(一年の好景 君須く記すべし)

最是橙黄橘绿時。(最も是れ 橙は黄 橘は緑の時)

(この詩とは関係ないが、このころにあったとされる三つのエピソードを、先にも引用した何遜の隨筆『春渚紀聞』から読んでおきたい。事実か眉唾物かの判定は確定していないようだ。

銭塘の顔幾(字は幾聖)は、才能ある人物ではあったが振る舞いが自由気ままで、毎日酒を飲んでばかりいた。東坡先生(蘇軾)が杭州知事になったときに、科挙の一次試験が行われ、顔幾は土地の金持ちの子である劉君と入れ替わって、密かに試験場に入り込んだ。顔幾は首席で合格したのだが、ほかの受験生が訴訟を起こし、顔幾は獄に下された。顔幾はしばらく酒が飲めなかったので、こっそり獄吏に一首の詩を言づけて外の酒友達に渡そうとした。その詩は、「龜不靈兮禍有胎、刀從林甫笑中来。憂惶囚繫二十日、辜負醜酣三百盃。病鶴雖甘低羽翼、罪竜尤欲望風雷。諸豪俱是知心友、誰遣尊壘向北開」(詳しい意味は読み取れないが、要するに、獄に繋がれて二十日の間、病んだ鶴、捕まった竜のようになっているので、誰が酒を差し入れてくれ、ということであろう)。獄吏はその詩を東坡先生のところに持って行った。先生はそれを読んで取り調べを緩し、たまたま恩赦があつて放免となった。それから数年後のある日、顔幾は西湖の寺で酔い潰れ、起きてから壁に、
白日尊中短、(白日も酒樽の中では短いけれど)
青山枕上高。(青い山は枕より高い)
と、書いて、数日で死んだのだった。

替え玉受験の罪がどれほど重いのか知らないが、蘇軾^{ジョーク}は諧謔を好み、自身も獄中で詩を詠んだ経験がある（第5章401ページ）ので、顔幾^{がんき}を赦してやろうという気になったというのはいえぬ話ではないだろう。

東坡先生^{とうば}（蘇軾^{こう}）が杭州知事であったときに、綾絹の代金二万銭を払わずにいると訴えられた者がいた。公はこの者を呼んで問いたすと、「私の家は扇を作る仕事しておりまして、たまたま父が死んだことに加えて、この春からずっと雨が続いて気候が寒いために作ったものが売れません。決して借金を踏み倒したわけではないのです」。公はしばらくじっと見つめ、こう言った。「よろしい。そなたが作った扇を持って来なさい。私が売れるようにしてやろう」。すぐに扇が届くと、公は絹で作られた二十の扇を取り上げ、裁判用の筆を持ち、行書、草書をしたため、それに木や竹や石の画を描き添えて、またたく間に仕上げてしまった。それを渡し、「持って外に行き、これで借金を払いなさい」と言った。その者は扇を抱え、泣きながら礼を言って出て行った。役所の門を出た途端に、好事家が争って求め、一つの扇が一貫で売れ、立ちどころに全部がなくなった。後から来た者は買えなかったのをいつまでも残念がった。そして借金は残らず返せたのだった。一郡の者は感心し、泣く者さえもあった。

すでに見たように、蘇軾の書や画はよい値で売れたので、少々の借金なら簡単に返済できたであろう。

東坡先生^{とうば}（蘇軾^{げんゆう}）は元祐年間に杭州知事となった。知事の仕事を始めたばかりのころに、税の徴収をする部署の者が、南劍州^{なんけん}において科挙の一次試験に合格して都に上ろうとし

いていた呉味道ごみどうという者を捕らえた。呉味道は大きな荷を持ち、荷は封印がしてあって、「京けい師蘇侍郎宅宛」(蘇轍のこと)と記され、差出人が蘇軾そしになっていたのだが、それが偽りであることが露見したのだった。公はすぐに呉味道を呼び、その荷の中は何であるのかと尋問した。呉味道は恐れ入って縮こまり、「わたしはこの秋に忝も郷里の推薦を頂戴し、都に受験に行くことになりました。郷里の人々が銭を集め、都に行くための費用を工面してくださいました。それを絹に換えましたところ、二百匹になりました。しかし、道中の行く先々で税金がかかるのを計算しますと、都に着くまでに半分以上もなくなってしまいます。心竊かに考えますに、いま天下で最も名が重んじられ、また士を愛すること知られている方と申しましたら、あなた様と弟様です。たとえ嘘が露見しましても、きっと同情してくださるであろうと、あなた様のお名前をお借りて封印したのでございます。まさか先生がこの地に来られているとは知りませんが、偽りが知れてしまいました。わたしの罪は実に逃れ難いものですが、どうかどうかお許しいただけませんか」。公はじっと視ていたが、笑って書記を呼ぶと、もとの宛名書きに換えて、自分で「東京竹竿巷蘇侍郎宅」と書き、合わせて弟への手紙を一通したためて呉味道に渡し、「これより都に行かれなさい。来年はきっと合格されましよう。そしたらまたこちらにお越しくなされよ」。呉味道は何度も礼を言って杭州を去った。翌年、呉味道は上位の成績で合格した。呉味道が蘇軾への謝礼に記した文章はよい内容の立派なものだったので蘇軾は感心し、帰郷する途中の呉味道を数日間杭州に留めて歓待した。

一つ前のエピソードでも、蘇軾は罪人をじっと見て(原文は熟視)から判断を下している。その人物を見定めて処分を決めたのだろう。蘇軾にはそれだけの眼力があったという話ではあるのだが、知事の主観的な判断で事が決まってしまうのは一般的にはかな

り危険なことであろう。呉味道は都に着くまでに半分以上が税金として取られてしまうと云っているが、通行税がそれだけ大きかったのだらう。官員が携える物、あるいは送る物は無税であったから、呉味道は今回のような偽りを思い付いたのだが、それは自分のためというよりは、自分を都に送り出そうと郷里の人が一生懸命に集めてくれたお金を無駄にしたくないという一心からだったのだらう。

以上の三つのエピソードはいかにも蘇軾らしいと思わせるところがあってはなはだ愉快なのだが、それだけに疑わしくもある。しかしながら、『春渚紀聞』の信頼性は作り話と断じるほどには低くなく、これらと同じ時期に何遜かえんの父が蘇軾そせきに会っていることも記されている。

東坡先生とうぼが杭州知事こうであったときに、我が父かきよひ(何去非)は武学博士じよとして徐州の学校の教授を務めていた。

父が姑蘇こそそ(蘇州)に行くと、先生は舟を遣わして杭州に迎えてくれた。父は杭州に数日間泊まり、劉季孫りゅうきそんとともに西湖せいこに舟を浮かべた。

酒酣たけなわのとき、蘇軾は湖山を顧みてすぶる興味が湧いたのであろう、父と語り合って話は神宗皇帝しんそうの時代に及んだ。蘇軾は早くに神宗皇帝に厚く遇せられことを語り、今日左遷に似たような状況でここにいることを嘆いた。

しばらくして、先生は劉季孫に向かって言った。

「私が今日なお保ってられる余生は、すべて先帝からの賜りものであります」

劉季孫はその詛を尋ねた。

「私が都の獄に繋がれましたときに、取り調べが行われ、その一部始終がお上に奏上されておりました。そうしたある日のこと、日暮れの太鼓が鳴り終わって寝に就こうとしますと、不意に一人の男が獄の中に入ってきました。その男は箱を地に置き、それを枕にして横になりました。(新しい罪人が来たのだらうと、気にも留めずに眠ると)真夜中過ぎに、私は眠りの中で体を揺すられ、『学士殿、お慶びなさいませ』と続けて言う声がありました。私はおもむろに寝返り、そっと問うと、『安心してよくお休みなさいませ』と言って、先の男は箱を抱えて出て行きました。後になってわかりましたのは、舒亶じょたん等はお上の前で私を懸命に非難して必ず死罪にしようとしていました。しかし、先帝は初めから私が無罪であることを御存知でありましたので、密かに一人の宦官を遣わせて、獄中で私の振る舞いを観察させたのでした。たまたま私が雷のような軒をかいて寝ておりましたので、宦官はすぐにお上にこのことをお知らせしましたところ、お上は『朕ちんの思った通り、蘇軾の胸の内には何も無いのだ』とおっしゃったのです。それで、私を(死罪にはせず)にこう黄州に流すよう命じられたのです。実に先帝の怒おんによるものなのであります。臣下として何をもって万分の一でも報いることができませんか」

後に私が父から聞いたのでは、かつて張大亨ちやうだいきやうと語ったときに、張大亨はこのように言った。「蘇公が黄州から汝州じょに移ることになり、そのことをお上に感謝する蘇公の礼状が届くと、先帝はそれを御覧になって、まわりの者に『蘇軾は真に奇才である』とおっしゃられました。しかし、蘇公を恨む者がいて、蘇公の礼状には朝廷の処置を怨望する語句が含まれていると奏上しました。先帝は驚かれて、『何を言い出すのか』と、問いただされ、その個所を指摘すると、先帝はおもむろに、『朕はもとより蘇軾の衷心から出た言葉であるのを知っている。他意などは一切ない』と、おっしゃったので、もはや蘇公を誇る声はなくなりました。」

(1) 都の獄で蘇軾の身に何があったのかは第5章 401 ページ以下に記したが、これはまた別のエピソードである。蘇軾本人が語ったのであるから事実であったと即断するわけにはいかないだろう。蘇軾には人を喜ばせようとして話を盛る傾向があるし、何去かきよ非が息子に語ったときにも、さらには何遠かえんが文書化したときにも潤色した可能性がある。そういうことがあるにしても、蘇軾は、神宗皇帝は自分のことを正しく理解してくれていたと、心の底から信じていたのは間違いない。(2) 蘇軾が黄州から汝州に移されることになった謝札の文章は第6章 478 ページで見ている。蘇軾は何をどのように書いても、いろいろと難癖を付ける者がいたのだ。(3) 張大亨ちやうだいきやう (字は嘉父あぎな かふ) は蘇軾より遅く官界に入った者。次章で張大亨を送る詩を見ることになる)

■問淵明

これは陶淵明とうえんめいに物申すという詩。短い序文が添えられている。

ある人が言った。

「東坡とうぼのこの詩は陶淵明とうえんめいに反駁したものである」

これは理解の足りない言い方である。むしろ、互いに引き合って新たな意味を作ろうとするものなのである。ここに述べたのは陶淵明の考えを決して否定するものではない。

げんゆう
元祐五年十月。

蘇軾の詩を読む前に陶淵明が何を言ったのかを見ておこう。

とうえんめい けいせいしん
陶淵明：「形影神」

■ 序

世の中の人、貴賤賢愚を問わず、あくせく人生を惜む者ばかりだ。これはひどい惑いだ。

そこで、形かたちと影かげにその苦しみくるしみを語らせ、神しん（精神）が自然の道理道理を論じて二者の苦しみくるしみを釈とくということをしてみた。好事の君子諸君はどうか私の意図を読み取っていただきたい。

■ 形（肉体）が影（シャドウ）であり生命力の象徴でもあるのだからに贈る

天地長不没、（天地は永遠になくならない）

山川無改時。（山や川は姿を変えることがない）

草木得常理、（草や木には不変ことわりの理ことわりがあって）

霜露榮悴之。（霜や露にあうことで栄えたりはんだりしている）

謂人最靈智、（人は最も尊とんで知恵ちゑがあるといわれているけれど）

獨復不如茲。（人だけが異ちがっている）

適見在世中、（たまたまこの世に存在したかと思おもうと）

奄去靡歸期。（たちまち去いってしままって帰かえってここない）

奚なん覚無一人、（一人がいいなくなったところところで気きづかれないし）

親識豈相思。（親おしくしていた者ものも思おもい出でしたりしない）

但余乎生物、（ただ普段使つかっていたものが残のこっていて）

拳目情淒瀟。（それを見ると悲かなしくなることことくらいはある）

我無騰化術、(仙人になる術が得られなければ)

必爾不復疑。(必ずこのようになるのは疑いようがない)

願君取吾言、(君(=影)はどうか私の言うことを汲み取ってくれたまえ)

得酒莫苟辞。(つまりは、酒があるときには辞退しないのがよいのだ)

■影が形に答える

存生不可言、(ずっと生きながらえるのたなどは言うことさえてできない)

衛生每苦拙。(生きていることをとにかく守るだけでいつも苦しんでいる)

誠願遊昆華、(仙人の世界に遊ぶことを本当に願っているのだが)

邈然茲道絶。(そこへの道はぼんやりと途絶えている)

与子相遇来、(形である君と出会ってから)

未嘗異悲悦。(悲しみも喜びもずっと一緒だった)

憩蔭若暫乖、(ものの蔭に憩うときは形と影は離れるようだけれど)

止日終不別。(日差しのもとでは別れることはない)

此同既難常、(このまま永久に一緒というわけにはいかなくて)

黯爾俱時滅。(残念なことに時がくればともに滅んでしまうのだ)

身没名亦尽、(身が消えれば名も消える)

念之五情熱。(それを思うと、気持ちが熱(たか)ぶる)

立善有遺愛、(善行をなすと子孫に恵みがあるというから)

胡為不自竭。(せいぜい一所懸命に頑張るべきなのだろう)

酒雲能消憂、(酒は憂いを消してくれるとはいえ)

方此詎不劣。(そいうまでもな努力には劣るであろう)

■ ^{しん と}神が釈く

大鈞無私力、(大自然の力を自分だけのものにするのはできない)

万理自森著。(万物に共通する ^{ことわり}理が現れ出るだけである)

人為三才中、(人が天・地・人の中央にあるとされるのは)

豈不以我故。(人には私(=神) ^{しん}が具わっているからではないのか)

与君雖異物、(私(=神)と君たち(=形と影)とは物としては異なるのだが)

生而相依附。(生まれてからずっと依存し合ってきた)

結托善惡同、(一緒になって善いも悪いもともにしてきているのだから)

安得不相語。(君らと語らずにいるわけにはいかないだろう)

三皇大聖人、(太古の三人の大聖人だって)

今復在何処。(いまはどこにもいないし)

彭祖寿永年、(長生の術を得た ^{ほうそ}という彭祖だって)

欲留不得住。(この世にとどまろうとしてもできなかった)

老少同一死、(若く死んでも老いて死んでも死は一つ)

賢愚無復数。(賢人も愚人もこの世には帰ってこられない)

日醉或能忘、(日々に酔っていたらそうしたことを忘れられるのかもれないか)

将非促齡具。(酒は結局は寿命を縮めるものではなからう)

立善常所欣、(影が言うように善を行うのはよいものではあっても)

誰當為汝誉。(君のこともいつまでも誉めてくれるわけではない)

甚念傷吾生、(善をなそうと激しく思うのは自分の命を傷つけることにもなるので)

正宜委運去。(巡りあわせに任せるくらいでよいのではないか)

縦浪大化中、(大きな変化の中を縦浪^{ただよ})

不喜亦不懼。(喜ぶこともなく恐れることもなく)

応尽便須尽、(ちょうど終わるときかきたら終わる)

無復独多慮。(そういうことでよいのだと、あまり考えすぎずいいようではないか)

(この作品は、廬山^{ろざん}の高僧慧遠^{えおん}の「形は尽きるとも神^{しん}(精神、霊魂)は不滅である」という論に触発されて作ったものであるという(慧遠については第7章25ページなどで見ている)。深い含意のある詩で、上の訳文は浅い一解釈でしかない。蘇軾^{こう}は杭州に来てから数多くの僧と語る機会を得てこの議論を思い起こし、そこに一石を投じようこの詩を詠んだのだろうか)

陶淵明先生^{とうえんめい}は神^{しん}と形は異なるものだという、

私はそうは思わない。

人(形あるものの代表)と天(神的な存在の代表)は異なるものなのか、
そうではあるまい。

天、地、人に限らず、ありとあらゆるものは、
異なると見えて異なるものではないのであろう。

高いところへと引いて行くなら、空にかかる天界の星となるし、
それを天から散らして低くに置くなら、山や川になるのではないだろうか。

太古の三人の大聖人は死んだというけれど、
いまも私の眼前にはありありと存在している。
ほうそ
彭祖は八百年の長寿を得たといったところで、
永久ではないのだから短命であるのと変わりはない。
つかの間のうっとりとした酔い心地は、
花に宿る露の一瞬の輝きと同じ、
酒があるなら酔えばよいし、
酒がないなら泉の水を飲めばよい。
善を立てて誉れを求めるのもよいのだろうけれど、
飢えたらやはり涎よだれをすするしかないのだ。
巡り合わせに任せたとこでやはり憂いは生じるので、
憂いが去ると生き返ったような心地になるものなのだ。
大きな変化ただようのなかを縦浪のは、
まさに造物者の為すがままということになるのだろうか。
ちょうど終わるときがきたなら終わるのであって、
わざわざそのようなことを言葉にして言うまでもないのだ。

とうえんめい しん
（陶淵明は神は不滅であるという説に反駁するために、形と影を持ち出し、異なるその三者は結局は一緒に滅びるのだと言ったのに対し、蘇軾は神も形も影も全ては同じであるとまとめ、さらに乱暴にも滅びるとか滅びないとかもないとした。蘇軾のこのような見方からも、あらゆるものを一つに融合させて理解しようとする宋代の思想の傾向

を読み取ることができるだろう)

■故竜岡閣学士藤公墓誌銘

10月24日、^{とうほ}藤甫^{あざな}(^{げんはつ}字は元発)が亡くなった。71歳であった。藤甫は蘇軾と旧くから交流があり、第6章459ページ、第7章66ページなどでその名を見ている。これは亡くなってから2年近く後に、^{ちようほうへい}張方平に代わって執筆した墓誌銘。張方平は藤甫と姻戚関係にあつて墓誌銘の執筆を依頼されたのだが、蘇軾に代筆を託した。ここでは墓誌銘の序文にあたる^{とうほ}藤甫^{あざな}の最初の5分の1ほどを読んでおこう。

^{とうほ}藤甫は、^{いみな}皇族と1人と諱が一致するようになったことから、もともとは字であつた^{げんはつ}元発を諱に改め、^{たつどう}新たな字を達道とした。次に見る挽詞の題名では^{あざな}藤達道と表記されている)

^{しんそう}神宗皇帝は天下に臨み始めると、政治に熱心に励むとともに、天下に優れた人を出すよう求め、英偉で度量の大きな人を得ようとした。^{とう}藤公は先帝に仕えたもののまだ十分に用いられておらず、その姓名は朝廷の名簿に載せられたまま放置されていた。神宗皇帝はそれを知って藤公を召し、その姿が颯爽としているのを見て、天下が治まりあるいは乱れる理由を尋ねた。藤公はすぐに答えた。「治乱の道は^{ほう}黑白ないしは東西のようなもので、それが色を変えたり方向を変えたりするのは、^{とう}朋党の乱れによります」。皇帝が「そなたは君子の党と小人の党に言っているのか」

と尋ねると、「君子が党を作ることはありません。譬えて言うなら、纏わりつくのは必ず蔓草で、松や柏ではありません。朝廷に朋党がないなら、中程度の君主であっても問題は起こりません。そうではなく、朋党があるのなら、君主が聖人であってもよく治めることはできません」。皇帝は大きく嘆息して、「天下の名言である」と言った。

かくて滕公は神宗皇帝に用いられ、幾つかの職を経て翰林学士かんりんがくしとなった。滕公は疏達不疑そえんふぎ(おおらかで率直)で、皇帝の前で事を論じるときも、家の中で子が父に語るように言葉を飾ることなく胸の内にあることをそのままに出した。皇帝は滕公が誠実さを尽しているを知って、事の大小によらず、他の人がよく述べられないことについていつも滕公に尋ねた。ときには夜中に書面を下して問うこともあり、使者が何度も行き来して滕公がそのたびに即答することもあった。

政治を執る者たちおうあんせき(王安石を中心とする人々)が新法を作ろうとしたとき、天下の議論が沸騰し、滕公の言葉を皇帝が信じることを恐れ、事を構えて滕公を謗った。皇帝が滕公を疑うことはなかったものの、滕公は朝廷に外に出され、鄆州うんの知事となった。その後、定州てい、青州せい、南都なん、齊州せい、鄧州とうと移り、それでも滕公をういようとする皇帝の心はまだ衰えていなかった。たまたま滕公の妻の親類に法を犯した不届き者がいて、小人もこれを理由に滕公を非難し、必ず殺してしまおうとした。皇帝は罪のないことを知っていたので、池州知事に移され、さらに蔡州さいに移動することになって安州あんに改められ、その任を終えると朝廷に戻ることになった。しかし、都に至って皇帝に会う前に、滕公を嫌う左右の者が飛語ひんを流し、筠州いんに左遷されることとなった。士大夫は滕公の生命に及ぶかも知れないと非常に危ぶんだのだが、

膝公が自若として談笑し、「天は私が直であることを知っている。皇帝は私が忠であることを知っている。私に憂うべきことはない」と言った。そして自分の潔白を記して皇帝に差し出し、皇帝はそれを見てはっきりと理解し、膝公は湖州知事となった。そして再び用いようとしたのだが、皇帝は亡くなってしまった。膝公は皇帝の遺詔を読むと、気絶してしまい、しばらくして蘇ると、「ああ、私には自分の力を尽くすところがなくなった」と言った。

今上陛下が即位し、膝公は蘇州、揚州の知事を歴任し、竜図閣直学士となって鄆州知事となり、さらに真定、河東に移って国境地帯を凜然と治め、その威光は西北に輝いて名将と呼ばれた。ところが監察として派遣された宦官が膝公は病気で職務に耐えられないと偽りの報告をし、許州に移されることになった。御史が膝公は辺境をみごとに治め、病気ではないと言ったので、膝公は河東に留まるようにとの詔が下された。膝公はすでに老い、七十一歳となっていて、淮南に移ることを求めた。皇帝はやむをえず、竜図閣学士のまま揚州知事にすることを決めたのだが、膝公はまだ揚州に着かないうちに亡くなった。元祐五年十月二十四日であった。

(1) 膝甫は蘇軾より16歳上であったが、中央で用いられたのは蘇軾と大差なく、その後の官歴も似ている。神宗皇帝は膝甫が優れて有能であることを知りながらも、改革政治を進めるために朝廷の外に出し、いつか時がきたならば再び用いるつもりでいたとするのは蘇軾とそっくりである。そして、保守派が政権に戻ったにもかかわらず、保守派内の争いで地方に出ていなければならなかったのも蘇軾と同じである。(2) 最初に

膝甫が政治が乱れる原因は朋党ほうとうの乱れにあると答えたのは、臣下の者が徒党を組まないことが皇帝独裁主義を貫徹するための必要条件であると考えられていたからである。皇帝と人民の間に立つ官僚は、皇帝による統治を貫徹するために働くべき存在であって、官僚同士が横につながって余計なことをしてはならないのである。実際に党派が形成されて政治が乱れたことはたびたびあった。党派を組むのは小人しょうじんで、君子は党派を組むことがないとは歐陽脩おうようしゅうの有名なテーゼで、かつて范仲淹はんちゆうえんを弁護するときに高らかに主張したものだった。膝甫が神宗皇帝の前で朋党の弊害を述べた後に、改革派と保守派の争い、そして保守派内の争いといった政治の乱れが生じ、膝甫も蘇軾も非難合戦の渦の中に巻き込まれてしまったのである。(3) 膝甫が自分の潔白を記して皇帝に差し出したという文章は実は蘇軾が代筆したもので、その全文を第6章 459 ページで読んでいる)

■膝達道挽詞二首

膝甫とうほ（字は元発あざな）の死を悼んだ詩。これは死後あまり時間を置かずに詠まれたもの。第1首は、膝甫が非常に優れた人物であったことを歌い、第2首は、蘇軾との関係を歌っている。内容的に上の墓誌銘と重なるところが多い。

其の一

先帝は早くから膝公とうこうのことを、

私心のない第一の人であると知っていた。

膝公は、詩や礼における現代の将軍であり、

かん
漢の最盛期の大臣と並ぶべき人であった。

大きな材は用いるのが難しいとされるが、

時節がきて少しばかりは力を出すことができた。

はんちゆうえん
范仲淹の風烈がまさにそこにあるかのようで、

そんべん
孫沔の優れた手本が新たになったかのようであった。

ところが、辺境を治める策も、宰相となるべき身も、

空しく捨て置かれることとなってしまった。

膝公に仕えた旧い人々は、

墓の石を悲しい涙で濡らすのである。

(途中はんちゆうえんで范仲淹とそんべん孫沔の名を挙げたことについて、蘇軾自身の注で、とうほ滕甫は若い頃に

この2人の名臣の教えを受けたと記している)

其の二

うんげう 雲夢から ちゆうこう 長江へと雨が降り注ぎ、

はんざん
樊山の木から葉が落ちる秋に、

とうこう
膝公は自分はきっと流されるであろうと占った。

そのとき私は牛を飼って土に生きようとしていた。

ともにいなかづし江湖の楽しみを持ちながらも、

耕しつつ天下のことをなほ憂いていたのだった。

私は常州で老いを送ろうと決め、

膝公と金山でともに遊んだのだった。

不遇にあっても膝公は威風堂々としていたのだが、

歳月の過ぎゆく速さには驚くほかはない。

私は頭を回らせて、歌いかつ哭し、哭しかつ歌う、

この挽歌は意味のある言葉にならない。

(詩の始めは、黄州に流された蘇軾を膝甫が訪ねたころのことを歌っている。中ほどは膝甫が湖州知事で蘇軾がその助力も得て常州に退隱の地を得たころのことを歌っている)

■記温公論茶墨

ある日のちょっとしたできごとを記した短文。

司馬光がかつてこのように言った。

「茶と墨とはまことに相い反するものです。茶は白くなろうとし、墨は黒くなろうとします。茶は重くなろうとし、墨は軽くなろうとします。茶は新しくなろうとし、墨は古くなろうとします」

私はこう言った。

「二つの物の性質はまことにそのようでありましょう。ただし、同じところもあります」

「何でしょうか」

「すぐれた茶もすぐれた墨もよい香りがあります。それはその徳を同じくするものでありましょ。茶も墨も堅く、それはその節操を同じくするものでありましょ。茶と墨はいわば賢人と君子のようなもので、見栄えがよかったり悪かったり、白かったり黒かったりといった違いがありましても、その奥に具わる徳と節操においては実は異なるところがないです」

司馬光は笑って、

「なるほどそうでありますな」

と言った。

げんゆう 元祐五年十月二十六日、私はじゅんろう 醇老、ぜんおう 全翁、げんし 元之、どんふ 敦夫となんびょうじ 南屏寺に遊んだ。寺僧のけん 謙が出してくれた茶は非常に珍しいもので、玉雪のように白かった。たまたまく 衢州のさいき 蔡熙の子のどう 瑄の造った墨があつて、それは漆のように黒かった。

「墨は本当に黒くならうとしているのだろうか。茶は本当に白くならうとしているのだろうか。その反対のことだつてなくはないと、誰もが知らないわけではないだろうに」私がそのように言うと、一同が笑つた。

(1) 訳者には残念ながらこの文章の意味が十分に掴めていない。最初にしほこう 司馬光が挙げた茶と墨の対比がぴんとこないし、最後に一同がどうして笑つたのかがわからない。白黒を明白に分ける二分法を蘇軾があまり好まないことはこれまでも見ているので、それが司馬光との会話の基調としてあるのだろう。なお、ここで白とっているのは、透明の意味も含んでいるのだろう。終わりのところは、黒を白に、白を黒にするような論

法がまかり通っていることに対する皮肉が込められているのだろう。茶と墨が共通して持っている徳と節操とは無縁の連中がそこらにうようよしているのを笑ったのだろう。(2) 名を列挙された4人は官員仲間ようだ。いずれも字で、あざな 醇じゆんろう老はせんそう錢藻、ぜんおう全翁はちやうじゆ張璠、げんし元之は姓名不詳、とんふ 敦夫はこうりん侯臨であるという。(3) 茶を出した南屏寺のなんびやうじ謙師けんしは本章51 ページで登場している)

■送程之邵簽判赴闕

こう杭州の役場に勤める程之邵ていししやう (あざな字はじゆんげん遵彦) (本章78 ページ) が都に行くことになり、その送別の詩。

天下第一の宝とされるべきものでも、
その価値を見出す者がいなければ世に知られることはない。
珍宝やこうたまの夜光の珠も、自らを献上するわけではないし、
名馬てんきの天驕も、その良さを自分で知るわけではない。
狐の毛こも五穀の皮だってそうなのだ。
まことに賢人であるのは前の知事ゆうはくつう(熊伯通)で、
貴君すてれが奇ていると見て幕府に招いたのだった。
花のない草木は識られにくいもの、
前知事はそれを得ただけでなく、
自分だけのものにしなくて、

貴君をここに残してくれて、

私を助け、私の衰えを支えるようにしてくれたのだ。

二年の間、貴君と膝を付き合わせて語った。

ここに、長く挨拶を交わし合って貴君は去って行く。

私は言う、

「林が深いところには猛獣が潜み、

岸が改まったところからは竜が移り行く。

かくて貴君が去ってしまったなら、

(猛獣に囲まれている)私は誰を頼りとしたらよいのか。

貴君を失った後はただ悲しむしかない」

ああ、もう私情を抱くべきときではないのだ。

貴君は最上級の器の質を備えている、

都の宮殿にこそ置くべきものである。

貴君よ、行かがよい、

きっとまた会うことがあるだろう。

(蘇轍ていししょうはよほど程之邵ていししょうが気に入ったのだろう、この詩で絶賛している)

■書林道人論琴棋

蘇轍せい こは西湖の西にある靈隱山れい いんざんのあたりを巡り、小靈隱しょう れい いんの峰りんに住む林道人と出会った。そのことを記した短文。

げん げう しょうれい いん りん
元祐五年十二月一日、小靈隱に遊び、林道人が琴や碁について論じるのを聴いた。極めて妙理に通じている。私はこの二技には通じていないけれど、理をもつて判断するに、その言っていることは信であると知った。

と ほ
杜甫は画を論じて詩にこのように詠んだ。

更覚良工心独苦。(更に覚える 良工は心 独り苦しむと)

こころ
意を用いることの妙をこのように知る者はなかなかいない。それがまさに独り苦しむ理由であるのだろう。

(1) 琴棋書画は昔から士大夫の嗜むべきものとされていた。蘇軾は、詩も書も画も根本は一つであるとしばしば言っている。林道士の話から琴も碁も同じであると理解したのだろう。(2) ここに引用されている杜甫の句は「題李尊師松樹障子歌」という詩にある。李道士が描いたばかりの松の樹の画を杜甫のもとに持ってきて、その印象を詠んだ詩で、該当の部分は、「已知仙客意相親、更覚良工心独苦」(仙客 (=李道士) が親しくしてくれる心が知れて、さらに良工は独り心を苦しめることがわかった) という対句になっている。杜甫もまた独り心を苦しめつつも、その詩は当時の人々にはあまり理解されなかったことが反映しているのだろう)

■送李陶通直赴清溪

り とう せいけい
李陶が清溪县に赴くのを見送った詩。李陶は朝廷の高官であった李大臨の子。

ちゆうぶんこう ぶんせいこう
忠文公、文正公の二大老、

そり そろ しゃじん
蘇、李、宋の三舎人、

その方々と親しく交わってきた賢子弟——

その貴君をここに見るのはまことに喜ばしい。

貴君は言う、

これから赴くのは風塵の少ないところ、と。

せいり
勢利(出世や利益)に関心の薄い貴君にふさわしいではないか。

ここを去って溪山の内に入るなら、

新たな句を工夫して生み出すであろう。

せいこ
あえて西湖にしばらく留まってくれたので、

せんとう しょうきりん
錢塘の人々は、小麒麟がここにいると初めて知ったのである。

((1)「二大老」とは司馬光、范鎮、「三舎人」とは蘇頌、李大臨、宋敏求であるという。いずれも天下に知られた名士である。李大臨の子である李陶は、父親の縁でこうした人々を子供のころから知っていたのであろう。(2)李陶が清溪県に行くのは恐らく意に染まないところがあったのだらう。(3)小麒麟とはいわゆる「麒麟児」、将来が期待される若者である)

■六一泉銘

こう せいこ ござん
蘇軾が杭州に着任した後で、西湖の孤山の山中で一つの泉が湧き出した。

蘇軾はそれを「六一泉」と名付け、この銘を書いた。ある考証によれば12月8日のことであるという。

歐陽公(歐陽脩)は老いて自ら六一居士と称した。

私はかつて杭州の副知事に任命されたとき、潁州で欧陽公に会ってから南に向かった。公はこのように言った。「西湖の僧の恵勤は非常に学問に通じ、詩に優れている。私はかつて『山中之楽』と題する三章からなる韻文を作って恵勤に贈ったことがある。子が民を治める合間に、湖山においてともに楽しむ人を求めようとして得られなかったならば、恵勤のもとに行くといだらう」

私は杭州に着任して三日目に孤山に恵勤を訪ねた。互いに手をとるようにして、古来の人物を論じ合った。恵勤は言った。「欧陽公は天の人でありますな。地上の人は欧陽公がたまたま人間世界にしばし身を寓しているお姿を見ているだけで、雲に乗り風を馭して五嶽を巡り滄海を飛び越えていることを知らないのです。この邦の人は欧陽公があれからもう来られないのを残念に思っています。欧陽公は八方を自在に極められるのに、どうしてここには来られないでしょうか。江山の優れた風光には持ち主がいけませんけれど、その奇麗秀絶の気はよく文を作る者が用いるためにあるのです。私はこの西湖は欧陽公の机の上にある一つの置き物であるように思っております」。恵勤の語ることは幻怪ではあっても、その理としては実にしかるべきである。

翌年、欧陽公は亡くなり、私は恵勤の僧舎で哭した。

それから十八年、私は杭州知事となり、恵勤は亡くなって久しい時間が経っていた。恵勤の旧居を訪ねると、弟子の二仲にちゆうがいて、欧陽公と恵勤の姿を画にして、生きているかのように仕えていた。僧舎のあたりにももとは泉などはなかったのだが、私が訪ねる数カ月足らず前に、講堂の後ろで泉が湧き出し、盛んに溢れて孤山の麓へと流れるようになった。水は非常に澄んでいてなおかつ甘い。巖うがを鑿って石を架けてそこに石室を作った。二仲は私に言った。「我が師は、あなたさまが来られると聞いて、その苦勞をねぎらうためにこの泉を出されたのでしょ。何かお言葉をいただけませんか」。そこで恵勤がかつて語ったことを思い出し、その意こゝろを推して泉るくいちせんに六一泉と名付け、この銘を作る。

泉が出るのは、欧陽公の亡くなった地から数千里のところ。亡くなってから十八年。ここに六一の名を付けるのは、いかにもおかしいことではある。

しかし、君子の余沢は五世に及ぶといい、その人を得たときには、百世にも伝わる。ために孤山を登って呉越ごえつの方を望んで『山中之樂』さんちゆうのたのしみを歌い、この水を飲むがよい。欧陽公の遺風がはっきりと残っているとがわかるであろう。それが泉となってここに湧き出ているのである。

(蘇軾こうが前回杭州に赴任する途中に、涇州えいしゅう 歐陽脩おうようしゅうに会ったことは第3章 116 ページで、杭州に到着して3日目に孤山こざんに恵勤えごんと恵思えしを訪ねたことは第4章 2 ページで、欧陽数の死を恵勤と恵思のもとで哭したことは第4章 54 ページでそれぞれ見ている。なお、泉に作られた石室は東坡庵とうぼあんと呼ばれるようになったという)

■元祐五年十二月十二日同景文義伯聖途次元伯固蒙仲遊七宝寺題竹上

「^{げんゆう}元祐五年十二月十二日」と日付が明示されている。七宝寺に遊んで竹を詩に詠んだ。蘇軾と同行したのは、^{りゆうき せん あざな けいぶん}劉季孫（字は景文）、未詳の人物（字は^{ぎ ばく ちやうてん き}義伯）、張天驥（字は^{せい と しゆうとう}聖塗）、周燾（字は^{じげん そけん ぼくこ せん}次元）、蘇堅（字は伯固）、錢蒙仲である。未詳の人物以外は本章においてすでにその名を見ているが、興味を引くのは張天驥で、本章 71 ページで郷里に帰ったのを見ていて、なぜかまた杭州に来ていたようだ。

根を結ぶことでは他の木々と異なるところはない、

ただ林から独りだけ高く飛び出るのだ。

孤高^{たの}というものは恃むべきものではない、

年の終わりなるなら、寒風に侵されてしまうのだから。

（普段は竹を讃える蘇軾は、ここでは孤高^{たの}を恃むことを危ぶんでいる。教訓臭のする詩であるとして評判は芳しくないが、張天驥^{ちやうてん き}の名があるので訳出した）

■弁才老師退居竜井不復出入軾往見之常出至風篁嶺左右驚曰遠公復過虎溪矣弁才笑曰杜子美不云乎与子成二老来往亦風流因作亭嶺上名之曰過溪亦曰二老謹次弁才韻賦詩一首

長い詩題は次の通り。「^{べんさい}弁才老師は^{りゆうせい}竜井に退居し、そこからはもはや出な

くなった。私が竜井に行って老師に会ったところ、老師は廬から出て風
 篁嶺にまで来てしまった。人々は驚き、『慧遠様がなんと虎溪を過ごされ
 てしまいました』と言った。弁才老師は笑って『杜甫の詩に〈与子二成老、
 来往亦風流〉（子と二老と成って、来往するのも亦風流である）というの
 がありましたな。（記念に）風篁嶺に亭でも作って過溪と名付けますか、そ
 れとも二老と名付けますか』と言った。老師が詩を詠んだので私は謹んで
 次韻した」。

弁才については後で記すことにし、3点ほど説明を加えておく。(1) 竜井と風篁
 嶺の地名は本章 119 ページですで見ている。西湖の西側の山にある。(2) 廬山の高僧
 慧遠が陶淵明等と話に夢中になって、普段は決して超えることのない虎溪の橋を渡っ
 てしまったという故事は第7章 29 ページで見ている。蘇軾と話しながら風篁嶺にまで
 来てしまった弁才を慧遠になぞらえたのである。(3) 杜甫の句は「贊上人に寄せる」
 という題の詩にある。弁才はこの詩を引用して、これからたびたび来ると、蘇軾
 に親愛の情を示したのである)

日と月は車の軸のように回り続け、
 いまも昔もいわゆる「一つの丘の貉」、どのみち変わり続けるのである。
 ただこの鶴のような外貌の老人(弁才)だけは、
 常に凜として、秋がくることも知らずにいる。
 往くも去るも自由無礙で、

人間界も天界も争って引き留めようとしても無駄である。

去るときには、竜が山から出るように、池に雷雨が注ぐ騒ぎとなり、

来るときには、^{たま}珠が海に帰るように、魚も亀も争って出迎えるのである。

この生はしばしどかなりと寄寓するだけのもので、

常に恐れるのは浮ついた名がまつわることである。

私は陶淵明^{とうえんめい}になぞらえられてもとても及ばないのを恥ずかしく思い、

師^{えおん}は慧遠よりも優れているのであろうにと思う。

私を送って師^{こけい}は虎溪^{ふうこうれい}(風篁嶺)を通り過ぎてしまい、

溪の水までも、もしも驚いて逆流でもしようものなら、

二人の老人の遊びを山の人々も長く忘れずにいてくれるだろう。

とはいえ、大千世界はもとよりの高僧の掌の内にあるのだから、

虎溪を超えようが超えまいが、

そもそも離別の憂いなどありはしないのだ。

弁才の名はこれまでに、第6章106ページ、第7章19ページで見

ている。姓は徐氏^{じょ}、名は元浄^{げんじょう}、字は無象^{あざな}、杭州於潜^{むしやう}の人で、10歳で出家

し、天台宗を学んで上天竺靈観音寺^{じょうてんじくれいかんのんじ}に住し、上天竺弁才大師^{じょうてんじくべんさいだいし}の号を贈ら

れ、後に竜井に退居した。蘇軾とは杭州副知事時代に交流があり、「上天

竺弁才師に贈る」という題の詩を詠んでいる。第3章では訳出しなかつ

たので、ここで見ておこう。

山門からは南も北も全てが一望のもと、
上下にそれぞれ天竺寺てんじくじがある。
中に一人の老法師がいて、
鶴のように瘦せて背が高い。
何の行ぎょうを修められたのかは知らないが、
碧あおい眼が山や谷を照らしている。
その姿を見ると、自ずと清涼な心地になり、
煩惱の毒が洗い尽くされる。
したがって、一都会の男女が皆礼拝するのである。
私にはひよろ長い息子がいて、
頬が角ばって頭がとがっている。
四歳になってもまだ歩けなくて、
抱いたり背負ったり、いつも背や腹にへばりついている。
老法師がやって来られ、その頭を撫ぜたところ、
なんと立ち上がって鹿のように走り出した。
とすれば、戒律の中にも妙用があって、
束縛をふりほどいてくれるものがあるのだ。
だったら、『法華經ほけきょう』を唱えることに縛られずに、
魚肉ぎくを啖くらったってよいのかも知れない。

(1) 天竺寺は西湖の西、靈隱寺に隣接し、上天竺、中天竺、下天竺の三寺がある。

(2) 4歳の息子というのは次男の蘇迨で、歩けなかったのが急に走れるようになったというのはにわかには信じがたいが、何かしら歩行に障害があったのだろう。(3) 詩の終わり部分は理解できなかったので(それで第3章では割愛した)、ひどい「ずっぱ訳」である)

■寄題梅宣義園亭

杭州副知事であった梅灝(字は子明)(本章29ページ)が故郷の呉郡に帰ることになり、その父の梅宣義の園亭に寄せる詩を作った。

漢の時代に、梅子真是職を辞すると、

妻子を棄て、呉の町の中に身を隠した。

その子孫である御父上もまた呉の町に隠れ、

十年の間、惜まず力を注ぎ込んで、

五畝の庭園を立派に造られた。

始めは子のために橘を育て、

いまでは孫のための桐も成長してきている。

清らかな池の眺めは虎丘をも圧倒し、

珍しい石は太湖の鼇頭山を持ってきたかのような。

町の人々は身分の上下に関係なくその門を叩き、

庭園の内で、琴が好きな者は存分に奏で、

酒が好きな者は樽を空にして飲む。

私は放浪の人間、家は西南の隅(蜀のこと)にある。

崩れた廬(いおり)はいままだあるだろうけれど、

小さな庭は誰も手入れをしていない。

羨ましいのは、貴君が御父上のもとに帰って行こうとしていること、

御父上の御恩にはまだまだ報いることはできていない。

幸いにも貴君は我が僚友として愛すべき人物であり、

長く兄弟のようでありたいと思うほどだ。

いつか西に帰郷する際に貴君のもとを訪れたならば、

瓶(かめ)が空になるまで私に飲ませてくれるだろうね。

((1) 冒頭(かん)に漢の時代の梅子真(ばいししん)の名を挙げたのは、同姓の人の故事を巧みに引いてくる蘇軾の得意の手法。(2) 虎丘(こきゅう)も太湖の鼇頭山(たいこ げんとうざん)も呉郡(ご)の近くの名所。呉郡(ご)は杭州から大運河を北に上って長江(ちょうこう)に至る少し手前(ちゆうこう)にある町)

■ 舍幡帖一首

蘇軾の祖母史氏(し)の名は第1章33ページで見ているが、その祖母の遺品がこのときまで蘇軾のもとに伝えられていた。

我が祖母史氏(し)には二枚の繡幡(しゅうはん)(刺繡を施した旗)があった。幡(はた)には「長寿王菩薩(ちやうじゅおう ぼさつ)」、

しょうさいしやうぼさつ
「消災障菩薩」の文字がある。

祖母が亡くなって三十余年、我が父は祖母を慕い、老いに至ってもその思いは衰えなかった。祖母の忌日には必ずこの幡を捧げて泣いた。

いまや父が亡くなって二十四年となった。私はこの幡を宝として家に置いていた。それが父の遺した意志であるとはいえ、祖母の本来の願いは誠を仏に帰すことであると考え、これを金山きんざんに喜捨し、祖母の冥福しの資とするものである。

(庶民は、仏教の難しい教義はともかくとして、長寿を授け災厄を消してくれることを期待して菩薩を信仰した。金山きんざんは蘇軾が何度も訪れている有名な寺で、そこに遺品を寄付することで、死後の世界における祖母の幸福の足しにしようとした)

■熙寧中軾通守此郡除夜直都庁囚繫皆滿日暮不得返舎因題一詩於壁今二十年矣衰病之余復忝郡寄再經除夜庭事蕭然三園皆空蓋同僚之力非拙朽所致因和前篇呈公濟子侔二通守

大晦日に詠んだ詩。長い題は次の通り。「熙寧きねい年間に私はこの杭州こうの副知事となり、大晦日の夜にも庁舎に詰めていた。獄は繋がれた囚人でいっぱい、日が暮れても私は宿舎に帰ることができなかった。それで一篇の詩を作って壁に書いた。それからおよそ二十年が経ち、衰病の身でありながらも、かたじけなくも再び杭州に来て、この大晦日の夜を迎えた。庁舎は静かで、三つの獄舎はどれも空である。これは同僚の力であって、拙朽ちた私のしたことではない。そこで昔の詩に和して、袁轂えんこく あざな こうさい（字は公濟）

と子伴しぼうの二人の副知事に示す」。20年が経ったとあるのは正確には19年である。副知事のうち袁穀は本章115ページなどでその名を見ている。2人目の子伴とあるのが子明しめいの書き誤りであるなら、先に見た梅瀬ばいこうのことである。副知事時代の大晦日に詠んだ詩は第4章10ページですでに訳出しているが、ここに再掲する。

前の詩

大晦日には早くに家に帰りたいものだ。
 しかし、公務があつて役所に留まらなければならない。
 筆を持ち、書類に向かって不意に涙がこぼれる。
 哀れてはなかるうか、ここに繋がれている囚人たちは。
 法の網に落ちるのを恥とも思わず、
 たたただ食うためにしてしまったのだ。
 私だって食うために、わずかな給与が恋しくて、
 ぐずぐすと故郷に帰れずにいるのだ。
 どちらが賢くてどちらが愚かということはない、
 同じく食うためにしているだけなのだ。
 せめて正月の間だけでも、
 囚人たちを家に帰してやりたい……。
 昔そのようなことを実行した立派な人々に恥じ入るばかりだ。

今の詩

あれから山や川はもとのままで変わらないが、

歲月は逝ゆくばかりで留まることがない。

百年も、一度俯して仰ぎ見るまでの間のこと、

木もく火か土ど金きん水すいの五行が替かわるがわる盛さかんになつたり衰おとろえたりする。

同僚の二人の副知事は、

漢かんの時代の名太守に肩を並べるほどで、

その徳業は昔の人に差さじるものではない。

老いて鈍いこの大守なんぞは、

嘯うそぶき諾うなずいて、とかく休んでさえいけばよいようにしてくれている。

この二十年の我がことを思うと、

出いるも処おるも人が謀はかめたものではない。

齒が抜けようが髪が白くなろうが、

それは天に任せておけばよい、

傷んだり壊れたりしたものは修復できないのだから。

■宸奎閣碑

元祐6 (1091) 年、蘇軾 56 歳。

1 月 1 日、大覚だいがくぜん禪師じ懷璉かいれんが亡くなった。大覚禪師といえ、蘇軾その父の蘇

洵^{じゆん}に国宝級の画をプレゼントした人である(第2章2ページ)。そのとき懷璉^{じやういんぜんいん}は都の淨因禪院^{じやういんぜんいん}にいたが、その後、四明^{しめい}(現在の寧波市に含まれる)にある広利寺^{くわうりじ}に移った。蘇軾^{そう}は杭州知事として赴任すると、懷璉のために広利寺にある宸奎閣^{しんけいかく}の銘を作った。これは懷璉がまだ存命中の作品である。

廬山^{ろさん}の僧懷璉^{かいれん}は皇祐年間^{こうゆう}に仁宗皇帝^{じんそう}の詔^しによって都の十方淨因禪院^{じつぽうじやういんぜんいん}に住まうこととなった。皇帝は懷璉を宮中に召して仏法の大意を尋ねた。懷璉の応答は皇帝の心に適^{たいがくぜんし}い、「大覚禪師」の号が与えられた。このとき北中国の仏教者^{めい}は名や相^{そう}の議論、あるいは因果を説くばかりで、優れた知性を持った人々はそれを詰まらないものだと軽んじ、仏教は外国の愚かしい教えだと非難していた。懷璉だけはその妙所^{こうし}から孔子や老子^{らうし}の思想と合致するところを取り出し、その言文は真理を表して、その振る舞いは峻巖かつ自在であったので、士大夫^{しだいふ}は喜んで懷璉のもとを訪れるようになった。官の仕事が休みの日には、懷璉が起きてまだ顔を洗わないうちに、扉の外に訪れた士大夫の脱いだ履物がずらりと並ぶほどであった。仁宗皇帝は師弟の関係をとらずに自ずと懷璉^{みち}から道を得た。仁宗皇帝は懷璉^ほを頌める詩十七篇を作って贈った。

至和年間^{しわ}に懷璉は山に帰ることを願^{にょによたい}い出た。皇帝は「山は即ち如如体である。いったいどこに帰るのか」(法の前では山にいても都にいても同じであるといった意味か)と言っで許さなかった。治平年間^{じへい}に懷璉は再び強^{えいそう}く乞い、英宗皇帝は都に留めておくことはできないとみて、好き^{ちやうこう}なところに行つてよいとの詔を下した。懷璉は長江を渡り、し

ばらく^{さんざん}金山に留まり、西湖^{せいこ}に遊び、ついに四明^{しめい}にある阿育王山^{あいくおうざん}広利寺^{こうりじ}に入った。

四明の人々は力を出し合って大閣^{だいかく}を建て、仁宗皇帝^{にしようし}が賜った頌詩^{しょうし}をそこに納め、「宸奎^{しんけい}」の文字をその上に掲げた。ときに都では宝文閣^{ほうぶんかく}を建てたばかりで、仁宗皇帝^{にしようし}の頌詩^{しょうし}の副本^{ふぶん}を広利寺^{こうりじ}に求めてそちらにも納めた。そして広利寺においては一年に一人の僧を得度するよう命じた。

懷瑾^{わたいこん}が山に帰って(広利寺に入って)二十三年、八十三歳のときに臣^{こん}が杭州知事^{こうしゅう}になると、懷瑾^{わたいこん}の弟子^{しんけいかく}がきてこのように告げた。「宸奎閣^{しんけいかく}にはいまだに銘がありません。あなたは仁宗皇帝^{にしようし}にお仕えし、吾が師とも旧くからの交流があります。きっと辞退^{しんたい}なさいませんでしょう」

臣^{わたいこん}が謹んで考えるに、昔から君主で仏教を知る者^{かん}といえば必ず漢^{めいてい}の明帝^{りょう}、梁^{りょう}の武帝^{ぶてい}が挙げられ、二人は常に口に仏典を唱え、仏陀の像を壁に掲げていた。しかし、漢の明帝は「明」というよりは疑い深く、梁の武帝は「武」というよりは軟弱であった。名ばかりで実を失い、また仏の教えからもはなはだ遠いものがあった。恭しくも仁宗皇帝は在位四十二年の間、僧尼をやたらと増やすこともなく、おやみと寺廟を立派にすることもなく、亡くなられたときには天下の人々はその仁を深く思ったのであった。まことに仏教の心法を得た古今一人の皇帝であった。

懷瑾^{わたいこん}は世の外に出た僧であったが、非常に厳しく規律を守った。皇帝がかつて竜腦鉢盂^{りゅうのうはちう}(貴重な香木で作った鉢)を賜ると、懷瑾^{わたいこん}は持ってきた使者^{しや}に対して、これを焚くよう指示し、「吾が法として、襤褸の衣を着、瓦や鉄の器で食べる。この鉢は法に非ざるものである」と言った。使者は帰ってそのように申し上げると、皇帝はそれを褒

めしばし嘆息した。

銘に曰く、

「巍巍仁皇、体合自然。神耀得道、非有師伝。維道人璉、逍遙自在。禅律並行、不相留礙。於穆頌詩、我既其文。惟仏与仏、乃識其真。咨爾東南、山君海王。時節來朝、以謹其藏。」

(銘は訳し難いので原文をそのまま掲げる。いつか意味を理解できるようになったら訳文を補いたい)

■臨江仙

せんきょう あざな ぼく ふ
 錢勰 (字の穆父) (本章 5 ページなど) を見送った詩。錢勰は都に召され、
 えつ こう
 越州を發つて杭州に立ち寄った。この詞は、1月7日に、錢勰や江公著
 (字は晦叔) 等とともに弁才 (本章 165 ページ) を訪ねたときの作であるよ
 うだ。

一別都門三改火、(都の門で別れてから、^{かんしょく しんか}寒食の新火も三回目となります)

天涯蹋尽紅塵。(天の涯で、浮世の塵を踏み尽したのです)

依然一笑作春温。(変わらずに笑い合えば春の温もりが生じます)

無波真古井、(古い井戸には波立たたず)

有節是秋筠、(秋の竹にはしっかりとした節があるといひます)

惆悵孤帆連夜發、(悲しいことに、今度の夜にぼつんと帆が出て行くのです)

送行淡月微雲。(見送るのは淡い月とほのかな雲)

尊前不用翠眉顰。(酒の前で眉を顰めるのはよしましょう)

人生如逆旅、(人生は旅の宿のようなもの)

我亦是行人。(私もまた旅人なのです)

(蘇軾^{せんきやう}と錢勰^{せんしやく}は同じころに都を出て足掛け3年になる。それで、寒食を終えて最初につける火、新火^{しんか}を見るのも3回になると歌っているのだが、正確には蘇軾^{こう}は杭州にきてまだ1回しか見ておらず、間もなく2回目を見るはずであった)

■送江公著知吉州

上の詞と同じときに江公著^{こうこうちよ あざな かいしゆく}(字は晦叔)のために詠んだ送別の詩。江公著は都での任を終えたいったん郷里^{とうろ}の桐廬^{こう}県(杭州に属している)に帰り、今度は吉州^{きち}知事として赴任することになった。

貴君^{さんご}は三呉の千の山水を行き尽くしたけれど、

なお故郷^{こきやう}の桐廬こそが清く美しいという。

桐廬は、濁った世には狂奴と称された高士^{ごかん げんこう}(後漢の嚴光)が隠れたただけでなく、

平穏な時代には佳き公子^{よ こうこうちよ}(江公著)を生んだのだ。

貴君は初めに刑獄の役人となり、

後に都に召され、さらに重職を担うかというときに、

郷里の川で汚れた耳を洗うこととなった。

しかし、大工の名人は良木を決して棄てることはなく、

名馬は千里を走れるか試されずにいることはない。

官舎に親を迎え入れるには、行き先としてよい場所を選ぶべきであるが、

ちやうこう
長江の南の地を得たのだから喜ばしいではないか。

きち
吉州は繁華の地、

白い米を満載した船が一万の帆柱を連ね、

紅く化粧した女性が三千の指で音楽を演奏する。

そうなると、公文書に埋もれる貴君も、

閑を得たときには、「人生は行楽あるのみ」ということもきっと思うであろう。

■与葉淳老侯敦夫張秉道同相視新河秉道有詩次韻二首

蘇軾はなかなかの土木好きで、次の事業計画を練り始めていた。せんとうこう 錢塘江の

出口にはたえず形を変える砂州（ふざん 浮山）があり、河口付近を南北に横切ろ

うとする船が座礁する事故が頻繁に起きていた（本章 76 ページ）。ようおんそう 葉温叟

（字は淳老）、あざな 侯臨（字は敦夫）、こうりん 張弼（字は秉道）の3人が、新しい運

河を掘削して船を上流に迂回させることを提案し、蘇軾はその3人と

ともに現地を視察した。張弼が詩を作ったのでそれに次韻した。2首のうち

1首を訳す。

其の一

誰もが知るように、

かつて呉越王が元帥府の前に兵士を並べ、

暴れる浪頭に向かって千の矢を射てより、

今に至るまで錢塘江は静まり、

鳳凰山から一箭を放ったような大道の左右へと杭州の街が広がった。

私は西湖を浚渫して元の姿に戻し、

街から西南に見渡す限りの碧い水が広がるようになった。

いままさに、浮山の危険を克服し、

千の船が、夜でも南に北に自在に行き来できるようにしようとしている。

上中下の三策が提案されて議論し、

ここに決断するなら、あとは私が計画をまとめるだけである。

ところが、この私は老病の身、

帰郷しようと思いつつここに寄せているだけなのだ。

功名はもとより幻のようなもの、私が得られるものではない。

笑ってしまうのは、私はいつも蛇足を描いてばかりいて、

鶏の骨を食らうような無駄なことを思ってしまう。

困ったことに、どうやら諸君等の嗜好にも迂闊なところがあり、

私の詩をやたらと喜んだりしてくれる。

世間における私の仕事はほぼ終わって帰るばかり、

あとのことは若い人たちにどうにかしてもらわなければならない。

私はというと洞霄宮どうしょうきやう(杭州にある道観)に隠れて、
仙薬の調合でもしていようかと思っている。

(① この詩を見ると、新たな土木事業に対して蘇軾はそれほど積極的ではないようにも見えるのだが、それはあくまでも詩の趣向としてそのように歌ったままで、新重可建設の計画提案書をきちんと取りまとめて3月初めに朝廷に提出する。② 続く第二首では、さまざまな故事を引用して大土木工事に挑む心構えと、提案者3人への期待を歌っている)

■次韻劉景文路分上元

劉季孫りゆう き せん (字は景文あざな けいぶん) が上元じょうげんの賑わいを詩に詠み、それに次韻した。1月15日の上元節に灯籠を飾ることはなどはすでに見ているが、杭州こうでも華やかな年中行事となっていた(第4章90ページ)。

輝く燈籠は困難であった歳を終わらせ、
澄んだ満月が天空に掛かっている。
三呉さんごの地は季節の行事を重んじ、
至るところの街筋で歌いかつ舞っている。
冬至から幾日になるのかというと、
もう一百五に至ろうとしていて、

指を折って数える日ごとに、楽しいことが続く。

今宵は雲が掃われ、

目の極まるどころ、天はどこまでも浄らかである。

喜び遊んで誰もが帰るのを忘れ、

近頃見ないくらいに人が充満している。

竹竿の先に丸い燈籠を付けて振り回せば、

光が水を掛けあうかのように四方に飛び散る。

我等も、老いて子供に返る譬えの通り、

家に帰ってからも銅鑼や太鼓を叩いてはしゃぐのである。

年の暮れから糸を添えるようにして日が少しずつ長くなり、

新たな年のいまは雪も消えて春となった。

いつか貴君とは九江城で、

二人の漁父となって一緒に釣りをしようではないか。

（(1) 冒頭に「困難な歳を終わらせ」とあるのは、気象災害が食糧危機に発展しつつあるなかでの願望である。(2) 「竹竿の先に丸い燈籠」と訳した部分の原文は「飛毬互明滅、激水相吞吐」(飛毬互いに明滅し、激水相い吞吐す)で、毬のような燈籠を、投げるか竿の先に付けるかして、水を潜らせる光景を歌っているという解釈も可能であろう。(3) 最後の「九江城云々」は唐突な終わり方で、何のこともさっぱりわからないだろうと、蘇軾自身が注を付記している。それには「私は廬山に住まいを得たい思っていて、劉季孫は近頃江州に住まいを買った」とある。蘇軾は、詩の終わりに置くべ

き「父」という韻を使うのに「漁父」とすればよいと思いつき、両地点からほど近い九きゅう江城こうじょう じんよう（潯陽）で落ち合って釣りでもしようという句をひねり出したのだ。（4）この詩は、杭州の上元節じょうげんせつの賑わいを詠んでいるのが面白いので訳したのだが、杭州よりも圧倒的に賑やかであったはずの都の上元節（第3章40ページ）を礼賛するような詩は第10章で見ることになる。ただし、さほどおもしろいものではない

■法穎

この年の上元節じょうげんせつにあったことを数年後に記した文章。

法穎ほうえい沙弥さみは参寥さんりょうの弟子である。七、八歳のときから師に仕え、すでに成人のようであった。

上元じょうげんの夜に、私が寺で燈籠を見て楽しんでいると、法穎が一人の男の肩に乗って見物していた。私が、

「出家児おほうちやまもまた燈籠を見たいですかね」

と言うと、法穎はさっと顔色を変え、身を容れるところがないようなありさまになり、經文を唱えつつ去って行った。

これより法穎は遊びに出ることがなくなった。

あれからもう六、七年となり、後には参寥さんりょうを嗣ぐ僧つになるであろう。

（このとき法穎はまだ少年で、体が小さかったのだろう。蘇軾ははらかい気味に

「出家児チューチャー」と呼びかけた（大人の僧なら「出家人チューチャーレン」である）。蘇軾の一言が法穎にと

って熱いお灸となったのだった)

■浣溪沙

ばいていろろ 梅庭老が潞州ろの学官として赴任するのを見送った詞。梅庭老の詳しいことはわからない。

門外東風雪灑裾、(いま、門の外は春の風なのに、裾には雪がそそがれます)

山頭回首望三呉。(あちらでは、山の上に登り、三呉さんごに地へと首を向けることでしょう)

不応彈鋏為無魚。(魚さえも食えないと、不遇を嘆くようなことはしないでください)

上党従来天下脊、(上党じょうとう潞州のあたり)は昔から天下の背骨といわれています)

先生元是古之儒。(先生いしは古の儒者のようなお方)

時平不用魯連書。(高い節義の持ち主は平和なときには用いられがたいのです)

(学官は低い地位で、梅庭老としては不満だったのだろう。蘇軾はいくつかの故事を引いて、慰めかつ励ましている)

■浣溪沙

これも送別も詞。新運河建設を提案していた葉温叟ようおんそう (字は淳老あざな じゆんろう) は、都に召されて 2 月こに杭州を去った。蘇軾と葉温叟は同じ年の科挙に合格したいわゆる「同年どうねん」であった。

陽羨姑蘇已買田、(私は陽羨に、貴君は姑蘇(蘇州)にすでに田を買っています)

相逢誰信是前縁。(こして逢ったのも前世からの縁によるものなのでしょう)

莫教便唱水如天。(月の光は変わらないのに、かの人はいないと嘆くのはよしましょう)

我作洞霄君作守、(私が道士の住まいを作ったなら、貴君はそのこの主です)

白頭相對故依然。(白髪頭にはなっても昔のまま向き合おうではありませんか)

西湖知有幾同年。(西湖もさすがにここまで仲の良い同年は知らないでしょう)

(蘇轍が陽羨に土地を得たことは第7章 180 ページなどで見ている)

■次韻楊公濟奉議梅花十首

新たに杭州副知事となった楊蟠(字は公濟)が梅の花に寄せる詩を詠ん

だのでそれに次韻した。10首のうち4首を訳す。

(楊蟠は袁轍と交替で赴任したようだ)

其の一

梅の梢で春の色がわずかに動き始めた。

造化の作意は南側の枝により多く注がれるのだろうか。

月明かりのない夜に不意に出逢ったのは、

もしかして梅の花の神女だったのだろうか。

其の三

黒髪豊かな少年が春を尋ねてから湖畔に返り、

ばんしょうれい
万松嶺のあたりでひと枝開きました、と言う。

木には老いても霜に耐える根があるので、

再びかの人(蘇軾)が来るのを見ることができたのである。

其の六

貴君は知っていよう、早く散るのは、先に開いた花であると。

だから、新しい詩を次々に作って花をせかしたりしないでくれたまえ。

嶺の北の枝は最も思いやりがあるのだろう、

寒さをこらえて花を散らさずに知事殿(蘇軾)が来るのを待っていてくれるだから。

其の八

冬の雀は声ばかり騒がしくて、凍りついたかのように高くは飛べない。

林を低くめぐってまだ花のない枝をついばんでいる。

雀こそ実は風流の心が深いのである。

燕はいくら情愛深いといっても、得手の季節には梅の花はもうないのだから。

■再和楊公濟梅花十絶

ようはん あざな こうさい
 楊蟠（字は公済）の梅の花に寄せる詩にもう一度次韻した。同じ並びの
 4首を訳す。

其の一

一つの枝に花が開くと風物はもう和やかになる。
 千の林を見尽くしてもまだ多すぎることはない。
 この執着心が消えるのなら、花びらが衣に落ちてこようが気にならなくなり、
 梅の花の神女も私に対して知らん顔をするだろうに。

其の三

髪が白くなり故郷の家を想いいつも、千里離れたところをめぐるている。
 小さな家が水面に臨んでいるのは花のためであろう。
 きっと千首の詩を作るべきなのだ。
 何しろ思いが次々に湧いてきているのだから。

其の六

霜降る朝に、まだ開かないと恨んではならない。
 時が進めば頭の白さも増えて行くのだから。
 ようやく咲いた一つの花が風に揺れているのは、

ちょうど美しい人が西の軒端で月を待っているかのようだ。

其の八

湖面を見ていて、花が片片と飛ぶのに驚かされる。

酒の前において、最も花がたくさんついた枝が吹き折られてしまう。

この春の風は本当は何を思っているのだろうか。

細やかに降る雨の中で梅の実が黄色く熟して行くころが、実は苦手なのだ。

■謝関景仁送紅梅栽二首

官員仲間の関景仁かんけいじんが紅梅を植えてくれたのでその謝礼の詩。

其の一

紅梅のよい香りとは、毎年のように巡り合わせが悪い。

川べりでは、枝を垂れてもう咲き出そうとしているとか。

ありがたいことに、貴君は思いやりがあるお人、

根もやさしく掘り出して春をここに届けてくださった。

其の二

貴君は言われる、

「あなたのために、南堂なんどうと向かい合わせに植えました、

きっとそのうち実をつけるようになりましょう、

梅酒の酸っぱさは多くの人の口には合わないでしょうけれど、

知事殿は風味のわかるお方、眉を擧めてお飲みあれ」

(梅の花を詠んだこれら一連の詩に蘇軾の感覚の細やかさを見て取ることができるだろう。再び杭州の風光に触れて1年余りとなり、都にいたころとは違う穏やかな精神状態になってきたということなのだろう)

■遊宝雲寺得唐彦猷為杭州日送客舟中手書一絶句雲山雨霏微不滿空画船来往疾輕鴻誰知独臥朱簾裏一榻無塵四面風明日送彦猷之子垌赴鄂州舟中遇微雨感嘆前事因和其韻作兩首送之且歸其書唐氏

長い詩題は次の通り。「宝雲寺に遊んだところ、唐詢が杭州知事であったときに、客人を送って舟の中で手づから書いた一首の絶句を得た。その詩は『山雨霏微不滿空、画船来往疾輕鴻。誰知独臥朱簾裏、一榻無塵四面風』

(山雨 霏微 空に満たず、画船 来往 輕鴻より疾し。誰か知らん 独臥す 朱簾の裏、一

榻 塵無く 四面の風)。翌日、唐詢の子の唐垌が鄂州に赴くの見送ったところ、舟で小雨に会い、先の詩の心がわかった。それでその韻に和して二首

を作って送別の詩とし、合わせて唐詢の書を唐の家に帰した」。唐詢(字は彦猷)は仁宗皇帝時代の官僚で、その子の唐垌(字は林夫)とは蘇軾は

かねてから交流があった(第7章111ページなど)。

其の一

唐詢とうじゅんとその弟の二人の妙手を失ってから、天下の筆法は空しくすたれてしまった。
しかし、雲海おおどろに鴻が群れて戯れるような貴君の書に、すぐに驚かされたのだった。
御父上のすばらしい詩を我が家の囊ふくろの中に納めておくようなことはしない。
これを見れば、貴君の筆法は御父上を受け継ぐものなのだと人は言うだろう。

其の二

出処、栄枯、そんなものは一笑すれば空くうとなる。
十年などは、春の燕と秋の鴻おおどろの入れ替わる間のこと。
まさか白髪頭となった私が、杭州こうの運河で、
かのときに人を見送ったのと同じ風に吹かれるとは。

■次韻曹子方運判雪中同遊西湖

曹輔そうほ（字は子方あざな しほう）と雪の降る西湖せいこに遊び、曹輔が詩を詠んだので、それに次韻した。曹輔は官員仲間で地方官の任を終えて杭州こうに帰ってきたところだった。

詞の源水が濼ゆらゆらと波の上に広がる。
清らかに唱える声が山並みに満ちてゆく。

雪がいくら積もっても、貴君の句の高みにまでは及ばないし、
 湖がいくら広くても、貴君の句に誘われた心はそれよりも速くと及んでゆく。
 雲をまとう山は、淡く化粧をした美人の眉のよう、
 山から流れる水は、碧く澄んだ美人の眼のようだ。
 酒樽の前にある肴は新しい詩だけ、
 とすると、我等は書物の間にいて紙を食らう書魚しみと同じなのだ。

■次韻仲殊雪中遊西湖二首

蜂蜜好きの僧である仲殊ちゆうしゆ（本章122ページ）と雪の降る西湖せいこに遊び、仲殊が詩を詠んだので、それに次韻した。2首のうちの1首を訳す。

其の二

宝雲寺ほううんじには楼閣が並んで千もの門がある。

林は静かで騒ぐ一羽の鳥もない。

門戸を閉ざし、風が地上の雪を掃わないようにする。

簾を巻くと、軒に月が射すかと疑われる。

西湖せいこを見渡せば、

水光激灩すいこうけんえんとして猶お碧なを浮べ、（水辺はまた明るく青いが）

山色空濛さんしよくうもうとして已すでに昏こんを斂おさめる。（山はすでに暗いたそがれの色である）

晋しんの恵休えきゆうのような仲殊ちゆうしゆの句を得て、

晋の謝安の子が雪を塩や柳絮に譬えたのは実に陳腐であると知れた。

(1) 途中、読み下し文を掲げたところは、蘇軾が副知事時代に詠んで最も人口に膾炙した次の絶句(第4章93ページ)からサビの部分をもそのまま引用している。

水光激瀼晴方好、(水光激瀼として晴は方に好く)

山色空濛雨亦奇。(山色空濛として雨も亦た奇なり)

欲把西湖比西子、(西湖と把って西子に比せんと欲するなら)

淡妝濃抹總相宜。(淡妝濃抹総べて相宜し)

懐かしの名曲を当の歌手が歌えば誰もが喜ぶように、蘇軾自身が名詩を引けば拍手喝采となる。蘇軾の旺盛なサービス精神のなせるわざである。(2) 終わりの部分は晋の時代の故事を引いて仲殊を褒めたもの。謝安は、息子が降る雪を塩に、その妹が柳絮に譬えたのを見て、妹の方を褒めたのだが、仲殊の詩の前ではどちらも陳腐であると言ったのである。(3) 仲殊はこの後、間もなく蘇州に行ったようだ

■題所書東海若後

柳宗元の作品『東海若』を筆を執って書いて、この短文を添えた。『東海若』は東の海の神様が莊子の哲学や仏教について語る寓話。

柳宗元が作った『東海若』の一篇を書いて石に刻み、浄住院の無量寿仏堂に置きたいものだと思っていた。

元祐六年二月九日、海陵の曹輔、開封の劉季孫、永嘉の侯臨ととともにその堂

に集まり、ついに『東海若』を書いて僧に遺し、これによって石に刻むよう言った。

(1) ここに名を挙げてある曹輔そうほはすぐ前の諺ことわざにあり、劉季孫りゅうきそんはすでにたびたび登場し、侯臨こうりんは本章178ページで見ている。(2) 蘇軾そくは49ページでも触れたように、このころ柳宗元りゅうそうげんへの関心を強めていたようで、次のような文章も作っている)

■二魚説

河豚ふぐと烏賊いかの寓話。序文がある。

序

私は柳宗元りゅうそうげんの『三戒さんかい』を読み、これを愛した。そのかたわら、世間のありさまを嘆いてやたらに怒った人が後に悔くわいいを招いたり、過ちを覆い隠そうとしてかえって失敗したりするのを見てきた。

杭州こうに来て水辺の人から二つの話を聞いた。それは以上のことと通じるものがあった。そこで『二魚にぎょの説せつ』を作った。これは柳宗元を継ついでごうとするものではなく、自分への戒めとするのである。

(唐とうの柳宗元りゅうそうげんの『三戒さんかい』は鹿と驢馬ろまと鼠ねずみを主人公にしたイソップ物語のような寓話である)

河豚ふぐの説

河の魚でその名を豚とんというものがいた。橋の間を泳いでいて、柱にぶつかった。そ

れより遠くに行けないので、ぶつかった柱に腹を立てた。頬を膨らませ、怒りで腹をいっぱいにした。そのために腹がぱんぱんになって、河豚は浮かび上がり、そのまま動けなくなってしまった。鳶が飛んできてそれを攫い、その腹を裂いて食べた。この話からわかるのは：河豚は泳ぐのを好み、止まることを知らなかった。そして、泳いでいて柱にぶつかったのが自分の失敗であるとは思わずに、やたらに怒った。結果として腹を裂かれて死んでしまった。なんと悲しいことではないか。

烏賊の説

海の魚でその名を烏賊うどくというものがいた。烏賊はよく泡を吹く。岸边で海鳥うみがらすが遊んでいた。烏賊は自分が見つけられてしまうのを恐れ、泡を吹いて体を覆った。海鳥はそれを見て、そこに烏賊がいると察し、それを攫った。

この話からわかるのは：烏賊は自分を覆って命を全うさせることだけを知っていて、覆えばかえって疑われることになるのを知らなかった。ああ、悲しいではないか。

(序文で、「自分への戒めとする」と書いた意味は明らかであろう)

■ 椶櫚

椶櫚しゅろ（棕櫚）は初夏の頃に、葉の間から穂状に垂れる花の房を出して、小さな多数の黄色い花を咲かせる。その蕾は食用になるということがこの詩の序文に記されている。

椶筍(シュロの花の房)の形は魚のようである。これを刮さとなかに魚の子(卵)のようなものがあって、味は筍たけのこのようで、苦いけれど甘い芳しよくじんりもある。蜀人はこれを仏に供え、僧ははなはだ珍重する。しかし、南方の人はそのようなことを知らない。椶筍は膚ひらう虱(シュロの葉)の中に生じるが、花が膨らむ前の一月から二月の間に剥ぎ取らなければならない。それを過ぎると苦みと渋みとで食べられない。これを取っても木には害にならず、食べるのにはよるしい。食べるためにはよく煮る必要があり、それも筍とほぼ同じで、蜂蜜で煮たり酢に浸したりすると千里の外に飛んで行ってしまいうまいのうまさである。今これを殊しよ長老に贈る。

(殊しよ長老とは蜂蜜好きの仲殊ちゆうしよのことであろう。以下の詩は、魚の卵のようだという一粒一粒を木魚もくぎよに譬えて詠んでいる)

貴僧に贈るこれは三百の木魚もくぎよ、
 中にあるのは、鶯鳥の雛のように黄色で、魚の卵のように旨いもの。
 椶櫚しよろの葉やしやは夜叉の髪かみだとか……
 その夜叉が己こがの癭こぶを割いて甘みを分けてくれたのだ。
 筍たけのこは竜の孫を包み込んだものだとか……
 その竜がまだ頭を出さずに旨さを与えてくれるのだ。
 よろしければ野菜と一緒に食べられよ、
 山林で無駄に散らせるのはもったいない。
 どうして木魚なんぞを食べているのかと聞かれたなら、

「^に煮ても鳴かないものでありますから」と答えるとよい。

(これは戯れの詩で、最後の部分はかなりひねったオチになっているようで、よくはわからないが、次のようないくつかの事柄を踏まえているのだろう。①僧であるから魚は食べてはいけない。^{もくぎょ}②木魚に譬えた棕櫚の蓄なら^{しゆろ}食べても構わない。③木魚は叫けば鳴るが、煮たのでは鳴らない。④『莊子』に、^{そうじ}二羽の雁のうち鳴かない方が煮て食べられてしまったという寓話がある(普通は、下手に才覚を示すとひどい目に遭うということを戒めるのだが、この寓話は才能がなくてもやはりひどい目に遭うという皮肉を言っている)。まさにそれと同じで、鳴らない木魚である棕櫚の蓄は食べられてしまう。⑤以上のようなことを合わせ見るとなんとなくおかしいということなのだろう)

■辞免翰林学士承旨

1月28日、蘇軾^{かんりんがくし}を翰林学士として都に召還するとの詔書が到着した。翰林学士は学術をもって皇帝を補佐する集団の最上位に属する者に与えられる称号で、そこから副宰相、宰相へと昇進する例が多い。実に光栄なことであるのだが、蘇軾はすぐに辞退することを申し出るこの文書を朝廷に提出した。特別に抜擢されるとよく謙遜して一度は辞退するポーズをとったりするのだが、この文書は蘇軾の本心を表すものである。

右の臣は^{わたし}今月二十八日に^{かんりんがくし}敕書を頂戴しました。臣を翰林学士承旨^{ししやうし}左朝奉郎^{さちやうほうろう}知制誥^{せいこう}にするとのこと、詔書が到着した日に公務の引き継ぎを行い、馭馬を使って

速やかに都に向かえとありましたので、臣はその日のうちに公務の引き継ぎを行いました。

伏して念いますに、臣は近頃、両眼ともによく見えなくなり、左の臂が不調でありますので、朝廷に入りますのを堅く辞退し、どこかの郡において任に就くのを願うものであります。できれば静かに退いて衰えた身を少しく養いたく思っております。杭州こうに参りまして二年になりますが、一事も成し遂げたものはなく、我が才能は限りがあってこれ以上にはなりません。一方で病は減るどころか増えるばかりです。ただ東南の地は連年の災害を被っておりますので、敢えて退職を乞うのではなくて別の郡を求めるものであります。仁聖のなお恩憐を賜ることがあって、もと通りの官にしていただけなら、新たな寵愛を加えてくださることとなりましょう。朝廷の公議に課題があろうことは存じておりますが、衰病のために前に進むことができません。その上、朝廷からの報せを拝見しますに、臣の弟の蘇轍しゅうしやう じやうが尚書右丞(副宰相)になるとのことでありますから、兄弟が揃って朝廷に並ぶようなことは避けるべきでありまして、私の家が繁栄し過ぎるのは実に懼れなければなりません。これは御恩によって身を誤り、必ず安らかなところにはおられなくなるであります。

伏して聖慈を望み、臣を一郡の知事に任命して下さいますように。多くは申しません。臣はこれより杭州を發ちます。宿州、泗州の間で新たな御指示を頂戴したく思っています。謹んで教旨への御返事を申し上げます。

■送小本禪師赴法雲

同じ頃に都に召された僧がいた。これは、小本禪師しょうほんが都の法雲寺ほううんじに赴く
のを見送った詩。小本禪師こうとは杭州の浄慈寺じょうじの善本ぜんほんであるという。善本
はもとは儒学を学んで都で科挙の試験を受けたのだが、華嚴経け こんきょうを読んで
思うところがあって仏門に入り、浄慈寺えんじょうの円照禪師そうほん宗本の弟子となった。
それで宗本を大本、善本を小本というようになった。都の法雲寺ほううんじの法秀
禪師が亡くなり、その後継者として善本が呼ばれて、大通禪師だいつうの号を皇帝
から与えられた。

形を天地の間に寄せているからには、
出るも処るも必ず役目というものがあるのだろう。
安らかに過ごして何もすることがないのなら、
百年の一生は何によって全うさせられるのか。
山林に隠棲しても憂患はあるだろう、
朝廷で政治を見るのも戯れの劇を演じるのと同じだろう。
私はまだ帰休できずにいるのだから、
師もまた安逸に過ごすわけにはいかないのではなからうか。
王城には豪傑が満ち溢れ、
黒だ白だの議論が尽きることがない。
仏法の第一義が何かと皇帝に問われて、

だるま し
達磨大師と同じように「識らない」と師も答えるのだろうか。

師が都に来ることを何にたとえたらよいのか、

青い大空に掛かる一つの月か。

人の身は浮かぶ雲のようなもの、

南か北に行くだけとは限らない。

山を出たらもとより無心、

雨を降らせたなら帰るのである。

せいこ
西湖との旧くからの約束があるのだから、

いつかの年にきっとまた錫杖をここの林に掛けることになるだろう。

■南歌子

上の詩で見た小本しょうほん禪師（大通だいつう禪師）との間にあったとされる楽しいエピソード。真偽のほどは、作り話だであると 100 パーセント言い切るのにはためらいがあるというレベルであるようだ。宋代の恵洪えこうの隨筆『冷齋れいさい夜話』に「東坡とうぼが杭州知事であったとき、西湖せいこにいない日はなかった。あるとき妓女を連れて大通禪師に会いに行った。大通禪師の顔に怒りの色が浮かんだのを見て、東坡は詞を作って妓女に歌わせた」としてこの詞が記されている。

師唱誰家曲、（師は誰の家の曲を唱えておられるのでしょうか）

宗風嗣阿誰。(そちらの教えは誰から継がれたのでしょうか)

借君拍板与門槌、(拍子を取る板と槌をお貸くださいませ)

我也逢場作戲、(私も戯れの説法くらいならしてさあげます)

莫相疑。(ちゃんといたしますとも)

溪女方偷眼、(谷川で女が見初めたからといって)

山僧莫貶眉。(山のお坊さま、眉をひそめませんように)

卻愁弥勒下生遲、(百千万億劫ごうの後に世界は空になると、弥勒菩薩みろくぼさつはおっしやいましたっけ)

不見老婆三五、(そのときになってこの老婆にも若く美しいときがあったと)

少年時。(嘆いても遅いのですよ)

((1) 終わりの3行は意味が掴めないので、思い付きの「ずっぽ訳」である。(2) この詞は蘇軾が作ったとみなしても絶対的に誤りとはいえないのかもしれないが、ついでに蘇軾が作ったとみなす勇気を持ち合わせている人は恐らく誰もいないという詞を見ておこう。そんなものでも蘇軾の真作であると一部で信じられていたのは、世人が抱く蘇軾のイメージにぴったりだからなのだろう。明代には蘇軾みんやその妹(実在しない)が活躍する小説が作られ、庶民はむしろそちらの方から蘇軾を知ったのだった。ここに訳すのはやはり明代の余永麟よ えいりんの隨筆『北窓瑣語』ほくそう さごに記されているもの)

杭州の靈隱寺の僧の了然りょうぜんは妓女の李秀奴りしゅうどに恋をし、通い続けて衣鉢をすっかりはたいてしまった。李秀奴は関係を絶ったが、了然の恋の迷いはやまなかった。ある夜、了然は酔

いに乗じて李秀奴のところに行った。李秀奴が中に入れようとしなかったので、了然是怒って李秀奴を殴った。李秀奴は撃たれて死んでしまった。事件は役所に知らされ、時の知事は蘇軾であった。了然是獄に送られ、取り調べを受けた。了然の体には刺青があり、「但願生同極楽国、免教今世苦相思」(ただ願うのは一緒に極楽に生まれ、この世での恋の苦しみから免れること)とあった。蘇軾は判決を詞で言い渡した。

這個秃奴、(この^{はげ}禿め)

修行忒煞、(てたらめな修行をしおって)

靈山頂上空持戒。(靈山^{れいざん}の頂上で戒律をだめにしてしまった)

一從迷戀玉樓人、(色里の女にひとたび血迷ってからは)

鶉衣百結渾無奈。(衣はぼろぼろのすってんてん)

毒手傷人、(その毒の手で人を傷つけ)

花容粉碎、(花をこなごなにしてしまった)

空空色色今何在。(空^{くう}即是色^{せしき}云々と唱えたのは何だったのだ)

臂間刺道苦相思、(恋の苦しみなんぞと刺青をしおったからには)

這回還了相思債。(ここはもはや恋の償いしてもらえない)

了然是直ちに斬られた。

■朱照僧

こちらは上の破戒坊主と違い、いたって真面目な小坊主について記した短文。

朱氏しゆの子の名を照僧しょうそうという。幼こくして父を喪い、その母の尹氏いんは息子を出家させることを願ねがひ、守素しゆそを師とした。守素さんりようは参寥の弟子である。照僧は九歳、振る舞いは大人おとなのようで、『赤壁せきへきの賦』を誦して、鶴のようにからりとした声を響かせる。十年も経たないうちにその名が四方に聞こえるようになるだろう。照僧は参寥ほうせんの法孫であり、東坡門下の僧でもある。

(蘇軾せきへきの『赤壁の賦』を誦んじて唱えることができるので、我が門下生だといっているのだ)

■鐘守素

上の文でその名を記された守素しゆそについての短文。

参寥さんりようのもとにいる行者の鍾守素しょうしゆそは参寥に仕えて幾年にもなるが、いまだに過失があるのを見ない。私はそつとその行動を見守って察するに、高遠こうえんの者を慕こう意があるようである。参寥が言うには、「秦観しんかん様は、交友関係のある三十人に十貫ずつ出してもらって度牒どちようを買い、人を出家させようと考えておられます」と。私は人の善行を喜び、参寥は人に対して不善をしない。それでこれを書いて守素に与えるもの

である。

(これはつまり、秦観しんかんが集める資金しゆそによって守素を出家得度させる仲立ちを買って出たということであるのだろう。正式の僧尼になるには朝廷が出す認可状どちようである度牒がなければならぬ。朝廷は一枚の紙を出すだけで大金に化けるわけで、蘇軾はその仕組みを使って様々な公共事業を展開する資金を得たのだった)

■阿弥陀仏頌

蘇軾あみだぶつは阿弥陀仏を賛美する歌を作った。序文だけを訳す。

杭州こうの僧えんしやうの円照律師は西方極楽世界の阿弥陀仏あみだぶつに帰依するよう遍く人々に勧めている。眉山びざんの蘇軾の亡き母の程氏ていの遺品たまに珮かんざしの付いた簪かんざしがあり、職人に命じてそれに仏画を描き、もって父母の冥福を祈ることにした。慎んで再拝稽首してこの頌歌を献じるものである。

(円照えんしやう律師に母の遺品を寄進して両親の冥福を祈ったのである。宋そうという時代は、思想的には何でもオーケーで、仏教も禅だろうが阿弥陀信仰あみだだろうがその境目は特にないし、阿弥陀仏に冥福を祈るのは、先祖が冥界で安楽に過ごせるように子孫が捧げものをするという中国の伝統的な死生観と合致してもいる)

■与某宣徳書

宣徳郎せんとくろうという官階にある某氏(姓名は不明)に与えた手紙。蘇軾が疫病対

策として病院（病坊）を作ったことは本章 74 ページで見たが、某氏が贈ってくれたお金を病院の運営費に充てようというのがこの手紙の内容。某氏はなかなか裕福な人であったのだろう。

お使いの方から金五両、銀一百五十両を受け取りました。

私が黄州から汝州へと移ったときにも 賸として厚く御支援くださいましたが、その当時は飢えと寒さと隣り合わせでありましたので、辞退はいたしませんでした。いまは忝も陛下にお仕えする身で、暮らし向きもかつかつというわけではありませんので、果たしてこのたびの御厚意はお受けしてもよろしいものやら、どうなのであるでしょうか。しかしながら、せっかくのお気持ちが無にするのは恐らく朋友の義に背くことになりましょう。私はちょうど杭州から移るところでありますので、あなたさまのお心は病坊に寄付させていただきたいと思えます。病坊は私が杭州在任中に設置したもので、いま軌道に乗りつつあります。一年間の収入は米千斛でありまして、それほど多くの人を救えるものではありません。あなたさまの御援助で田を買い、困窮する民衆を養いたいと思えます。このことは国家の施策を推して行くものであるとともに、あなたさまの福寿を増し、引いては私の栄ともなりましょう。きっと御同意くださることと思いい、感謝の念に堪えません。どうかこのことをお胸の内にお納めくださいますようお願いいたします。

■次韻劉景文西湖席上

杭州こうを発つ日が迫りつつあるなか、西湖せいこのほとりに人々が集まり、劉季孫りゅうきそん（字は景文）が詩を詠み、蘇軾が次韻した。

二人の長身の老人りゅうきそん（劉季孫と蘇軾）が立つのは、

西湖せいこを囲む二つの峰のよう。

二人の詩が響き合うのは、

古代の楽器の大呂たいりょと黄鐘こうしやうのよう。

貴君は、常に都を守った魏きの劉楨りゅうていのようにこの杭州の地に残る。

私は、晋しんの陸雲りくうんのような貴君の文才を、遠くから想い見るようになる。

我が白髪は、貴君もまた似たようなものであるのを憐れみ、

かの山は、私がまたここでともに遊ぶのを許してくれるであろうか。

我が官は昔でいえばすでに六百石を越えているので、

自分はもとより六百石以上を求めはしないのだと、

政治の乱れを見て郷里に帰った漢の邴曼容へいまんように恥じねばならない。

■次前韻答馬忠玉

上の劉季孫りゅうきそんの詩に、やはり官員仲間である馬ば▲（字は忠玉、▲は王+咸）が次韻して、蘇軾がさらに次韻した。

浪打つああ大きな山麓から峰の連なりが立ち上がる、
かねてからの善の積み重ねによって自ずと幸いが集まってきているのだ。
よって貴君の子等はかの謝靈運しゃれいうんと同じくおぼついずれも鳳で、
貴君の兄弟じゅんそはかの荀爽と同じくいずれも竜である。
我等はこうして会い、雲が飛ぶようにそれぞれに別れる。
詩の仲間であるから。しばし酒を携えてともに行こうではないか。
西湖せいこはまさに西子せいこに似ている——

ここを去る貴君のために悲しげな顔かたちを容ゆるづっているではないか。

(1) 前半は馬忠玉ばちゆうぎよくを褒めちぎっている。どうやら馬忠玉も杭州こうを去るようである。

(2) この詩でも、蘇軾自身の有名な句「欲把西湖比西子」(西湖せいこと把とって西子せいしに比ひせんと

ほつ 欲するなら) (本章 191 ページ) を引用している)

■木蘭花令

上と同じく馬ばかん▲(字は忠玉あざな、▲は王+咸)に贈った詞。やはり馬忠玉が先に詠んでそれに和したもの。

知君仙骨無寒暑、(あなたは暑さも寒さも知らない仙人のような人)

千載相逢猶旦暮。(千年の歳月も、朝から夕刻までのようなもの)

故将別語惱佳人、(別れの言葉で佳き人を悲しませるまでもなく)

欲看梨花枝上雨。(梨の花に注ぐ雨を見ようではありませんか)

落花已逐回風去、(落ちた花はもう風に吹かれて行ってしまいました)

花本無心鶯自訴。(花はもとより無心、鶯が代わりに鳴いています)

明朝歸路下塘西、(明日の朝は私は杭州こうの西の道を帰って行きます)

不見鶯啼花落處。(花が落ち鶯が鳴くこを見ることはもうないです)

■予去杭十六年而復来留二年而去平生自覺出处老少粗似樂天雖才名相遠而安分寡求亦庶幾焉三月六日来別南北山諸道人而下天竺惠浄師以醜石贈行作絶句

長い詩題は次の通り。「私は杭州こうを去って十六年、再び来て留まること二年、そして去ることになった。平生から年齢を重ねての履歴はほぼ白樂天はくらくてんに似ると自分でも思う。才名は遠く及ばないにしても、分ぶんに安んじて求めるものが少ないのはかなり近いであろう。三月六日、杭州の南北の山の諸僧と別れ、下天竺げてんじくの惠浄師えじょうが醜怪な石を贈ってくれた。三首の絶句を作る」。蘇軾げんゆうは元祐4年7月3日に杭州に着任し、去ったのは元祐6年3月15日ごろであったから、2年には満たない。ここでもまた白樂天との類似を意識している。

其の一

かの年には衫も鬢も青青としていた私に、

きっとまた来られましょと、無理にも言って、

別れの情こころを慰めてくれたのだった。

いま髪は衰えてこれ以上には白くならない、

だから、次に向かい合って語るのは、

来世でなのだろう。

其の二

出処いきさまはそっくり白樂天はくらくてんに似ているようだ。

衰えて朽ちたこの身を昔の賢人に比べるわけではないけれど、

白樂天と同じ官を辞めて洛陽らくように行くのなら、

閑居することなお二十年の歳月があることになろうか。

はくらくてん らくよう
(白樂天が洛陽に隠居して7年の間に洛陽の春を遍く見たと歌ったことは本章103ページで、また蘇軾が白樂天を見習って官職を退いて12年間くらいの閑な時間を持ちたいものだと希望したことは本章111ページでそれぞれ見ている)

其の三

白樂天は、

「杭州にあること六百日、山に入る事十二回」と歌った。

私も前例に倣って杭州にあるのはほぼ六百日、

しかし、山に入ったのは数限りがない。

白楽天は二つの石を持って行き、

私は天竺山てんじくさんの一つの峰えじょう(恵浄えじょうが贈ってくれた石)を持って行こうとしている。

行く先々でそれを植えて、杭州の雲を湧かせようと思う。

(石のことを雲根うんこんという。だからそれを植えて杭州と同じ風光を育てようというのである)

■参寥泉銘

蘇軾こうは杭州を去る前の3月6日に参寥さんりょうに会いに行き、新たに湧き出した泉さんりょうせんを参寥泉と名付けて銘を作った。その序文を訳す。

私は黄州こう謫居となったとき、参寥さんりょうは数千里の道も遠いとせずに黄州にまで来てくれた。年を越えて滞在し、ともに武昌ぶしょうの西山せいざんに遊んだ。私は夢の中で参寥とともに詩を賦し、そのなかに「寒食清明」かんしょくせいめい、「石泉槐火」せきせんかい かの句があった。語としてははなはだ美しいけれども、その意味するところはわからなかった。

それから七年後に、私は知事として杭州こうに赴任すると、そこに参寥がいた。翌年、参寥は智果寺ちかの精舎に入り、さらにあくる年に新たな居所を作った。ちょうど私は寒食の日に杭州を去ることになったので、そのことを告げに参寥のもとを訪ねた。

精舎の下には石の間から湧き出る古い泉うががあった。この月、石を鑿ったところ、泉がまた湧き、水がよりいっそう澄んでいた。参寥は新茶を摘み、泉の水を沸かしてそれに注いだ。私は笑って言った。

「これは九年前に見た夢そのままだ」

一同はみなひどく驚いた。

運命を知らせる何かがあっても、その意味はなかなかわからないものだ。

この泉を参寥泉さんりょうせんと名付け、銘を作った。

(これとほとんど同じ文章を本章 66 ページで見ている、そこには「寒食清明」かんしょくせいめい「石泉」せきせん「槐火」かい かを含む七言の句が掲げられている。そちらの文章によれば、1年前にすでに夢の詩の話をして一同を驚かせていたのだが、杭州こうを去る前に参寥さんりょうに会いに行き、折しもまた寒食が巡り来る時期であったので、再び同じパフォーマンスを試してみたのだろうか。智果院ち かいんの泉を参寥泉さんりょうせんと名付けたのはもっと前のことだが、ここでは新たに石の間から湧き出した泉を参寥泉と呼ぶようにしたと記している。いくつか不審な点があるものの、これ以後、参寥泉は杭州を訪れる文人墨客が必ず足を運ぶ名所となった。なおこの年の清明節は3月14日であった)

■八声甘州

蘇軾さんりょうは参寥との別れに際してこの詞を遺した。

有情風、こころ(情のある風が)

万里卷潮来、(万里の向こうから潮を巻きつつやってきました)

無情送潮歸、こころ(情のない風が潮を送りつつ帰ってしまいます)

問錢塘江上、(問いかけましょうか、錢塘江せんとうこうの川べりで)

西興浦口、(西興せいこうの船着き場で)

幾度斜暉。(日は幾度斜めになったのかと)

不用思量今古、(考えるのはやめましょう、今だ昔だとか)

俯仰昔人非。(うなずく間にも人は過去のものになってしまうとか)

誰似東坡老、(なんと東坡老人とうばは)

白首忘機。(白髪きしんに至って機心(計算高い心)を忘れてしまったのです)

記取西湖西畔、(覚えておいてください、西湖の西のあたり)

正春山好处、(まさに春の山よの好いところを)

空翠煙霏。みどり(翠の山裾にかすみがただよいます)

算詩人相得、(仲のよい詩人を挙げてみても)

如我与君稀。(私とあなたのようなのは希でありましょう)

約他年東還海道、(いつか東の海辺に帰ってくと約束します)

願謝公、(心からの願いで)

雅志莫相違。(この雅な志を違えることはないのです)

西州路、(杭州から外に通じる路で)

不応回首、(首を回らせつつ)

為我沾衣。(私が戻ってこないと泣かせるようなことはしませんから)

(1) 最後の部分は晋の時代しんの謝安しゃあんと羊曇やうどんの故事を踏まえている。謝安は国家の重鎮として都を離れられなかったが、いつか故郷かいくいの会稽えい(越州)に帰りたいと思っていた。会

稽は杭州こうに近く、同じく海に近いので、再び杭州に戻りたいとの蘇軾の思いを謝安の願いに重ねたのである。謝安にかわいがられていた羊曇は、謝安が亡くなってその葬列が歩んで行った都せいしゅうろの西州路に来ると、いつも謝安のことを思って泣いた。参寥を羊曇にたぐえて、しかし自分は必ず杭州に帰ってくるから、参寥を泣かせるようなことはしないと云ったのである。果たして蘇軾は杭州にまた来ることができたのか、それはこれから見ることになる。(2) 蘇軾は都に呼び戻され、わずか2年足らずで杭州を去った。短い在任期間であったけれども、いまなお残る土木事業を成し遂げ、災害の対応に奔走した。知事が土地に深く根を下ろすことがないよう、4年以内に移動させられてしまうのだが、蘇軾自身も土地の人々ももっと長く杭州にいてほしかったと思ったであろう)